

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第6集

西城切通遺跡

2010

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第6集

西城切通遺跡

2010

埼玉県熊谷市教育委員会



序

平成17年10月1日、熊谷市、大里町、妻沼町の一市二町が、さらに平成19年2月13日、江南町と合併して、新『熊谷市』が誕生いたしました。

新『熊谷市』は、南北約20km、東西約14kmにわたり、面積は159.88km²、人口は20万人を超えることとなり、県北最大の都市として生まれ変わりました。新市は、関東平野を縦横に流れる荒川と利根川の2大河川が最も近接する流域に位置し、平坦な地形に肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。

こうした自然環境のもと、新市内には先人たちによって多くの文化財が営々と築かれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証であるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

本書は、旧妻沼町教育委員会において昭和63年に発掘調査を行った西城切通遺跡について報告するものであります。本遺跡からは縄文時代後期の遺物が確認されており、この時期は妻沼低地の自然堤防上に生活圏が進出する初期の段階であります。すぐ南側にあたる熊谷低地では、上之地区において同時代の遺跡が確認されており、本遺跡との関連性が想定されるところです。市域の開発や生活圏の広がりの変遷を考える上でも、本遺跡の存在は非常に重要なものといえます。本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、ご理解ご協力を賜りました福川右岸土地改良区、並びに地元関係者には厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

熊谷市教育委員会
教育長 野原 晃

例 言

- 1 埼玉県熊谷市西城字切通157番地他に所在する西城切通遺跡（埼玉県遺跡番号61- 022）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は県営ほ場整備事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、旧妻沼町教育委員会が実施したものである。
- 3 本事業の組織は、第 I 章 3 のとおりである。
- 4 発掘調査期間は、昭和63年 8 月 5 日から昭和63年12月15日までである。
- 5 発掘調査は旧妻沼町教育委員会荒川弘が担当した。報告書執筆・編集は、熊谷市教育委員会蔵持俊輔が行った。また、熊谷市教育委員会社会教育課の職員の支援を受けた。
- 6 遺物の写真撮影は、蔵持が行った。
- 7 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会にて保管している。
- 8 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関などからご教示、ご協力を賜りました。
特に日本考古学協会員市川修氏には格別なご教示を賜り、遺物の選別・実測から図版の作成について多大なご尽力を賜りました。また、石製品・石器について埼玉県埋蔵文化財調査事業団西井幸雄氏に図版の作成にご尽力を賜りました。記して感謝申し上げます。

（敬称略、五十音順）

浅野晴樹 内田勇樹 小野美代子 金子直行 金子正之 菅谷浩之 土田泰人 森田安彦
宮本久子

凡 例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

- 1 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

縄文土器・陶磁器... 1/4 土製品・石器・石製品... 1/2

- 2 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

赤彩： 瓦質土器断面： 陶器断面：

実測図の中心線は実線で示している。

- 3 遺物拓影図のうち、向かって左に外面、右に内面を示した。

- 4 遺物計測表及び観察表の表現方法は、以下のとおりである。

分量の単位はcm、gである。()が付されるものは推定値、現存値を表す。胎土は、土製品に含まれる鉱物等を以下の記号で、含有量の多い順に示した。

A... 白色粒子 B... 黒色粒子 C... 赤色粒子 D... 褐色粒子 E... 赤褐色粒子 F... 白色針状物質
G... 長石 H... 石英 I... 白雲母 J... 黒雲母 K... 角閃石 L... 片岩 M... 砂粒 N... 礫

- 5 写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

- 6 土製品の色調は、『新版標準土色帖第14版』(小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局編集、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行 1994)を参考にした。

目 次

口 絵
序
例 言
凡 例
目 次

I 発掘調査の概要	1	2 検出された遺構・遺物	8
1 調査に至る経過	1	IV 遺構と遺物	11
2 発掘調査・報告書作成の経過	1	1 縄文時代の遺物	11
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2	2 中世の遺物	83
II 遺跡の立地と環境	3	V 調査のまとめ	85
III 遺跡の概要	8	VI 附編	87
1 調査の方法	8		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	3	第17図 第6号住居跡出土土器(3)	27
第2図 周辺遺跡分布図	4	第18図 2区住居跡出土土器	28
第3図 調査地点位置図	9	第19図 9区第1・2号土坑出土土器	29
第4図 第1号住居跡出土土器	11	第20図 9区・C区第3号土坑出土土器	30
第5図 第2号住居跡出土土器(1)	12	第21図 第4号土坑出土土器	31
第6図 第2号住居跡出土土器(2)	14	第22図 9区第6・7・14号土坑出土土器	32
第7図 第2号住居跡出土土器(3)	15	第23図 竪穴状遺構・16区竪穴状遺構出土土器	33
第8図 第2号住居跡出土土器(4)	16	第24図 1区出土土器(1)	35
第9図 第2号住居跡出土土器(5)	17	第25図 1区出土土器(2)	36
第10図 第3号住居跡出土土器	18	第26図 1区出土土器(3)	37
第11図 第4号住居跡出土土器	19	第27図 1区出土土器(4)	38
第12図 第5号住居跡出土土器(1)	21	第28図 1区出土土器(5)	39
第13図 第5号住居跡出土土器(2)	22	第29図 1区出土土器(6)	40
第14図 第5号住居跡出土土器(3)	23	第30図 2区出土土器(1)	42
第15図 第6号住居跡出土土器(1)	24	第31図 2区出土土器(2)	43
第16図 第6号住居跡出土土器(2)	25	第32図 3区出土土器(1)	44

第33图	3区出土土器(2)	45	第48图	14区出土土器(1)	66
第34图	8区出土土器	47	第49图	14区出土土器(2)	67
第35图	9区出土土器(1)	48	第50图	15区出土土器	69
第36图	9区出土土器(2)	50	第51图	16区出土土器	70
第37图	9区出土土器(3)	51	第52图	17区出土土器	71
第38图	10区出土土器(1)	52	第53图	C区出土土器	72
第39图	10区出土土器(2)	54	第54图	土偶	73
第40图	10区出土土器(3)	55	第55图	土製耳飾	75
第41图	11区出土土器(1)	57	第56图	土製円盤・土鍾	77
第42图	11区出土土器(2)	58	第57图	石製品・石器(1)	79
第43图	11区出土土器(3)	59	第58图	石製品・石器(2)	80
第44图	13区出土土器(1)	60	第59图	石製品・石器(3)	81
第45图	13区出土土器(2)	61	第60图	第1号井戸跡出土遺物(中世)	83
第46图	13区出土土器(3)	63	第61图	第1号溝跡・8区出土遺物(中世)	84
第47图	13区出土土器(4)	64	第62图	妻沼公民館収蔵土器	87

挿表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	5	第4表	土製耳飾觀察表	76
第2表	遺構所在一覧表	10	第5表	土製円盤・土鍾觀察表	78
第3表	土偶觀察表	74	第6表	石製品・石器觀察表	82

図版目次

縄文土器					第28图141・150
図版1	第2号住居跡	第5图2	2区	第31图59	
		第6图45	図版4	9区	第35图27・53
		第7图87・88・95			第36图86・94
		第8图128		13区	第44图3
図版2	第6号住居跡	第16图53	図版5	13区	第45图50
		第17图104			第45图68
	9区第2号土坑	第19图2		14区	第47图114・127・135
	9区第3号土坑	第20图1			第49图52・75
	9区第6号土坑	第22图1	図版6	14区	第48图9
	9区第14号土坑	第22图1		17区	第52图18
	1区	第24图44		8区	第61图1(青磁)
図版3	1区	第26图73・84・96		第1号住居跡	第4图1~15

图版 7	第 2 号住居跡	第 5 图 1· 3· 5· 9· 12~16· 18· 21~26· 28 · 32· 34 第 6 图 35· 36· 38~41· 44· 46· 47· 49· 51~54· 56· 58· 59· 61~64 第 7 图 65· 68~70· 72· 74· 75· 79· 81· 83~86· 89~94			111
图版 8	第 2 号住居跡	第 8 图 96· 98~100· 103 · 104· 106· 107· 109~ 111· 114· 117~119· 121 · 122· 124~127· 129· 130 第 9 图 131· 134~137· 139			
	第 3 号住居跡	第 10 图 1~20			
图版 9	第 3 号住居跡	第 10 图 21~34			
	第 4 号住居跡	第 11 图 1~30			
图版 10	第 4 号住居跡	第 11 图 31~53			
	第 5 号住居跡	第 12 图 1· 3· 4· 8· 9· 11· 13· 14· 16· 18· 19 · 21· 23~28· 30~32· 34 · 36· 37· 39· 41· 42· 44· 45 第 13 图 46· 48· 50~52· 54· 56			
图版 11	第 5 号住居跡	第 13 图 57· 58· 60~64· 66· 68· 71· 73~79· 81~ 84· 86~89 第 14 图 93· 94· 97· 100~ 105			
	第 6 号住居跡	第 15 图 1· 2· 4~9· 11· 12· 15· 16· 18~20· 22~32· 34· 37			
图版 12	第 6 号住居跡	第 15 图 38· 39· 42~45 第 16 图 46· 48~50· 52· 54· 57~62· 64· 66~69· 77· 78· 80· 81· 83· 84 第 17 图 85~105· 108~			
图版 13	2 区住居跡				第 18 图 1~9 第 19 图 1· 2 第 19 图 1· 3~7 第 20 图 2· 3 第 20 图 1~5
	9 区第 1 号土坑				
	9 区第 2 号土坑				
	9 区第 3 号土坑				
	C 区第 3 号土坑				
图版 14	第 4 号土坑				第 21 图 1~15 第 22 图 2~8 第 22 图 1~11 第 22 图 2· 3
	9 区第 6 号土坑				
	9 区第 7 号土坑				
	9 区第 14 号土坑				
图版 15	豎穴状遺構				第 23 图 1~5 第 23 图 1~5
	16 区豎穴状遺構				
	1 区				第 24 图 1· 3· 5· 9 · 10· 13~15· 17· 18~21 · 23· 24· 26· 28· 29· 31· 34~37· 39· 41~43· 45· 46
图版 16	1 区				第 25 图 48~54· 56· 58· 60~64 第 26 图 67· 69· 75· 76· 79 · 80· 83· 85· 87~89· 92· 94· 95· 97 第 27 图 99· 102~112· 114· 115· 117~124· 127 ~130· 132· 134· 135 第 28 图 136· 137· 140· 142· 143· 145· 147· 148· 152· 157~159 第 29 图 161~165· 167· 169~171· 174· 177· 178 ~180· 182· 183· 185· 186· 188· 190· 192· 195· 197· 198· 201~203 第 30 图 1~4· 6· 8 ~12· 15· 18~21· 23· 25 · 26· 30· 31· 33· 34· 36~ 38· 40· 42· 44· 45· 47~ 50 第 31 图 51~58· 60· 61· 65
	1 区				
图版 17	1 区				
	2 区				

図版19	3区	第32図 1・3・5・8 ~ 10・13・17・19・24・ 27・32・37・38・40・43・ 45・46・49	13区	第44図 1・2・4・6・ 8・12・14・16・17・19・ 21・25・27・33・36
図版20	8区	第33図 53・74	図版26	13区 第44図37 第45図39・41・43・45・ 47・49・51・57・59・60・ 62・63・65・67・69・72・73
図版21	9区	第34図 1・29・30・62		第46図75・77・79・81・82 ・84・87・89・92・94・95 ・102・104・108・109
		第35図 1・4・5・8 ~ 10・12・15・18・26・28 ・30・31・34・37・39・40・ 44・46・52	図版27	13区 第47図115・122・124・ 126・128・130・132・136 ~ 138
図版22	9区	第36図 54・59・61・63・ 65・68・74・77・79・80・ 83・85・87・90・92・95・ 97・101・103・105・107		第48図 1・6・12・15・ 17・29・34・36・40・42
		第37図 110・111		第49図43・44・46
		第37図 113・115・122・ 124・125・127・128・131 ~ 134・136・137・139・ 144	図版28	14区 第49図50・51・53・76・ 78・80・81・83・85
	10区	第38図 1・3・5・7・ 11・13・21・23・24・26・ 27・29・31・32・34・35		第50図 1・2・3
図版23	10区	第38図 36・37	図版29	16区 第51図 1・10
		第39図 39・41・42・44・ 49・51・64・67・69・71 ~ 76		第52図 1・17・19
		第40図 79・83・87・90・ 91・93・95・97・98・101・ 102・105・106・108・109・ 111・117		第53図 1・26
		第41図 1・4・6・7・ 10・15・18・21・24・25・ 27・29・31・34・36・38・ 40・45・48・50	土製品・石製品・石器	
図版24	11区	第42図 51・54・56・66・ 68・71	図版30	土偶 第54図 1・3
		第43図 72・74・76・80・81 ・83・86・88・90	図版31	土偶 第54図 2・4
図版25	11区	第43図 92・99・100・ 116	図版32	土偶 土製耳飾 第54図 5・9 第55図 1・28
			図版33	土製円盤・土鍾 石製品・石器 第56図 1・29 第57図 1・13 第58図 14・15・16
			図版34	石製品・石器 第58図 17・24 第59図 25・33
			中世の遺物	
				第1号井戸跡 第60図 1・8
			図版35	第1号溝跡 第61図 1・12
				妻沼公民館収蔵土器 第62図 1・7(附編)

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

妻沼町（当時）では、昭和58年度から平成11年度まで、福川右岸地区において埼玉県営ほ場整備事業が実施されていた。

昭和63年7月5日付け深地第575号で埼玉県深谷土地改良事務所長より、埋蔵文化財発掘の通知が提出された。開発予定地は、埋蔵文化財包蔵地（西城切通遺跡）が所在する。開発計画の変更が不可能であったことから、記録保存の措置を講ずることとなった。昭和63年7月29日付け教文第3-122号で埼玉県教育委員会より、発掘調査を実施する旨の通知がなされ、これを受けて、妻沼町教育委員会（当時）で発掘調査を実施したものである。なお、文化庁からの通知は、平成元年1月18日付け委保第2-5626号である。

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は昭和63年8月5日から12月15日まで行われた。調査面積は500㎡である。重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業を行い、縄文時代後期後半の遺構・遺物、中世の遺物が検出された。その後作業員による遺構発掘作業を行い、遺構平面図を作成し、完掘写真の撮影を行った。

(2) 整理・報告書作成

整理作業は平成21年度4月から平成22年3月まで実施した。整理報告の前提となる発掘図面類、現場写真等の記録資料は、合併後確認作業を行ったが見当たらなかった。当時の担当者は合併前に退職しており、事情を確認することはできなかった。遺憾ながら、本報告は出土遺物を中心とした内容とせざるを得ないものとなっている。ただ、出土遺物については、註記がなされており、発掘調査時に設定したグリッド名、住居、土坑等の遺構名があった。将来、遺構図が見出された時に、遺構・遺物との対照ができるよう、この註記により区分し、整理する方針とした。

第一四半期は遺物の洗浄・注記・接合・復元作業等を行った。第二四半期は遺物の実測・トレースを開始し、第三四半期には遺物の版組を作成した。第四四半期に入ると遺物の写真撮影を行い、終了したものから順次写真図版の割付け・編集作業、原稿執筆を行った。そして、印刷業者選定の後、報告書の印刷に入り、校正を行い、3月末日に報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

(1) 発掘調査

昭和63年度

主体者 妻沼町教育委員会

教育長	増田 稔
庶務課長	橋本 重忠
庶務課長補佐	長島 洋子
主任	荒川 弘

(2) 整理・報告

平成21年度

主体者 熊谷市教育委員会

教育長	野原 晃
教育次長	柴崎 久
社会教育課長	斉木 千春
社会教育課文化財保護担当副参事	小林 英夫
社会教育課副課長兼文化財保護係長	新井 端
	主査 寺社下 博
	主査 吉野 健
	主査 鯨井 敬浩
	主任 松田 哲
	主任 蔵持 俊輔
	主事 山下 祐樹
調査員	長谷川一郎
調査員	原野 真祐

II 遺跡の立地と環境

熊谷市は埼玉県北部に位置する。市の南側には荒川、北側には利根川がそれぞれ西から南東方向に向かって流れており、両河川が最も近接する地域にある。地形的には市の西側に榑挽台地、北・東側に妻沼低地、南側は江南台地が広がる（第1図）。

榑挽台地は洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東方向へは熊谷市北西部の西別府付近にまで延びている。標高は約36～54mで妻沼低地に向かって緩やかに下っていく。

榑挽台地の東側には沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がっている。新荒川扇状地は熊谷市の南西に位置する深谷市の菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。また、三ヶ尻地区の荒川に面した榑挽台地南東端には丘陵地である観音山（標高81m、第3紀層の残丘）があり、台地上からの比高差は約25m、沖積地からの比高差は約35mである。

今回報告する西城切通遺跡（1）は旧妻沼町域であり、現在は熊谷市北部の西城地区に所在する。旧妻沼町域は地形的に河川によって3つの区分ができる。北側より、利根川と芝川に挟まれた北部微高地、芝川と福川の中の中部微高地、福川と奈良川の中の南部微高地である。本遺跡は南側の微高地に位置し、特に福川に沿って堆積した自然堤防に立地する。この自然堤防は標高約28mを測り後背湿地である水田面より1.3mの高まりである。

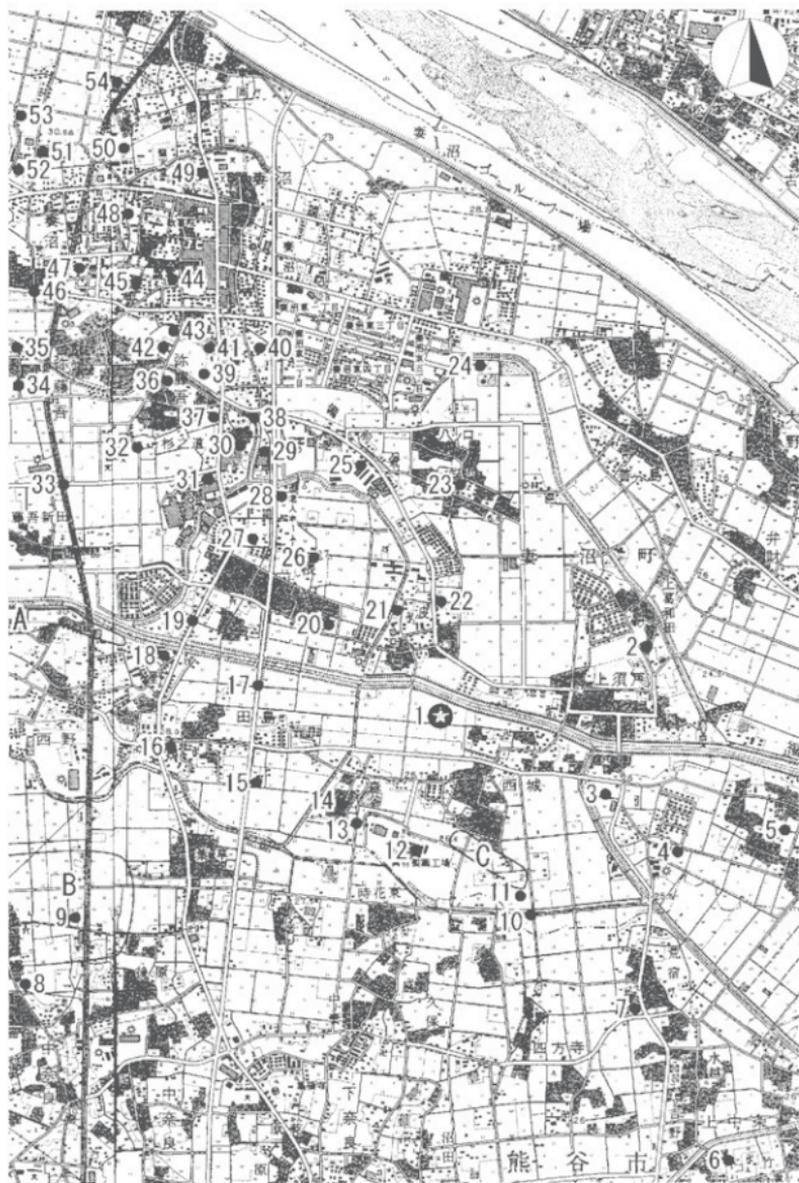
次に西城切通遺跡周辺の歴史的環境について概観する。旧妻沼町域は土地改良事業等が多く施工されており、その中で発見された遺跡も多い。また、担当部局による調査、郷土史家の現地採取等の実績を踏まえ述べてゆく。

旧石器時代から縄文時代早期までは台地上で遺跡が見られるが、妻沼低地では、台地崖線付近以外では遺跡が確認されていない。

縄文時代前期になると僅かながら遺物が散見される。本遺跡より関山式土器の破片が妻沼町誌で紹介



第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

Nr	遺跡名	時 代	Nr	遺跡名	時 代
1	西城切通遺跡	縄文後	28	出口北遺跡	古墳後
2	上葛和田遺跡	縄文後	29	南王子遺跡	古墳後、奈良・平安
3	東城城跡	平安	30	王子古墳	古墳後
4	先蔵場遺跡	古墳後、奈良	31	王子西遺跡	古墳後
5	八幡間遺跡	古墳後、奈良	32	一本杉遺跡	古墳後、鎌倉、江戸
6	中条氏館跡	中世	33	弥藤吾新田遺跡	弥生後、古墳前、奈良・平安
7	光屋敷遺跡	古墳後、奈良、中・近世	34	七の丸遺跡	古墳後、奈良
8	東遺跡	古墳後	35	鎌ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
9	横塚遺跡	古墳前、平安	36	杉之道遺跡	古墳後、奈良・平安
10	長安寺遺跡	古墳後、奈良・平安	37	杉之道東遺跡	古墳後
11	西城城跡	平安	40	猿栗遺跡	古墳
12	蘇森遺跡	弥生中～後、古墳前～後、奈良・平安	41	下宿遺跡	古墳後
13	南大ヶ谷戸遺跡	奈良・平安	42	神明南遺跡	古墳後
14	森谷遺跡	古墳後、奈良・平安	43	神明遺跡	古墳後、奈良
15	鷺ヶ谷戸東遺跡	古墳後、奈良・平安	44	彦松東遺跡	古墳前、奈良・平安
16	堀邊ヶ谷戸遺跡	縄文後	45	彦松遺跡	古墳後、奈良・平安
17	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	46	年代遺跡	古墳後
18	実盛館	奈良・平安	47	彦松西遺跡	古墳後、奈良
19	高林遺跡	古墳後、奈良・平安	48	王子遺跡	古墳後
20	本郷遺跡	奈良	48	池ノ上遺跡	古墳後
21	西郷畷遺跡	古墳後、奈良・平安	49	道祖神遺跡	古墳後
22	東郷畷遺跡	奈良・平安	49	大我井遺跡	古墳前～後、奈良・平安
23	屋敷遺跡	古墳後	50	緑川遺跡	古墳後、奈良・平安
24	釜ノ上遺跡	奈良	51	摩多利神社古墳	古墳後
25	上北浦遺跡	縄文後	52	雉子尾遺跡	古墳後、奈良
26	出口南遺跡	古墳後	53	大明神遺跡	古墳
27	長井庵遺跡	古墳後	54	観音堂瓦塚跡	平安、鎌倉

古墳群

A	上江袋古墳群	古墳後
B	奈良古墳群	古墳中期後～末
C	乙蘇森古墳群	古墳後

されている。また、寺東遺跡では関山式土器が検出され、後続する黒浜期の集落が榊引台地上の三ヶ尻遺跡より確認されている。

中期になると、確認された遺跡は微増する。近隣では鶴森遺跡や道ヶ谷戸条里遺跡で加曾利E式土器が検出されているが、妻沼低地における該期の痕跡は低調であり、台地およびその周辺が中心と言える。

縄文時代後期に入ると遺跡数は増加する。上葛和田遺跡(2)では堀之内式や加曾利B式土器が検出され、上北浦遺跡(25)では堀之内式土器が出土している。場ヶ谷戸遺跡(16)から採集された石器は妻沼町誌で紹介されている。西側の榊引台地では三ヶ尻遺跡より、加曾利EⅢ式-安行1式にかかる土器が出土している。後期に台地集落は存在するものの、小規模であるとの検討がなされている。本遺跡については、高井東式と安行1式を主体とした豊富な遺物量を誇り、妻沼低地における縄文時代後期後半の主要な遺跡と言える。熊谷市域東部に所在する諏訪木遺跡より、本遺跡と同時期の遺構・遺物が確認されており、その関連性については興味を引くところである。後期前半は、寺東遺跡、城下遺跡、深谷町遺跡、上敷免遺跡など、中期後半から継続する低地集落が確認されており、台地縁辺部周辺にみられる傾向があり、称名寺式期まで継続する。ただし、上敷免遺跡は安行3式期まで継続する。本遺跡の近接域に限って言えば、縄文時代後期からの遺跡数の増加は、低地上の自然堤防上への進出が活性化する傾向と捉えられるが、旧妻沼町域の中部微高地にまで広がるものの、南側の微高地に偏りをみせることから、低地全域への展開には至らないと考えられる。

縄文時代晩期になると遺跡数は減少する。なお、本遺跡も晩期への継続性がみられる遺物は認められなかった。諏訪木遺跡で後期より継続して集落が営まれているが、上江袋地区で石器が採集されているほかは、妻沼低地での活動の痕跡は希薄なまま弥生時代を迎えることになるが、不明な点が多く今後の成果が期待される。

弥生時代の初期段階の遺跡としては横間栗遺跡、飯塚遺跡、飯塚北遺跡、飯塚南遺跡等が挙げられ、再葬墓の検出が目立つ傾向にある。また、出土した遺物は重要な遺物が多く、横間栗遺跡の再葬墓一括資料は埼玉県指定の文化財となり、飯塚遺跡出土の遺物も新編埼玉県史に記載されている。妻沼低地では飯塚地域に痕跡が多く見られることが特長であろう。周辺地域で特筆すべきは、深谷市の上敷免遺跡より遠賀川式土器の破片が検出されたことが挙げられる。弥生時代中期中頃から、本遺跡周辺の地域で集落跡が目立つようになる。熊谷市東部の池上遺跡からは東日本でも最古段階と考えられる環濠集落が確認され、その墓域とされる行田市の小敷田遺跡からは関東地方で古い段階とされる方形周溝墓が検出されている。中期後半になると、妻沼低地の南側に当たる北島遺跡からは、大規模な集落跡と併せて墓域が確認され、水路や堰などの水利施設による水田経営の存在など、居住・墓域・生産がみられる重要な遺跡として注目を集めている。さらに南へ目を向けると、池上遺跡の西側にあたる上之地区に所在する前中西遺跡、諏訪木遺跡からも当該期の痕跡が見られる。特に前中西遺跡では集落跡と墓域が確認されており、後期初頭まで継続すると考えられる。時期的には池上遺跡の直後にあたる。平成12年の調査では土偶形容器が検出され、その後引き続き出土が確認されている。池上遺跡出土のものとの関連性が窺える。集落としても、大型住居跡が多く確認され拠点的な集落ともとれる状況を呈している。今後の調査成果が期待される。後期になると、妻沼低地では弥藤吾新田遺跡(33)で当該期と考えられる破片が採取されている。この時期の情報は少ないことから不明な部分が多い。一方、周辺地域でも、北島遺跡や前中西遺跡で遺構が見られる外は、不明な点が多い。

古墳時代に入ると、妻沼低地への開発が活発化し遺跡の数が増加する。前期の遺跡として、大我井遺跡(49) 弥藤吾新田遺跡、鷺森遺跡(12) 上江袋古墳群(A)で集落跡を確認している。この時期は、群馬方面の石田川式土器との関係が考えられる甕が検出されている。中期は確認例が少ないため明らかでないが、後期になると遺跡の数はさらに増加する。確認されているだけで、八幡木遺跡、堀ノ内遺跡、道ヶ谷戸遺跡、一本杉遺跡(32) 飯塚南遺跡、鷺森遺跡等が挙げられ、自然堤防上の微高地に形成され、奈良・平安時代に継続する集落が見られるようになってくる。一方で古墳については、5世紀末頃の奈良古墳群(B)の横塚山古墳、中条古墳群の鉦塚古墳、女塚1号墳、いずれも帆立貝式前方後円墳であるが、これらを周辺での緒源として、王子古墳(30) 摩多利神社古墳(51) 上江袋古墳群、飯塚古墳群、乙鷺森古墳群(C)が確認されている。墳丘を残すものは、横塚山古墳と摩多利神社古墳である。王子古墳については過去に墳丘調査がなされており、成果が妻沼町誌で紹介されている。

律令体制の始まる奈良・平安時代の本遺跡周辺一帯は武蔵国幡羅郡に属する。幡羅郡は上秦、下秦、広沢、荏原、幡羅、那珂、霜見、余部の八郷からなる中郡であり、熊谷市北・西部、深谷市東部等を含む一帯が該当すると考えられている。熊谷市との境に位置する深谷市幡羅遺跡からは郡衙の正倉と推定される大型建物群や道路跡などが確認されている。確認調査は本市も含めて継続的に行われており、西別府廃寺、西別府祭祀遺跡、西別府遺跡が関連する遺跡群であり、この地域一帯が当時の中心地であることが判明しつつある。

集落跡は前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多く、かつ規模の大きいものが多い。本遺跡周辺で挙げるならば、八幡木遺跡、鷺森遺跡、飯塚北遺跡、藤屋敷遺跡、中西原遺跡で痕跡が確認されている。集落跡以外で特色ある遺跡としては、条里遺跡が挙げられる。道ヶ谷戸条里遺跡、中条条里遺跡、別府条里遺跡など、現在も水田耕作される地域であるが、低地の後背湿地を利用した生産遺構が残されており、これらと集落跡を総合的に捉え、当時の生活環境や地形的環境などの復原もできよう。

平安時代末から中世にかけては武蔵七党やその他地武士団の館跡がみられるようになる。実盛館(18)、西城城跡(11)、東城城跡(3)、中条氏館跡(6)、奈良氏館跡、別府氏館跡、別府城跡、西別府館跡等があるが、その実態は不明なものが多い。中条氏館跡と別府城跡では、現在も土塁と空堀が一部残っている。本遺跡近隣の遺跡としては、大我井遺跡内の4基の経塚が著名である。現在は東京国立博物館に収蔵され、妻沼経塚として公開・活用されており、最古の経筒に「久安(1145~1151)の紀年銘がある。

中世段階になると、城館跡以外の遺跡に乏しい。その中で注目すべきは、有林式平窯を持つ観音堂瓦窯跡(54)であるが、残念ながら供給先を含め不明な点が多い。また、国指定重要文化財である聖天堂、費総門を有する歡喜院長楽寺は、治承三年(1179)に高藤別当実盛による、白髪神社の改修・合祀を端緒として、建久八年(1197)に良応僧都により建立されたものである。以後、近隣の信仰を集めるとともに、周辺地域は門前町として栄え今日に至っている。

Ⅲ遺跡の概要

1 調査の方法

原資料ではC区と、1～17区と標記のある註記が存在する。遺物の接合状況から類推すると、調査区をA～C区のグリッドに分けて調査を開始していると考えられる。その後1～17区のグリッドに再編し、調査を進めたと考えられる。第3図は発掘調査の通知に添付された図を元に作成している。発掘面積は500㎡となっていることから、5m幅×100m長の調査区と推定される。

グリッドの設定について

グリッドの一边を5mで設定したとすると、20区までのグリッドとなる。遺物出土量から状況を考察すると、15～17区グリッドは僅かな出土量であり、集落の縁辺部と思われる。また、グリッド番号を北から付番すれば、後半のグリッドは遺跡範囲の縁辺部に該当することとなり、前述の状況と一致する。このことから、18～20区グリッドは設定されたものの、遺物が検出されなかった可能性があると推察される。

2 検出された遺構・遺物

今回報告する地点は、西城切通遺跡の範囲の中央部であり、現在は南北に縦断する用水路となっている。今回報告する遺構について、『埼玉埋蔵文化財調査年報 昭和63年度』に記載されているが、遺物に残された註記内容と差異が見受けられる。整理報告は註記を基にしており、年報との差異も註記を基軸とすることで、後日の対照をできるようにする方針である。

註記より、住居跡6軒、竪穴状遺構1基、土坑14基、溝跡1条、井戸跡1基、用途不明遺構1基を検出したと考えられる。このうち、溝跡、井戸跡については中世に帰属する遺構と考えられる。それ以外は、本遺跡の主要である、縄文時代後期後半の遺構と考えられる。

住居跡6軒は、曾谷式～安行1式段階を主体とする土器を検出しており、同程度の割合で高井東式が含まれている。遺物の傾向からは、3・4・5・6号住居に安行2式段階のものも含まれており、住居跡6軒には時期差があるものと思われる。特筆すべきは6号住居で、東北地方の土器群である瘤付文系の土器が含まれていた。

竪穴状遺構は16区に所在し、曾谷・高井東式を主体とし、安行1式が含まれる。

土坑は9区に集中している。安行1式と曾谷・高井東式が主要な土器である。

溝跡・井戸跡からは東海系陶器が検出され、在地産陶器、青磁等の中世を主体とする遺物を含む。1点だけ、砥石が検出された。

用途不明遺構では僅かに縄文土器底部破片の検出である。

今回報告する遺物は、総量でコンテナ33箱分に相当する。前述のとおり、縄文時代と、中世に帰属する遺物であり、その殆どを縄文時代の遺物が占める。

縄文時代は、掘ノ内式、加曾利B式、曾谷・高井東式、安行1式、安行2式及び、粗製土器、無文土器、紐線文系土器が主要な土器である。加えて、これに付随する石器、石製品、土製品である。

石器は、石鎌、石斧、石錘、砥石、磨石・敲石、石皿等を検出している。

石製品は、勾玉、石剣、石棒を検出している。

第2表 遺構所在一覧表

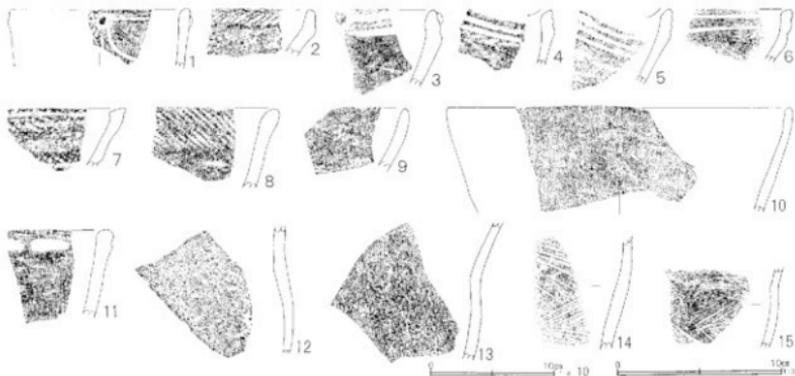
グリッド	遺物の有無	所在遺構	備考
1区	○	第4号住居跡、第5号住居跡	第2号住居跡が含まれる可能性あり。
2区	○	住居(番号の記載なし)	
3区	○		第5号住居跡と接合破片あり。
4区	×		
5区	○	第1号住居跡	※グリッド一括なし。
6区	×		
7区	×		
8区	○		
9区	○	第1・2・3・6・7・14号土坑	C区が含まれる可能性が高い。
10区	○		
11区	○	第6号住居跡	
12区	×		
13区	○		
14区	○		
15区	○		
16区	○	16区竪穴状遺構	
17区	○		
A区	×		
B区	×		
C区	○	第3号土坑	9区グリッドとの接合破片あり。
所在不明な遺構			
・第3号住居跡 ・第4号土坑 ・第1号溝跡 ・第1号井戸跡 ・竪穴状遺構			

土製品は、土偶、耳飾、土錘、土製円盤等を検出している。

また、時期が異なるが、前期の諸磯C式の破片を1点検出した。

中世は、龍泉窯産青磁、常滑産陶器、渥美産陶器、在地産瓦質土器、土師質土器を検出した。総量としては僅かで、コンテナ1箱程度である。

グリッド別(遺構を除く)に検出量を見積もると、1区5箱、2区3箱、3区2箱、8区2箱、9区5箱、10区1箱、11区1箱、13区4箱、15～17区1箱、C区1箱である。本報告では、時代別に図版を分けている。また、原資料に限界があるため、特に遺物の註記情報を基にして、遺構・グリッド別に図版を作成しており、器形・文様など特徴的なものを抽出して図示している。なお、土器以外の土製品・石器はまとめて図示した。



第4図 第1号住居跡出土土器

IV遺構と遺物

1 縄文時代の遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡出土土器（第4図）

5区グリッドに所在する。なお、5区グリッドには一括遺物が無い。

1～6は曾谷・高井東式である。1は平口縁深鉢。復元口径は11.0cm。口縁部に沈線が巡り、瘤を起点とする弧線・垂線が施されている。2・3は平口縁の深鉢で口縁部破片であり、屈折して直立する形状。2は口縁部に縄文を施文し、3は円形瘤が配置され2条の太い沈線が巡る。4・5は波状口縁の深鉢で、口縁部には沈線が施されている。6～8は平縁の口縁部片である。6は2条の沈線が巡る。

7・8は安行1式。7は帯縄文が巡り、下部は磨耗のため不明瞭である。8は口縁部に縄文が巡る。

9～11は無文土器の口縁部片である。10は口径28.0cmを測る。11は口縁部に単沈線が施される。

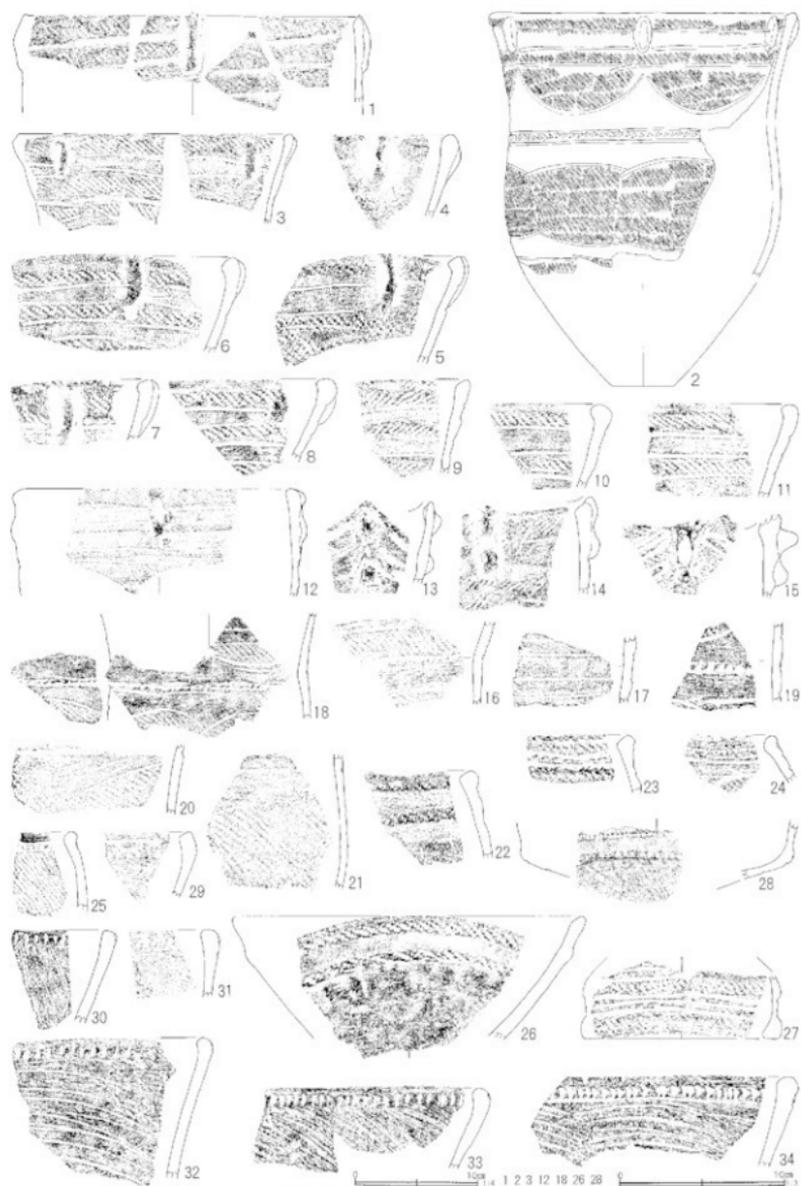
12～15は曾谷・高井東式及び無文土器の胴部片である。14・15は多段構成の羽状沈線が施されている。

第2号住居跡出土土器（第6～9図）

1区グリッドに所在する可能性がある。遺物検出量の多い住居跡である。

1～15は安行1式である。1～12は平口縁深鉢の口縁部片である。いずれも帯縄文を主体とする文様構成である。1～8は口縁部に縦長の貼付文を配置する。2は胴上半部まで残存する個体であり、口径24.4cmを測る。口縁部に2条の帯縄文を巡らし、その上に5単位の縦長の貼付文が配置される。口縁部文様帯下は沈線区画による連弧充填文が続き、胴括れ部に刺突列による区画が巡る。胴上半部の互連弧充填文は屈曲が弱く、下半部は直線による区画線に縄文が充填されている。12は口縁部に縦長の貼付文を2つ配置し、復元口径21.2cmを測る。13～15は波状口縁の深鉢である。13・15は波頂部下に瘤が2つ配置される。14は波底部下に瘤が2つ配置される。

16～21は安行式の胴部片である。括れ部に巡る刺突列や、帯縄文・連弧充填文を文様構成の主体とす



第5图 第2号住居跡出土土器(1)

る。18は互連弧充填文の曲率が強い。

22～25は内湾する口縁の深鉢である。22・23は口縁部に帯縄文と刺突列による構成。24は口縁部に刺突列を巡らし、以下に弧線区画の充填文が見られる。25は瓢形土器であり、口縁部には沈線間に刺突列が巡り、口頸部に縄文が施文されている。

26は鉢であり、口縁部に2条の帯縄文が巡る。口径21.0cmを測る。27・28は台付鉢形土器であり、27は脚部径11.6cm。帯縄文の間に沈線が3条巡る。

29は曾谷・高井東式であり、内折する口縁部片である。沈線直下に刻目列が巡る。

30～34は粗製土器の口縁部片である。安行1式に並行する一群と考えられ、口縁部にヘラ状工具による刻目文を巡らす。31・32・34は刻目列下に沈線を巡らす。口頸部には斜行沈線を施す。

35～88は曾谷・高井東式である。35～64は精製系波状口縁深鉢の口縁部片である。35～38は縄文が施文され、沈線や刺突により口縁部文様帯が形成される。波頂部に刺突を加えた貼付文が配置される。曾谷式である。39～51は口縁部が内傾する形状で、文様帯が凹線・隆帯で構成され、口縁に沿って巡る一群である。波頂部や波底部に突起や貼付文が配置される。39～41は波頂部の突起である。39は断面が杓子状となる突起。40はバナナ状で根元に2つの貼瘤が配置される。41は円盤状である。52～60は口縁部文様帯が凹線・隆帯で構成され、杓状化した一群である。杓の継ぎ目や波頂部に突起や貼付文が配置される。53は王冠形の波頂部突起である。61～64は山形の波頂部である。61は口頸部に刺突列が巡る。62・63は数条の沈線が口縁に沿う。64は頭頂部にスリットが入り、双頭となる。3条の沈線が口縁に沿い、沈線下に瘤が配置される。65～80は平口縁深鉢の口縁部片である。65は口縁部が屈曲し内傾する形状であり、口縁部に縄文が施され、口径21.9cmを測る。口頸部～胴部に連続羽状沈線が施されている。68～77は口縁部に数条の沈線・凹線が巡る一群である。68～74は貼付文が配置され、70は刺突、71は分割線が加えられる。73・74はボタン状または馬蹄状の貼付文である。78・79は凹線と隆帯で構成され、78は刺突帯、79は刻目帯である。

81～86は鉢であり、体部がソロバン玉状になる。81～85はボタン状貼付文がみられる。二重沈線や三角区画が地文縄文のものと同文化しているのがみられる。81～84は口縁部片で、鋸歯状文がみられる。85は胴部片である。86は口径17.6cmを測る。小型の円形瘤が口縁部に配置され、刺突帯が巡り、その下部に刺突列が巡る。87・88は球形を呈する鉢である。87は口径21.4cmを測る。口縁部～胴上半部に太い沈線による帯状区画内に刻目列が施されている。88は復元口径13.0cm、器高12.1cmを測る。口縁部に円孔(径0.9cm)がある。文様構成は、口縁部に2単位の沈線区画の円形刺突列が巡り、体部には緩やかに蛇行する二条の沈線が2段巡る。体部下半に焼成後の穿孔(径0.9cm)がある。

89は注口土器または瓢形土器の形状を呈する口頸部片であると思われる。90は瘤付文系土器の深鉢口縁部片と思われる。91～95は注口土器の注口部片である。93は下部に瘤状貼付文がみられる。94は下部に2段の瘤状貼付文がみられ、沈線による装飾が施されている。95は片口状の形態をもつ土器と考えられる。

96～124は無文土器の口縁部片である。96～98は波状口縁。以下は平口縁である。99～106は口縁部が屈曲して直立・内傾する。107～111は口縁部が外反して大きく開く形状である。112～114は口縁部が外傾する。115～121は口頸部で内湾し口縁部が直立し、122・123は口縁部が外傾する。124は口縁部が肥厚し、内傾している。

125～129は曾谷・高井東系及び無文土器の胴部破片である。125～127は深鉢の胴部であるが、連続羽

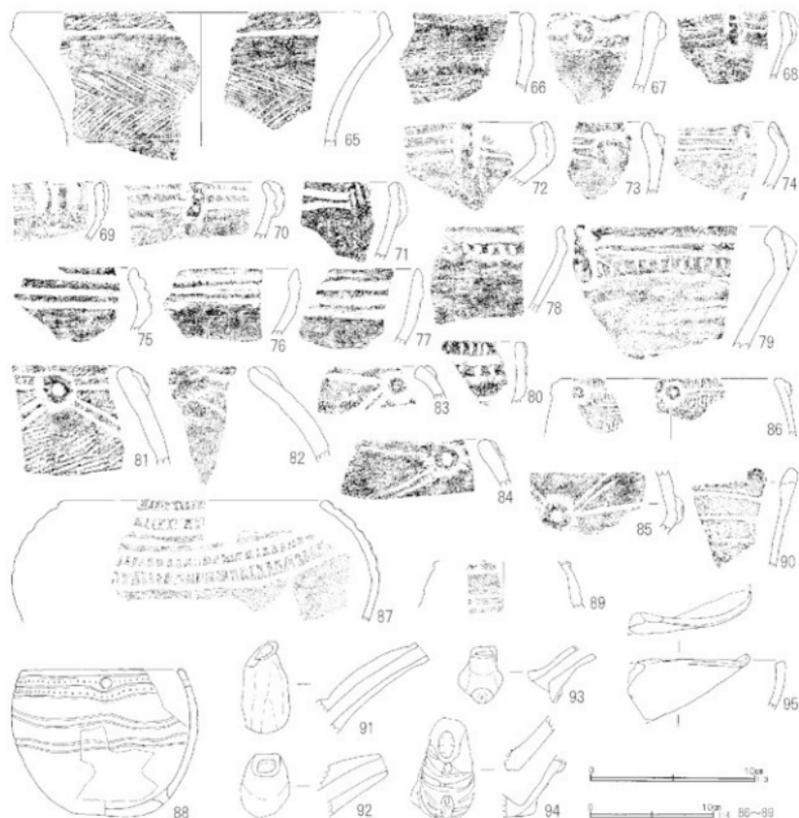


第6図 第2号住居跡出土土器(2)

状沈線文が施されている。128は胴下半部であるが、文様はみられない。129は垂下する蛇行沈線がみられる。

130は無文土器の鉢の口縁部片である。ソロバン玉形を呈する器形と考えられる。

131～141は底部破片である。131は底径4.2cmを測る。132は底径4.4cmを測る。133は復元底径4.3cmを測る。134は復元底径7.1cmを測り、網代痕がある。135は底径6.3cmを測り、網代痕がある。136



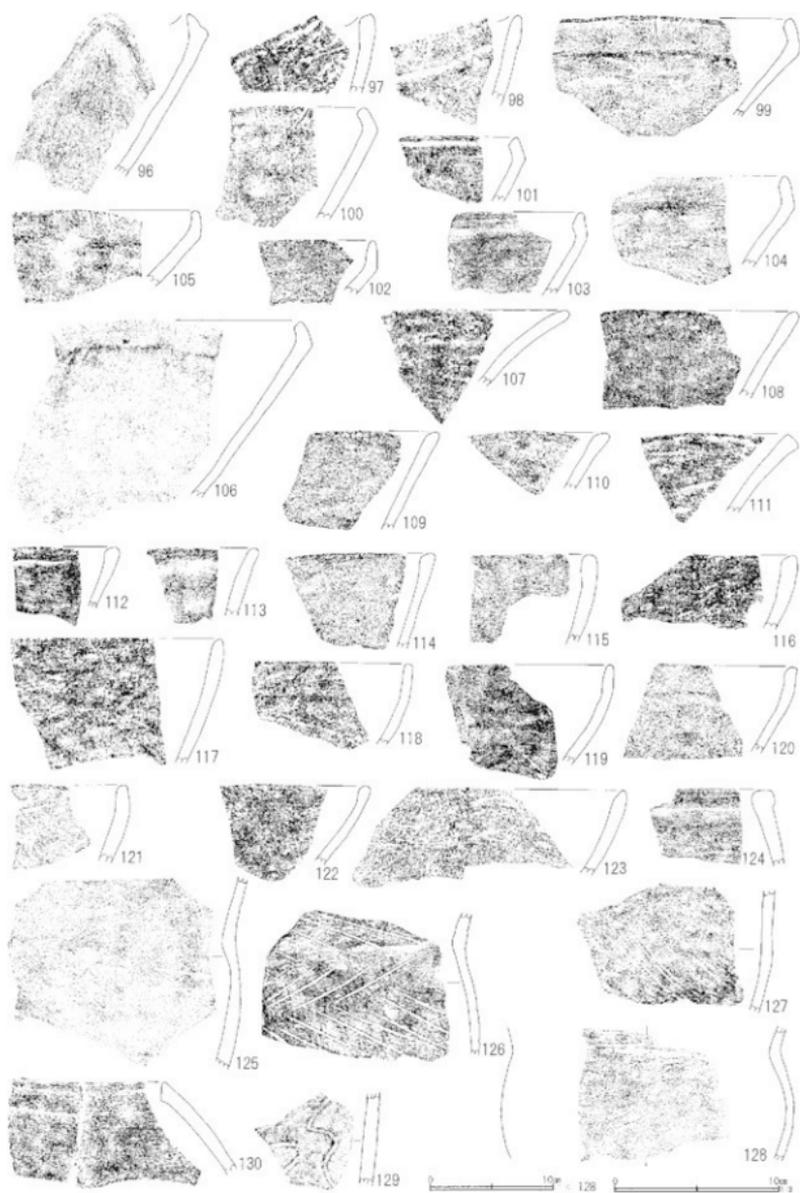
第7図 第2号住居跡出土土器(3)

は底径7.5cmを測り、網代痕がある。137は復元底径5.4cmを測り、方形の底部である。網代痕がある。138は底径4.6cmを測る。139は底径7.0cmを測り、網代痕がある。140は底径5.0cmを測り、上げ底状を呈する。141は復元底径7.3cmを測る。

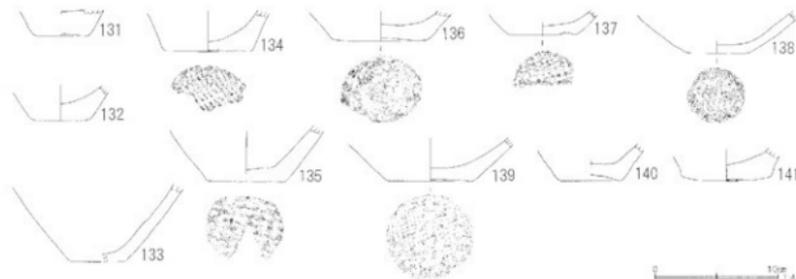
第3号住居跡出土土器(第10図)

所在グリッドは不明である。

1～6は安行式である。1～3は安行1式であり、いずれも平口縁の深鉢口縁部片である。帯縄文が口縁部を巡る文様構成である。縦長の貼付文が配置されるが、2は縦位に2つ配置される。1は復元口径30.0cmを測る。3は口縁部に縦長で中央が窪む貼付文を配置し、帯縄文下の沈線区画が枠状化してい



第8图 第2号住居跡出土土器(4)



第9図 第2号住居跡出土土器(5)

る。4は安行2式であり、平口縁の深鉢口縁部片である。縄文が施された口唇が肥厚し、口頸部にブタ鼻状突起がみられる。5は台付鉢形土器の口縁部片である。口唇に刻目を巡らし、口頸部に縦位の連続沈線を施している。6は鉢と思われる口縁部片であり、口頸部が内湾する形状を呈する。口縁部に円形瘤を配置し、沈線が2条巡る。口頸部は縄文を地文としている。

7～22は曾谷・高井東式である。7～13は波状口縁深鉢の口縁部片である。7は3条の沈線が口縁に沿い、山形の波頂部下に刺突を伴う縦長の貼付文が配置される。8は波底部に貼付文が配置され、3条の沈線が口縁に沿う。9は連続する2条の刺突列が口縁に沿い、文様帯下部が頸状に張出す形状を呈する。10はコップ状の波頂部突起。10～12は口縁部文様帯を楕円枠が構成し、10・12は刺突帯、11は隆帯である。13は波底部に刻目のある輪状貼付文を配置する。14～19は平口縁の口縁部片であり、口縁部が屈曲して内傾する形状を呈する深鉢である。14～16は2条の沈線が巡る。16は胴部に羽状の一部と考えられる、連続斜行沈線が施されている。17～19は口縁部が無文である。20～22は鉢の口縁部片か。22は浅鉢の可能性もある。口縁部に突起が配置される。

23～26は無文土器である。いずれも平口縁の深鉢口縁部片である。23～25は口縁部が湾曲し、直立する。24は口縁部に縦長の貼瘤が配置される。復元口径25.8cmを測る。25は復元口径26.4cmを測る。26は口縁部～口頸部まで直線的である。

27～29は曾谷・高井東系または無文土器の胴部破片である。27・29は括れ部であり、28は下半部の膨らみか。27は二重の羽状沈線とみられるが、施文は粗雑である。

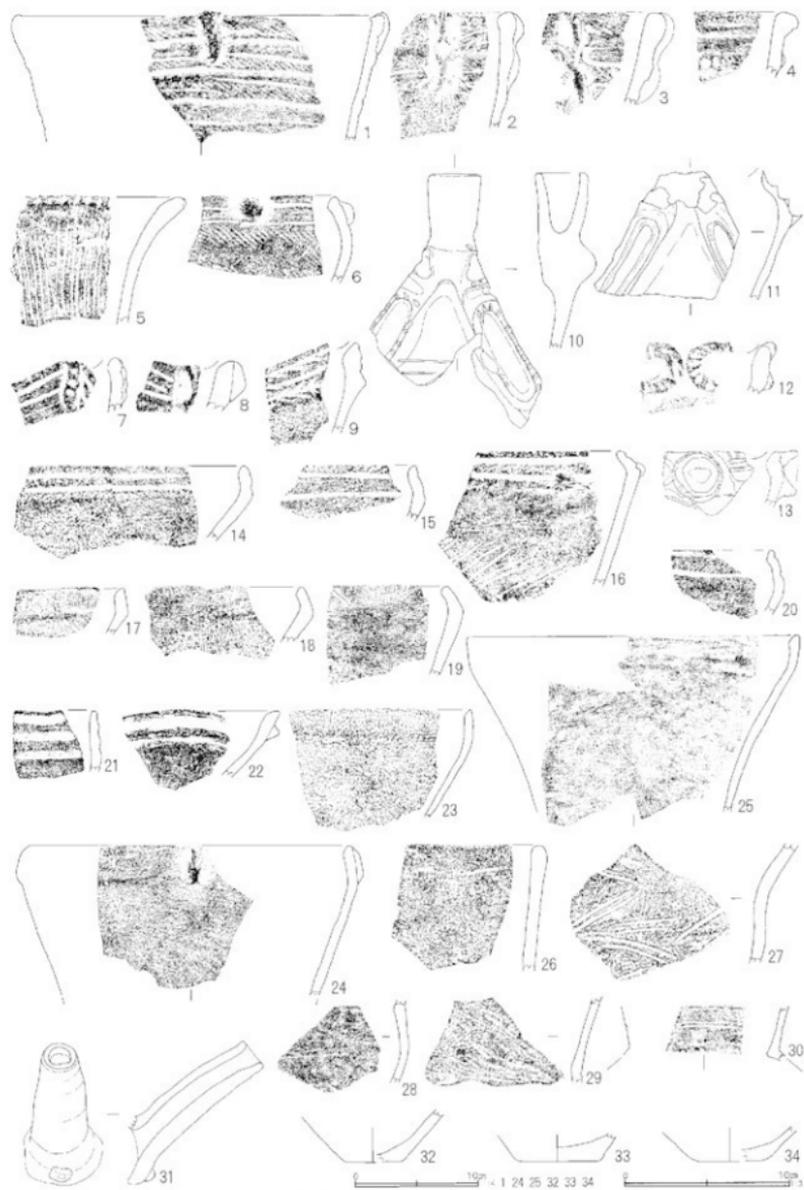
30は注口土器の口頸部である。31は注口部であり、瘤が貼付される。

32～34は底部破片である。32は復元底径4.5cmを測る。33は底径5.4cmを測る。34は復元底径6.1cmを測る。

第4号住居跡出土土器(第11図)

1区グリッドに所在する。

1～17は安行式である。1～8は安行1式の平口縁深鉢の口縁部片である。帯縄文が口縁部の文様構成である。1は縦長の貼付文が配置される。5は復元口径15.6cmを測り、赤彩が残る。8は縦長の貼付文が2つ配置される。9は肥厚し内傾する口縁部の形状である。10～13は安行2式の平口縁深鉢の口縁



第10图 第3号住居跡出土土器



第11图 第4号住居跡出土土器

部片である。10は口縁部が内傾し、大きなスリットが入る。口頸部にブタ鼻状瘤が上下に配置され、蛇行垂下文が連結する。また、ジグザグ状磨消縄文が施される。11～13は口縁部が肥厚し内傾する。13は縦長の瘤に刻みが入る。14～16は胴部破片である。14は曲率の強い連弧文である。17は0.9cmの穿孔があり、台付土器の胴部片である。

18は瘤の剥離した注口土器の胴部片であり、弧状沈線と縄文の施文がみられる。瘤付文系統の土器か。

19～23は粗製土器の口縁部片である。19は口縁部が内傾し、2条の刻目列間を二重垂線が施されている。20は口縁部に刻目列と沈線、21は沈線、22は刻目列、23は刺突列が巡り、斜行沈線が施されている。形状からは安行1式に並行する土器群か。

24～35は曾谷・高井東式である。24～27は波状口縁深鉢の口縁部片である。24は山形の波頂部であり、先端が突起し、直下に3つの瘤が配置される。25は2条の沈線が口縁に沿う。26は刻目帯と沈線区画。27は3条の刻目列。28～33は平口縁深鉢の口縁部片である。28～31は口縁部が屈曲する一群であり、28・29は口縁部に縄文の施文、30・31は沈線を主体とする。32・33は口縁部が口頸部より内湾して直立する形状であり、沈線による施文。34・35は鉢であり、34は鋸歯状文、35は横位の沈線による文様構成である。

36～44は無文土器の深鉢の口縁部片である。36は口縁部が外傾する形状である。37～40は口縁部が直立する。41～44は口縁部が内湾する。

45～53は底部破片である。45は復元底径3.0cmを測る。46は底径4.4cmを測り、赤彩が施され、上げ底状を呈する。47は復元底径5.8cmを測り、茎状の痕跡がみられる。48は復元底径6.4cmを測る。49は復元底径6.6cmを測る。50は復元底径7.6cmを測り、網代痕がある。51は復元底径5.2cmを測る。52は復元底径5.0cmを測る。53は復元底径6.6cmを測る。方形を呈し、網代痕がある。

第5号住居跡出土土器（第12～14図）

1区グリッドに所在する。僅かであるが、3区グリッド出土の破片と接合関係があった。

1～25は安行1式である。1～8は平口縁深鉢の口縁部片である。いずれも口縁部に帯縄文を施し、1・2は縦長の瘤が配置されている。9～12は平口縁深鉢の胴部片である。13は波状口縁深鉢の口縁部片である。14・15は波状口縁深鉢の胴部片である。16～20は口縁部が内湾する口縁部片である。瓢形土器あるいは無頸壺の形状と思われる。口縁部に帯縄文を巡るが、17・19・20は直下に刺突列が施されている。19は1.0cmの穿孔がある。21・22は胴部片である。23・24は鉢の口縁部片である。23は帯縄文による文様構成。24は台付鉢形土器であり、口頸部に集合沈線が施されている。25は台付鉢形土器の胴部片。26・27は横位の刻みがある縦長の瘤と、蛇行する刻目のある隆線による文様構成。小形の器形が考えられる。

28～45は紐線文系土器である。28～32は圧痕が巡る口縁部片である。口頸部には斜行沈線を施す。33・34は圧痕が巡る胴部片である。35～42は刻目・刺突列が巡る口縁部片である。43・44は刻目・刺突列が巡る胴部片である。45は口縁部が肥厚し内傾する口縁部片である。

46～87は曾谷・高井東式である。46～56は平口縁深鉢の口縁部片である。46～48は口縁部に縄文、口頸部に羽状沈線を施す。50～56は口縁部の文様構成が沈線を主体とする。57～72は波状口縁深鉢の口縁部片である。57～59は山形の波頂部である。57は横位の刻目がある貼付文が配置される。58は3条の沈



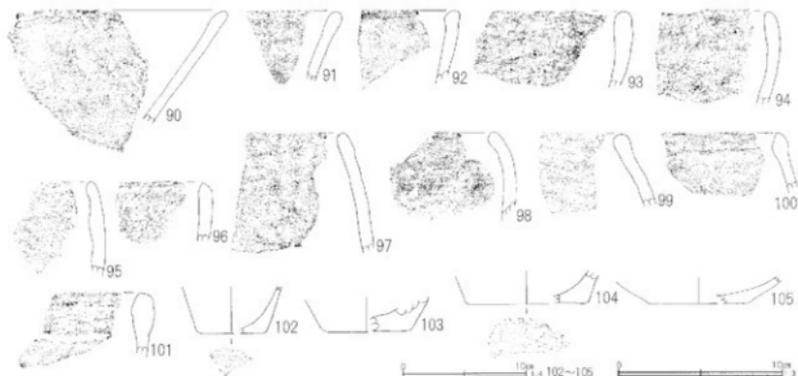
第12図 第5号住居跡出土土器(1)

線が口縁に沿う。59は瘤が貼付され無文。60は波頂部が肥厚し平坦である。61は突起部を欠損するが、根元には箍状の隆帯が巡り、外面に2個一対の貼付文が配置される。62は口端の隆帯が楕円状に下がる。63・64は沈線が文様を構成する。65は沈線と隆帯の文様を構成で、隆帯に貼付文が付く。66は沈線と刺突帯が文様を構成する。67・68は刺突帯が文様を構成し、68は橋梁状把手が付く。69・70は沈線が文様を構成し、69は縦位に刻まれる貼付文が付く。71は刻目帯と刺突帯が文様を構成する。72は刺突帯が文様を構成する。73は口縁屈折部の破片である。

74・75は深鉢の胴部片である。74は括れ部に刺突列が巡り、斜行沈線が施されている。75は稲妻状沈



第13图 第5号住居跡出土土器(2)



第14図 第5号住居跡出土土器(3)

線が施される。76～78は鉢である。ソロバン玉状を呈する器形であり、ボタン状貼付文を結節点とする鋸歯状文を主体とする。76は沈線に刺突列が並行する。79～83は口縁部片である。79は深鉢であり、紐線を模した沈線が巡る。80は無文である。81は口縁部で屈曲し縄文の施文がある。82は口縁部が屈曲し、刺突のある貼付文が配置される。83は口縁部を沈線が巡る。84～86は浅鉢である。84・85は無文であるが、口縁部内側に縦長の突起が2つ配置されている。86は復元口径27.0cmを測る。口縁部にボタン状瘤が配置され、楕円枠の沈線が施される。87は復元口径17.4cmを測る小形の鉢である。口縁部に3条の沈線が巡る。

88は瘤付文系土器の胴部破片である。横位沈線と弧線文で構成し、刻目により充填される。89は注口土器である。

90～101は無文土器の深鉢の口縁部片である。90・91は口頸部から口縁部が外へ開く。92～96は口縁部がやや内湾し直立する。97～100は口縁部が内傾する。101は口縁部が肥厚する。

102～103は底部破片である。102は復元底径5.6cmを測る。103は復元底径7.2cmを測る。104は復元底径9.8cmを測り、網代痕がある。

第6号住居跡出土土器(第15～17図)

11区グリッドに所在する。

1・5は安行1式、2・4、6～22は安行2式とみられる。1～5は平口縁の深鉢口縁部片である。1は復元口径19.6cmを測る。2は口唇に突起が配置され、直下の口縁部には2段目の帯縄文に、縦位の窪みのある瘤が貼付られ、2条の垂線が施される。3は口縁部に縦長の瘤が配置される。4は口唇に突起が配置され、突起から口縁部に、横位の窪みのある瘤が貼付され、3条の垂線が施される。5は復元口径19.0cmを測る。口縁部に縦長の瘤が配置される。6・7は波状口縁の深鉢口縁部片である。6は山形の波頂部であり、横位の窪みのある縦長の瘤が配置される。7は縦位に窪み貼付文が配置された波底部である。8～22は平縁の口縁部片で、内傾する形状のものであり、深鉢や瓢形土器などが想定される。8は縄文を地文とし、口端に突起が付く。9は縦長の貼付文に刻みがみられ、口縁部は刻目帯が巡



第15图 第6号住居跡出土土器(1)



第16図 第6号住居跡出土土器(2)

る。11は沈線が杵状化している。16・17は口縁部の帯縄文下に刺突列が巡る。18～20は刻目列が巡る。

23～25は安行式の深鉢胴部片である。23は下半部であるが、互連弧充填文が直線化しつつあり、結節点が粗雑である。24は互連弧充填文の曲率が強い。25は帯縄文間に沈線が充填される。26は鉢の口縁部片で、安行1式である。27・28は台付鉢形土器である。27は横位の刻目帯が口縁部から胴部に配置される。28は鉢形土器の胴部片であり、下半に重層の連弧沈線が施される。29は胴部破片であり、文様の起点となる刻目入りの貼付文が配置され、連弧沈線・刻目帯が展開する。30は胴下半部片であり、弧線文が施されている。

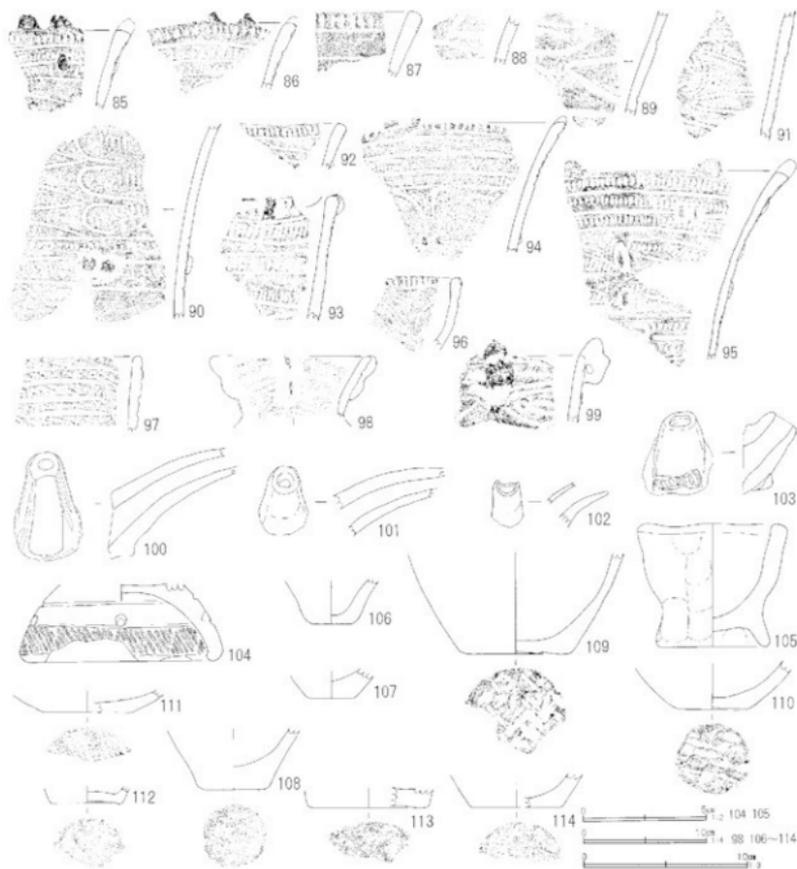
31～45は曾谷・高井東式である。31～40は波状口縁深鉢の口縁部片である。31は櫛歯状工具により、口縁部は横位、口頸部が縦位に施している。32は波頂部の撥形突起である。33は凹線による楕円区画帯。34～36は刻目帯による文様構成である。36は波底部に突起を配置する。38は凹線主体の文様帯に山形の波頂部である。39は波底部に突起を配置し、楕円区画による文様構成である。40は中心が窪む縦長の貼付文が配置され、刺突列が巡る。41・42は平口縁深鉢の口縁部片であり、瘤が配置されている。43～45は鉢の口縁部片である。43・44は内傾する形状で、44は隆帯と瘤が配置され刻目が施されている。45は内湾する形状の深鉢で3条の沈線が巡る。

46～67は粗製及び紐線文系土器である。46～63は深鉢の口縁部片である。46は外反する形状で、横位の多条沈線が巡る。47～54は口縁部が肥厚して直立及び内向する形状である。47・48は横位沈線で区画し、以下は斜行沈線を施す。49は刻目列が巡る。50～54は沈線区画に刺突列が巡り、以下に斜行沈線が施される。52・53は胴部上半に沈線区画を設け刺突列が巡る。55～58は口縁部が肥厚して内傾する形状である。55・56は沈線区画に刺突列が巡る。57・58は沈線区画に縦長の刻目列が巡る。59は紐線文が欠落するが、肥厚する口縁部に斜行沈線を地文とし、横位の沈線を4条巡らす。60～63は圧痕文を施す紐線文である。いずれも弧状沈線が施されており、口縁部が肥厚し内傾する。64～67は胴部破片である。64・65は沈線区画内に刻目列が巡り、64は上下に斜行沈線が施される。66・67は沈線区画内に刺突列が巡り、斜行沈線が施される。

68～84は無文土器である。68～79は深鉢の口縁部片である。68～70口頸部から口縁部が直線的に外へ開く。71・72は口縁部が内湾し直立する。73～77は口頸部が直立しており、そのまま口縁部が直立する。78・79は口縁部がやや内湾する。80・81は鉢の口縁部片であり、80は口径29.5cmを測る。82～84は浅鉢の口縁部片である。82・83は皿状であり、83は口唇部に凹線状の沈線が巡り、口縁部内側に段を持つ。84は胴部より屈曲して口縁部が直立し、口唇部が外反する。復元口径20.5cmを測る。

85～96は瘤付土器である。85～86・92～95は平口縁深鉢の口縁部片であるが、93のみ波状口縁である。85・86・94・95は口端に突起が配置され、95以外は2個一対となっている。口縁部は刻目列が連続で3条巡るが、87・92・94・93は列間に無文帯が設けられている。85は口縁部の刻目列に瘤が配置される。93は波底部に2つの突起が配置される。94は胴部上半に連弧線が見られるが、結節せず弧線の端に瘤が配置される。95は口縁部の刻目列に2つの瘤が配置される。胴部には横位連携の入組状文が施され、結節点に貼瘤、沈線間に刻目がみられる。88～91は深鉢の胴部破片である。88は沈線区画に縄文が施されている。89は稲妻状沈線と弧線文系の入組状沈線。90は胴部上半に稲妻状沈線とC字状沈線及び4条の短沈線が縦位の配置で施される。胴部下半は横位の刺突列が巡り2つの瘤が貼付されている。91は横位連携の入組状文。96は口縁部に刻目列が巡り、三叉文が配置される。小形の器形が想定される。

97～99は口縁部片であり、注口土器や異形土器などの器形か。97は縄文を地文とし、横位の沈線が施



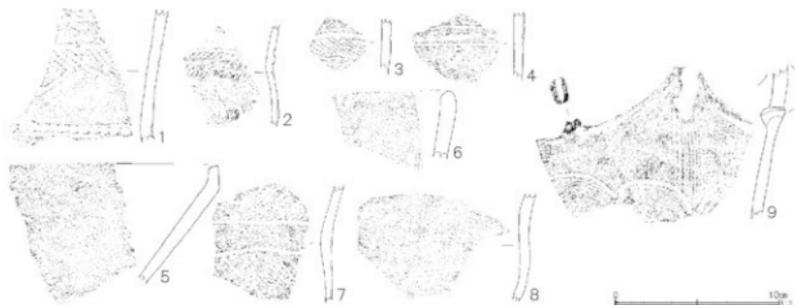
第17図 第6号住居跡出土土器(3)

される。98は外傾する形状であり、2段の縦長の貼付文が配置される。復元口径12.7cmを測る。99は口縁部に把手状突起が配置され、帯縄文が巡る。直下に重層化した弧線が配置され、窪みのある貼瘤が付される。

100-103は注口土器の注口部である。103は下部に縦位の刻みある瘤が配置されている。

104は台付器形の脚部である。脚台高3.3cm、脚台径8.2cmを測り、5単位の盲孔がある。105は手づくね土器であり、台付鉢状を呈する。8単位の調整痕がみられ、復元口径6.0cm、器高5.0cm、脚台径4.6cmを測る。

106-114は底部破片である。106は復元底径4.0cmを測る。107は復元底径3.7cmを測る。108は底径5.6cmを測る。109は胴部下半部-底部にかけての破片で、復元底径9.0cmを測り、網代痕がある。110は底



第18図 2区住居跡出土土器

径5.5cmを測り、網代痕がある。111は復元底径7.0cmを測り、網代痕がある。浅鉢の底部と思われる。112は復元底径5.8cmを測り、赤彩の痕跡がみられる。113は復元底径9.8cmを測る。114は復元底径7.0cmを測る。

2区住居跡出土土器（第18図）

2区グリッドに所在し付番された住居跡はない。第7号住居跡と捉えるか、隣接するであろう1区には、第2・4・5号住居跡が所在しており、いずれかに付随する遺物群として考えることもできる。

1～4は安行式であり、深鉢の胴部片である。1は括れ部に沈線区画の刺突列が巡り、連弧充填文が上部に施されている。平口縁深鉢の胴部と考えられる。

5～8は曾谷・高井東式である。5・6は深鉢の口縁部片であり、5は屈曲して直立する口縁部に縄文を施す。6は無文である。7・8は胴部片である。7は連続斜行沈線を地文とするが、括れ部に沈線区画の無文帯を設ける。8は無文である。

9は波状口縁の深鉢。櫛歯状工具により、波頂部よりの垂線と口頸部に連弧線が施されている。波状口縁半ばの口端にスリットの入った突起が貼付される。東北系の土器と考えられる。

(2) 土坑

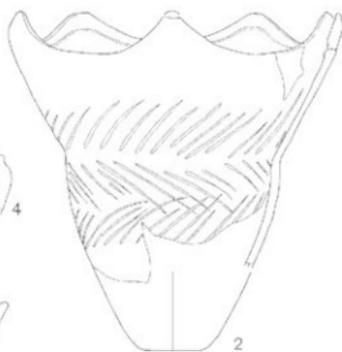
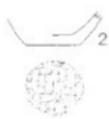
土坑は1号～14号まで付番されている。遺物の検出は第1・2・3・4・6・7・14号からである。第4号土坑は所在グリッドが不明である。また、第3号土坑は、9区とC区の記載がみられた。アルファベットのグリッド名は、数字のグリッド名に先行して付され、遺構番号も含めて再編集した可能性があることから、個別に掲載した。全体的な傾向としては、9区に土坑群が集中している様相が窺える。

9区第1号土坑出土土器（第19図）

1は曾谷・高井東式の平口縁深鉢である。復元口径17.8cmを測る。縦長の貼付文が口縁部に配置され、2条の凹線が巡る。

2は底部破片である。底径4.5cmを測り、網代痕がみられる。

9区第1号土坑



9区第2号土坑



第19図 9区第1・2号土坑出土土器

9区第2号土坑出土土器（第19図）

1は加曾利B3式。山形の波頂部であり、器壁が薄い。口縁部に刺突列が巡り、縄文を地文とする。

2～5は曾谷・高井東式である。2・3は波状口縁深鉢であり、3は口縁部片、2は口縁部から胴部上半が遺存する。2は口径26.2cmを測る。5単位の波状口縁であり、胴括れ部を無文帯とする羽状連続沈線文が施文される。4・5は平口縁深鉢の口縁部片である。口縁部が内傾する形状であり、4は1条の凹線が巡り、5は2条の沈線が巡る。

6・7は無文土器の深鉢口縁部片である。6は口頸部より直立する形状である。7は口頸部より口縁部が外反して開く形状である。

9区第3号土坑出土土器（第20図）

1は注口土器である。口縁部から胴部上半の破片であり、ソロバン玉状の胴部と筒状の口頸部を持つ。口径は6.4cmを測る。頸部の根元に2条の刻目列が巡り、4単位の円形瘤が配置される。

2は曾谷・高井東式の波状口縁深鉢の口縁部片である。山形を呈する波頂部であり、縦長の貼付文が配置されている。内部にはボタン状貼付文がみられる。

3は無文土器の深鉢口縁部片である。肥厚する口縁部は内傾している。

C区第3号土坑出土土器（第20図）

1は口縁部が屈曲しており、曾谷・高井東式の平口縁深鉢であると思われるが、磨耗が著しい。

2は無文土器の深鉢口縁部片である。口縁部が内湾する形状である。

3は曾谷・高井東式の瓢形土器が注口土器の口縁部片と思われる。口縁部に刺突列が巡り、縄文区画で構成される。

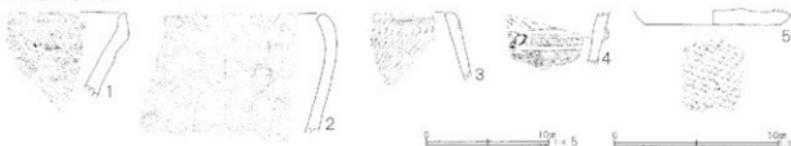
4は安行2式の深鉢の胴部片である。ブタ鼻状突起が特徴的である。

5は底部破片である。底径11.0cmを測る。

9区第3号土坑



C区第3号土坑



第20図 9区・C区第3号土坑出土土器

第4号土坑出土土器（第21図）

1は安行1式の波状口縁深鉢の口縁部片である。口縁部は帯縄文による文様帯が巡り、中心が窪む縦長の貼付文が配置される。2・3・6は安行1式の平口縁深鉢の口縁部片であり、帯縄文による文様帯が巡る。3は2つで単位の縦長の貼付文が配置される。

4・5は曾谷・高井東式の波状口縁深鉢の口縁部片である。沈線を主体とする文様帯構成である。

7は安行1式の台付鉢形土器の口縁部片である。縦位の沈線が施されている。

8～10は粗製土器の深鉢である。8・9は口縁部片であり、口縁部に横位の沈線を巡らし、口頸部に縦位の沈線を施す。10は胴下半部片であるが、胴部に沈線区画の刺突列を巡らし、以下に縦位の沈線を施す。

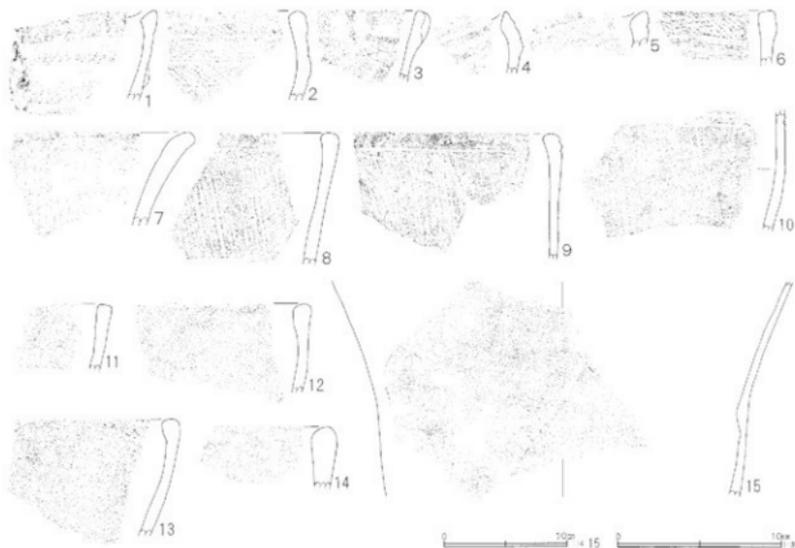
11～15は粗製土器の深鉢である。11～14は口縁部片である。11は口頸部より直線的にやや外傾する。12は口頸部より直立する。13は口頸部より内湾し、口縁部は直立する。14は肥厚した口縁部である。15は口頸～胴部片であり、胴括れ部から外へ開く形状である。

9区第6号土坑出土土器（第22図）

1は曾谷・高井東式の波状口縁深鉢である。4単位の口縁部片であり、口径27.8cmを測る。沈線による文様構成であり、波頂部は山形を呈し、波底部に貼付文を配置する。

2～7は無文土器の深鉢である。2～4は口縁部片であり、2・3は口縁部が屈曲し、内傾する。4は口頸部より直立する形状である。5～7は胴部片である。いずれも胴括れ部であるが、6は括れが弱い。

8は底部破片である。復元底径6.8cmを測り、網代痕がみられる。



第21図 第4号土坑出土土器

9区第7号土坑出土土器（第22図）

1～4は曾谷・高井東式の波状口縁深鉢の口縁部片である。1は口縁部文様帯が磨耗している。2は波頂部であり、内側中央に円状の窪みがある。口縁部には3本の帯が貼付された縦長の瘤が配置される。3は凹線と隆帯で文様帯が構成され、下部は刺突帯である。口頸部は羽状連続沈線が施される。4は凹線と薄い刺突帯で文様帯が構成され、文様帯中央に瘤が配置される。

5は異形台付土器の口縁部片である。縄文帯で区画し、楕円状の沈線文を施す。6は小形の器形が想定される口縁部片であり、沈線による横帯区画が施される。7は注口土器の口頸～胴部片である。括れ部の貼瘤を起点に、縄文が施される沈線区画が展開する。

8～10は無文土器の深鉢である。8・9は口縁部片である。8は口頸部より直立する形状であり、9は口縁部が直線的に外へ開く。10は胴部片である。

11は底部破片である。復元底径5.4cmを測り、僅かに網代痕がみられる。

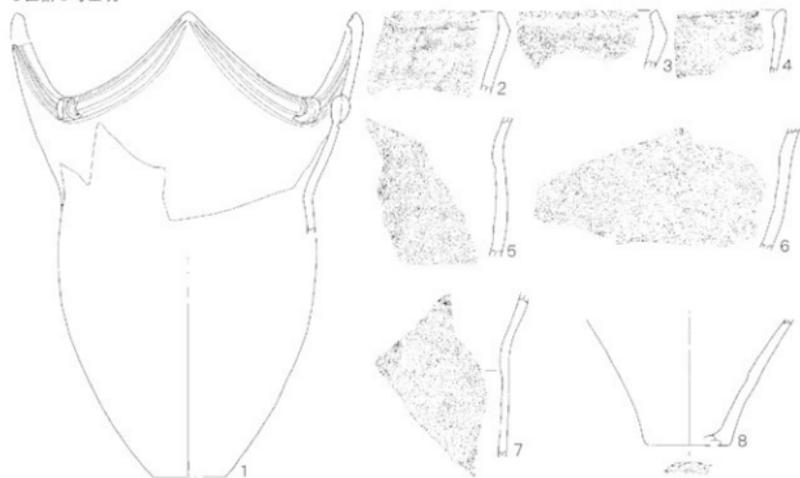
9区第14号土坑出土土器（第22図）

1は安行1式の鉢である。復元口径25.2cmを測る。帯縄文による文様帯である。

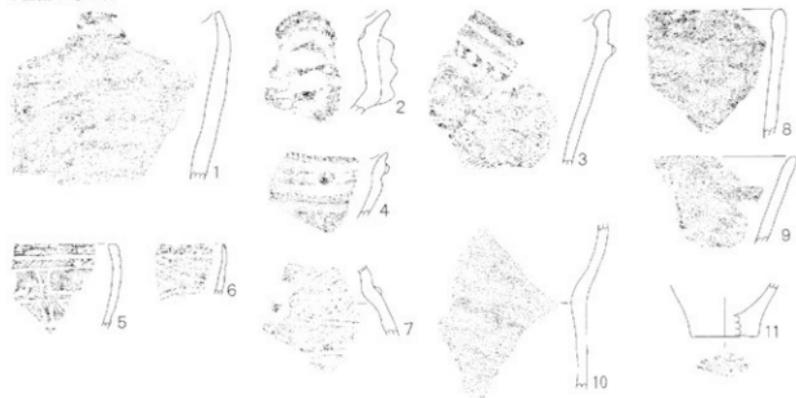
2は粗製土器の深鉢口縁部片である。紐線文が刺突列で表現され、口頸部には斜行沈線が施されている。

3は注口土器の口頸部片である。上下2段に瘤が貼付られ、縄文を施した沈線区画が巡る。

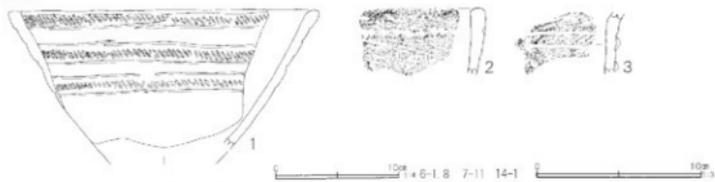
9区第6号土坑



9区第7号土坑

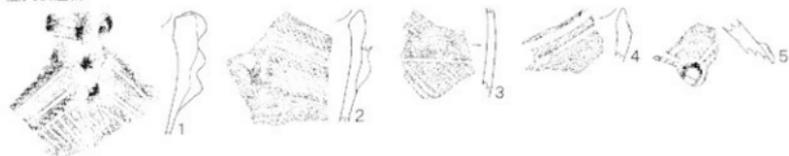


9区第14号土坑



第22图 9区第6·7·14号土坑出土土器

竪穴状遺構



16区竪穴状遺構



第23図 竪穴状遺構・16区竪穴状遺構出土土器

(3) その他の遺構

竪穴状遺構出土土器 (第23図)

註記は所在の記載がない竪穴状遺構と16区グリッド所在のものがあつた。同一の遺構の可能性も考えられたが、ここでは分けて図示する。

1～3は安行1式である。1・2は波状口縁深鉢の口縁部片である。1は山形波頂部の両端に瘤が付き横棒状を呈し、直下に縦長の貼付文が配置される。2は帯縄文による文様構成。3は胴部片であり、連弧沈線が直線化している。

4・5は曾谷・高井東式である。4は波状口縁深鉢の口縁部片であり、沈線間の隆帯に縄文が施される。5はソロバン玉形の器形で、ボタン状突起を結節点とするX状または鋸歯状の沈線が施文される。

16区竪穴状遺構出土土器 (第23図)

1～5は曾谷・高井東式である。1は平口縁深鉢の口縁部片である。口縁部の縦長の貼付文に盲孔を上下に加える。2～4は波状口縁深鉢の口縁部片である。2・3は沈線により口縁部文様帯が構成され、2は波状中ほどに瘤が配置されている。4は口縁部の沈線区画に縄文を施文し、文様帯は厚みを持たない。

5は無文土器であり、深鉢の口縁部片である。やや外へ開く形状である。

第1号溝跡出土遺物

所在グリッドは不明である。縄文土器が数点みられたが、図示し得なかった。後期後半に帰属する土器片であるが遺構の時期を示していないと思われる。遺物の主体は、後述する中世の遺物である。

第1号井戸跡出土遺物

所在グリッドは不明である。縄文土器が数点みられたが、図示し得なかった。後期後半に帰属する土器片であるが遺構の時期を示していないと思われる。遺物の主体は、後述する中世の遺物である。

(4) グリッド一括出土土器

1区出土土器(第24~28図)

1区グリッドには、第2・4・5号住居跡が所在する可能性があり、関連性が考えられる。

1~4は曾谷・高井東式である。平口縁の深鉢口縁部片であり、縄文帯による文様帯が狭い。

5~47は安行式である。5~18は平口縁深鉢の口縁部片である。5~12、19~23は安行1式、13~18・24は安行2式である。5~12は帯縄文間の無文区画が巡り、1・3・5~8は縦長の貼付文を配置。13~18は帯縄文間の無文区画が杵状。いずれも縦長の貼付文が配置され、14~17は窪みがある。13は貼付文の下にブタ鼻状突起を配置。18は口端の突起と、口縁部の貼付文の下にブタ鼻状突起が配置される。19・20は波状口縁深鉢の口縁部片である。帯縄文による文様構成で、波頂部・波底部に窪みのある縦長の貼付文を配置。21~32は深鉢の胴部片。21は波状口縁の形態で、口縁部文様帯下の羽状沈線上に蛇行垂下文を施す。24はブタ鼻状突起が貼付される安行2式である。25~28は胴括れ部に刺突列と互連弧充填文。29~32は互連弧充填文の下部であり、沈線の形状の違うものを図示した。33~39は口縁部片であり、33~35は口縁部が肥厚せず内傾する形状で、帯縄文主体の構成。36~39は口縁部が肥厚し内傾する形状で安行2式である。37・39は口縁部に縄文を施文し直下に、37は刺突列、39は横位の沈線を巡らす。38は刻目列を数条巡らす。40~43は鉢状の形態となる口縁部片。40は口縁部が肥厚し、直立する形状。縄文と連続沈線が巡る。41は刻目列が巡る口縁部が外反する。口頸部は縄文を地文とする。42は口縁部が内湾する。帯縄文による文様構成である。44は台付土器の脚台接合部であり、径9.9cmを測る。刻目列が巡る。45は安行2式の注口土器であり、球形を呈する胴下半部片。弧線の結合部に瘤が貼付られている。復元底径3.0cmを測る。46は台付土器の脚部であり、復元底径15.0cmを測る。安行2式。47は小形の鉢としたが、台付土器の可能性があり、復元口径12.4cm、器高6.9cm、復元底径7.3cmを測る。

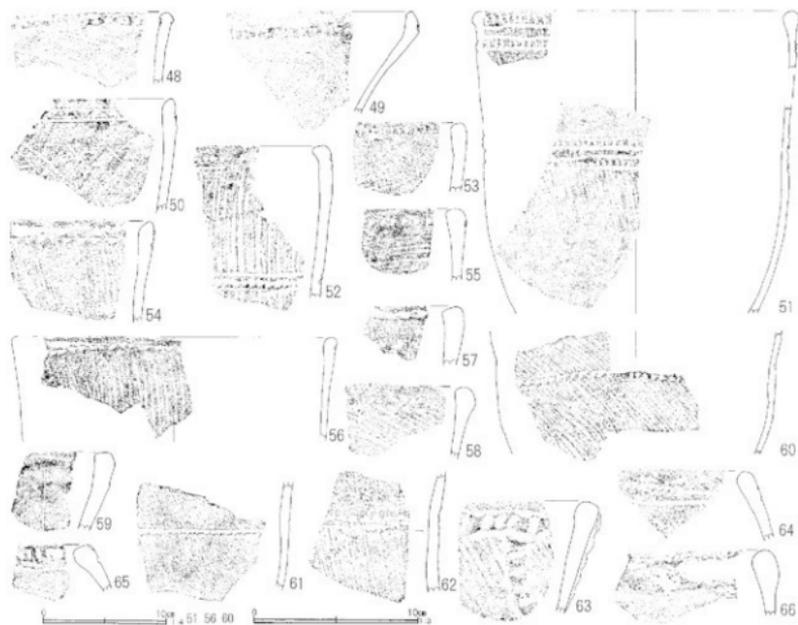
48は紐線文系土器である。49~66は粗製土器である。48・49は曾谷式、50~59は安行1式、63~66は安行2式に並行すると考えられる。48~59は深鉢の口縁部片である。いずれも斜位の沈線が施されるが、49は摩滅し確認できない。48は丸棒状工具の側面を使用した髻状圧痕の紐線文である。49は口縁部が屈曲し直立する形状。屈曲部を刻目帯が巡る。50は沈線区画の刺突列が紐線を模している。51は復元口径25.0cmを測る。口縁部・胴部半ばに沈線区画の刻目列が2条巡る。52は沈線区画の刺突列が口縁部・胴部半ばに巡る。53は刻目列が口縁部に巡る。54~56は刺突列が口縁部に巡り、56は口径25.2cmを測る。57~59は紐線文が無く、口頸部の連続沈線のみである。60~62は胴部片である。刺突列が巡り、上下に連続斜行沈線が施されている。63は口縁部が外へ開く形状であり、髻状圧痕の紐線が横位と縦位に貼付られている。64は内傾する口縁部片であり、沈線区画の刺突列が巡る。65は肥厚し内傾する口縁部片であり、沈線区画の刻目列が巡る。66は紐線が剥離した内傾する口縁部片。

67~123、125~135は曾谷・高井東式である。67~97は平口縁深鉢の口縁部片。67~79・91は無文を主体とする一群であるが、67のみ口縁部に縄文が施文され瘤を配置。67~78・91は口縁部が屈曲して直立・内傾する形状で、79は口頸部よりやや内湾して直立する形状。69は復元口径29.0cmを測る。73は復元口径27.8cmを測る。76は復元口径17.6cmを測る。80~90・92・93は数条の沈線・凹線が口縁部を巡り文様帯を構成する一群。縦長の貼付文を口縁部に配置。83は2つで1単位。82・84・88は沈線に連動して窪む。85は縦位に窪む。また瘤状貼付文もみられる。87は口縁部文様帯下に貼瘤。89は口端に突起が付き、口縁部はボタン状貼付文。84は復元口径27.4cmを測る。94~97は口縁部文様帯が楕円杵をモチー



第24図 1区出土土器(1)

フとする一群。94は楕円枠内に刻目列。95は刻目帯が楕円枠を形成し、枠内に沈線。96は復元口径24.6cm、器高28.2cm、底径5.0cmを測る。口縁部は縦長で2つ窪む貼付文が4単位で配置され、楕円枠の沈線が巡る。97は復元口径31.4cmを測る。口縁部は縦長で2つ窪む貼付文と枠状線による構成。98～124は波状口縁深鉢の口縁部片。98～104は波頂部が山形となる一群。98～102は無文であるが、102は口縁部と運動する隆起線を貼付。103・104は沈線が主体となる構成で、103は波頂部下に縦長の貼付文を配置。105～108・121は波頂部の突起。105はコップ状、106は環状、107はバナナ状、108は撥状、121は円



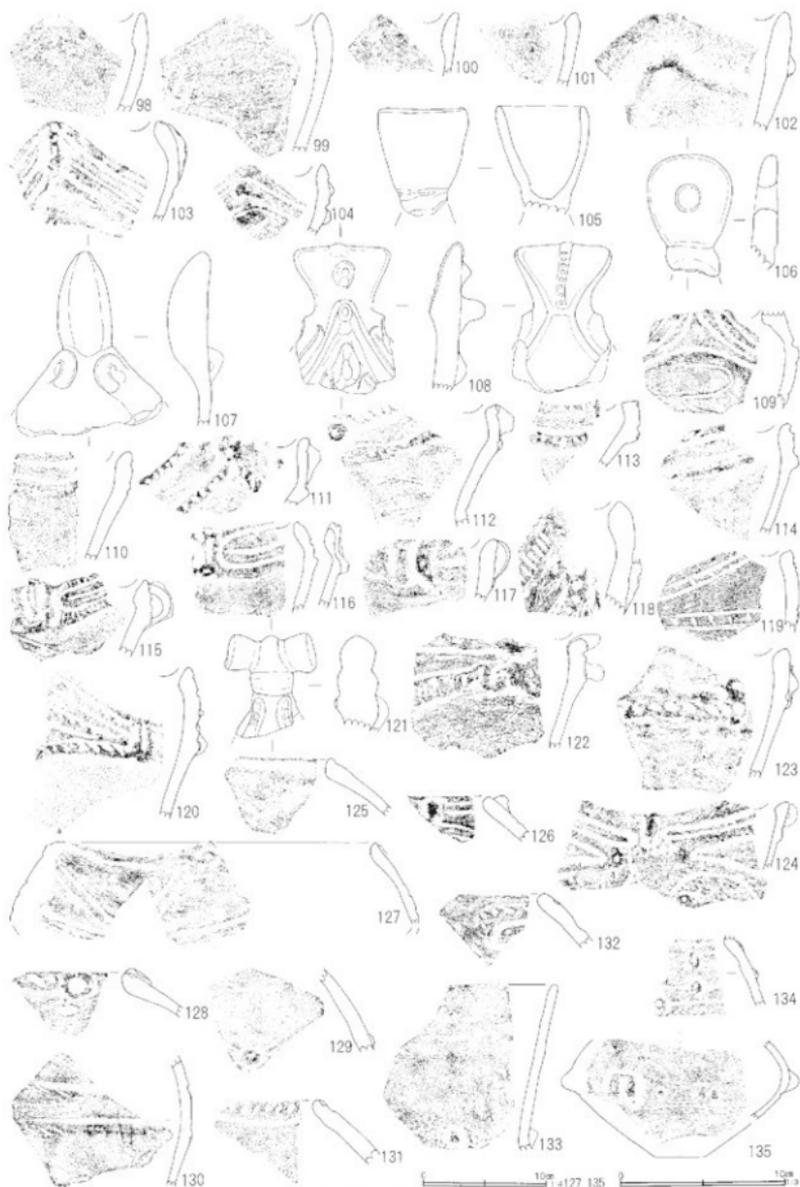
第25図 1区出土土器(2)

柱状を呈する。109は波頂部下の三角形区画に蛇行垂下文。110~118は口縁部文様帯が楕円区画をモチーフとする一群。110は凹線区画。111~114は刺突帯の内側に凹線区画が施され、112は波底部に突起を配置。115は刻目帯の内側の凹線区画に中心線。波底部に橋梁状突起を配置。116は隆帯内側に中心線のある凹線区画と、縦長で上下の盲孔を沈線が繋ぐ貼付文を配置。117は波底部の貼付文と沈線区画。118は上が刻目帯で下部が刺突帯の構成。119・120・122~123は口縁部文様帯が三角形区画をモチーフとする一群。119は沈線。120・122は刻目帯。123は刺突帯。124は波頂底間の杵状の沈線文と、波頂部下の三角形の沈線により文様が構成される。また小形の盲孔と、波底部に貫通孔を伴う瘤状突起が配置される。東北系の土器である。125~132はソロバン玉形の鉢。125~128・131・132は口縁部片。129・130は胴部片。125は無文。126は口縁部に瘤状突起。127はボタン状貼付を伴う二重沈線による鋸歯状文。128ボタン状貼付がみられ、刺突帯が口縁部を巡る。129は結節点に瘤を配置する鋸歯状文。130は刻目帯と沈線が巡る。131は口縁部に沈線区画の刺突列。132は楕円区画の刺突帯。133~135は瘤付文系の注口土器。133は口縁~口頸部片で無文であり、頸部付根に瘤を配置。134は口頸部片で、縄文帯と貼瘤による施文。135は胴部片であり、大形突起と貼瘤を配置する。

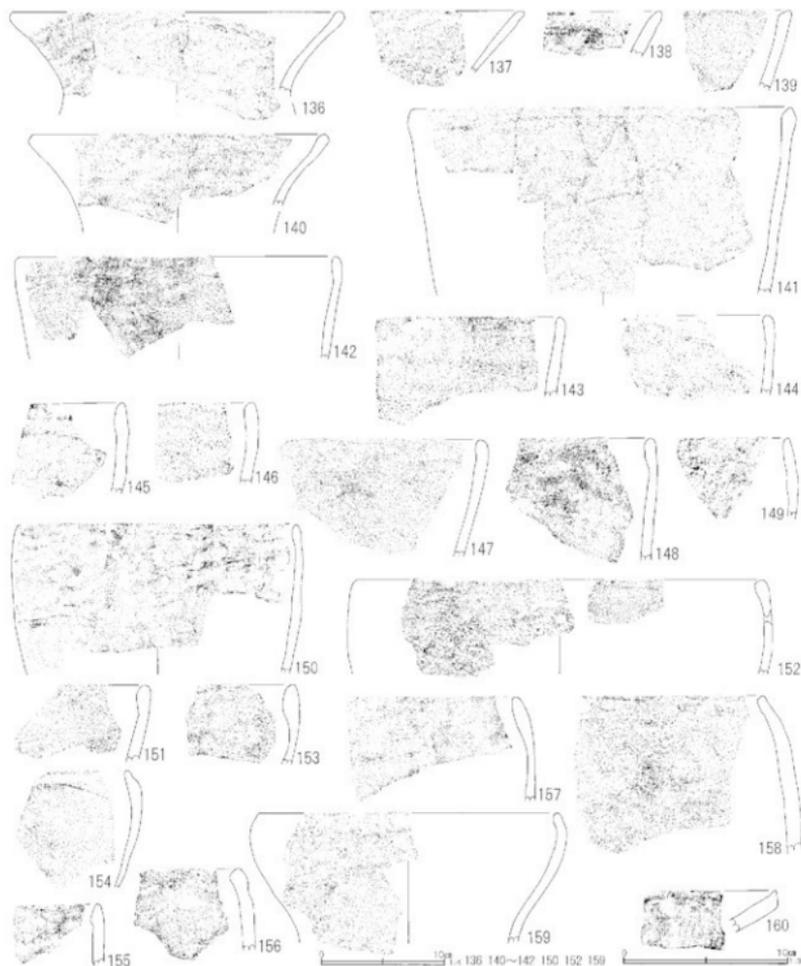
136~159は深鉢口縁部片、160は浅鉢口縁部片であり、無文土器である。136~140は口縁部が外へ開く形状である。136は復元口径26.8cmを測る。140は復元口径23.8cmを測る。141~156は口縁部が直立する形状である。141は復元口径30.6cmを測る。142は復元口径25.8cmを測る。150は復元口径19.2cmを測る。



第26图 1区出土土器(3)



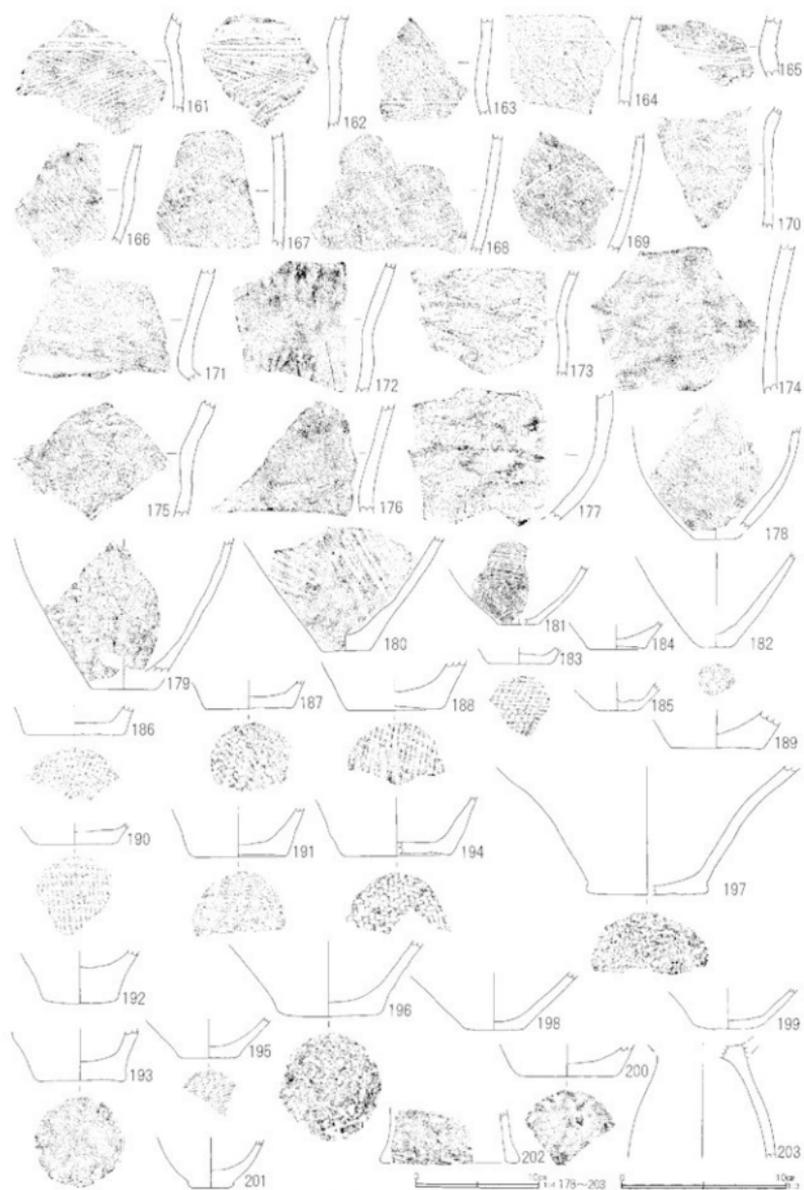
第27图 1区出土土器(4)



第28図 1区出土土器(5)

る。152は復元口径32.8cmを測り、口縁下に7mmの穿孔がある。157・158は口縁部が内湾する形状である。159はキャリバー形を呈し、復元口径は24.4cmである。160は口端が尖る。

161～177は胴部破片である。161～170は羽状・斜行沈線を地文とする。161・162は括れ部に沈線が巡り、密な連続羽状沈線が施される。163・164は無文区画を挟む連続斜行沈線。165は括れ部に沈線が2条巡る。167は交差する斜行沈線が地文。171～177は無文である。171は括れが強い。177は下半部の破片である。



第29图 1区出土土器(6)

178～182は胴下半～底部の破片。178は斜行沈線。180は復元底径5.0cmを測る。181は斜行沈線。復元底径5.4cmを測る。182は底径2.8cmを測り、網代痕がある。183～203は底部破片。183は底径5.2cmを測り、網代痕がある。184は底径4.7cmを測り、上げ底状を呈する。185は復元底径2.9cmを測る。186は復元底径8.2cmを測り、網代痕がある。187は復元底径7.0cmを測り、網代痕がある。188は復元底径7.6cmを測り、網代痕がある。189は復元底径7.5cmを測る。190は復元底径6.8cmを測り、網代痕がある。191は復元底径7.5cmを測る。192は底径5.6cmを測る。193は底径7.6cmを測る。194は底径8.8cmを測り、網代痕がある。195は復元底径5.0cmを測り、網代痕がある。196は底径7.7cmを測る。胴下半部に僅かな赤彩がみられる。197は胴下半部～底部にかけての破片で、復元底径9.6cmを測り、網代痕がある。鉢の底部と思われる。198は底径4.8cmを測る。199は底径3.5cmを測る。200は復元底径8.0cmを測る。201は底径3.6cmを測る。

2区出土土器（第30・31図）

2区グリッドには、2区住居跡が所在する。

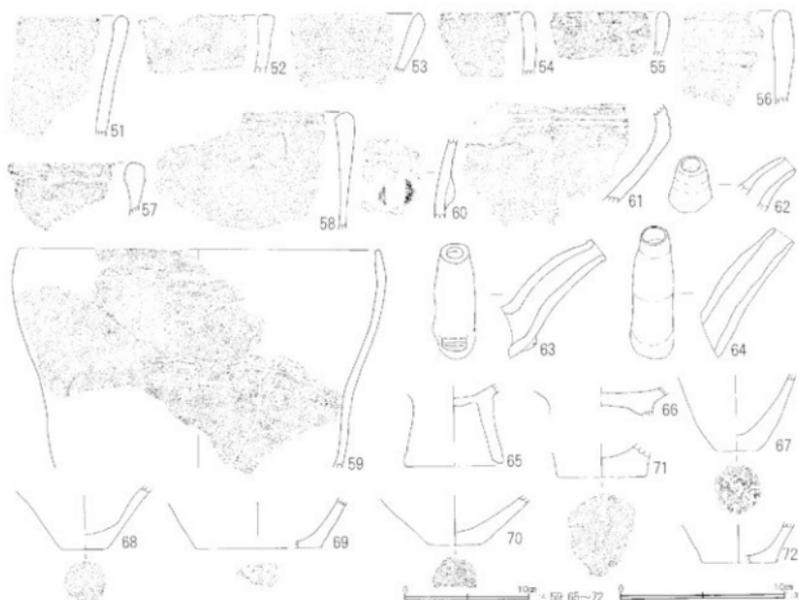
1～21は安行2式を主体とする。1～4は波状口縁深鉢の口縁部片である。1は波頂部が左右に張出す形状で、左右と中心に瘤が貼付される。安行1式である。2は波底部であり帯縄文に刻みを持つ貼付文が配置される。3は波頂部が左右に張出す。波頂部下の隆帯は縄文が施され、結節部に貼付文が配置される。4は刻目帯と沈線による文様構成。5～11は平口縁深鉢の口縁部片であり、帯縄文が主体の構成である。7は貼付文が口端で突起状となる。8は無文区画に赤彩の痕跡がある。9は帯縄文間が杵状沈線である。10は刻みのある貼付文と無文区画間に縦位の沈線が4条施される。11は口端に突起。11・12は口頸部にジグザグ状磨消縄文がみられる。13は胴部片であるが、縄文を地文とし、弧状沈線と蛇行垂下文が施される。14～20は内傾する口縁部片である。14～18は帯縄文を主体とする文様構成で、口縁部が肥厚する。14は帯縄文下に刺突列が巡る。15は上下に貼付文と杵状化した沈線がみられる。19は口縁部が肥厚せず、沈線区画の刺突列が巡り、縄文が施文される。20は口縁部が肥厚せず、2条の沈線が巡り、縄文が施文される。21は口頸部で内湾し直立する形状。

22～32は粗製系紐線土器である。22～31は口縁部が肥厚し、内傾する形状である。22は細い沈線区画に刺突列が巡る。23・24は沈線を巡らし紐線を模している。25～27は刻目列を巡らし、25は斜行連続沈線を地文としている。28は口縁部直下に薄く無文帯を設け、沈線区画の刻目列が巡る。29は刺突列、30は刻目帯である。31は丸棒状工具の側面を使用した圧痕紐線文が口縁部を巡り、分岐して口頸部を蛇行垂下する。32は外反する形状で、口縁部には刻目列が巡る。

33～50は曾谷・高井東式である。33～39は波状口縁深鉢の口縁部片である。33・34・35は無文であり、33は山形の波頂部を呈し、34は上端が平坦な突起が波頂部となる。36は刻目列と沈線が口縁部に沿う山形波頂部。37は波頂部下に刺突を伴う縦長の貼付文を配置し、凹線が文様を構成する。38はW字状に窪む椀形の波頂部であり、直下に三角形の突起を伴う。40～45は平口縁深鉢の口縁部片である。40は刻目帯が2条巡り、瘤が2つ貼付される。41は刺突帯が巡る。42は口縁～胴部片であり、縄文を施す口縁部が屈曲して直立する。口縁～胴部は粗雑な斜行沈線が施される。43～45は沈線主体の文様構成である。口縁部の形状が、44は屈曲して内傾、43はやや内湾、45は屈曲して直立となる。46・47は胴部片である。46は稲妻状沈線、47は蛇行垂下文がみられる。48はソロバン玉形の鉢で口縁部片である。ボタン状貼付文に、2条の凹線が巡る。49は無文の鉢であり、口端にスリットの入る突起が配置される。復元



第30图 2区出土土器(1)



第31図 2区出土土器(2)

口径38.8cmを測る。50は無文の浅鉢である。

51～59は無文土器で深鉢口縁部片である。51・52・54～56は胴部から直線的に移行する形状である。53は外傾する。57・58は口縁部が肥厚し直立している。59は胴部まで残存し、口頸部が緩やかに内湾して直立する。復元口径49.3cmを測る。

60は注口土器と考えられる口頸部片である。縄文帯が巡り、縦長の貼付文が2個一対で配置される。61は胴部片であり、鉢または注口土器の一部かと思われる。二重沈線が胴部中央を巡り、剥落しているが貼付文が配置される。62～64は注口部片である。63は下部に沈線が入る横長の瘤が貼付されている。

65・66は台付土器の脚部片である。65は脚台径7.8cm、脚台高5.2cmを測る。67～72は底部破片である。67は胴下半部～底部にかけての破片で、復元底径5.6cmを測る。胴下半部に単節RL縄文が施されている。68は胴下半部～底部にかけての破片で、復元底径3.4cmを測る。底面に直線状圧痕が施されている。69は復元底径10.4cmを測り、網代痕がある。70は復元底径3.8cmを測る。71は胴下半部～底部にかけての破片で、復元底径7.4cmを測る。72は胴下半部～底部にかけての破片で、復元底径6.2cmを測る。

3区出土土器(第32・33図)

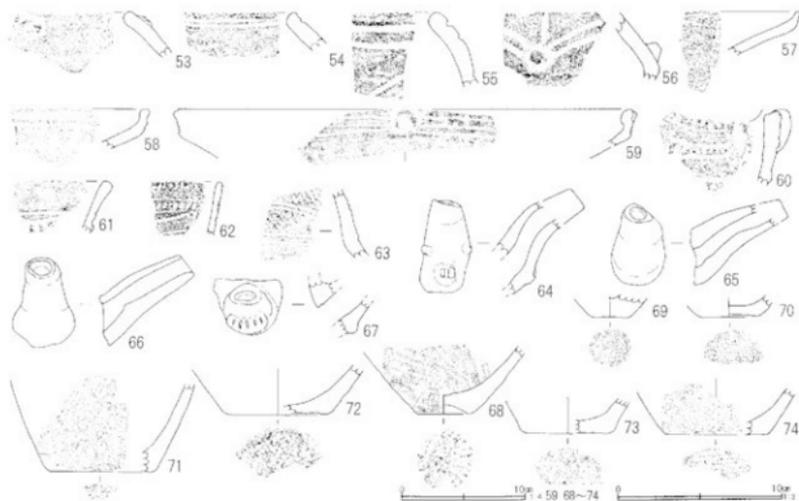
3区グリッドは僅かであるが、1区グリッド所在の第5号住居跡との接合破片が確認されている。

1・2は曾谷・高井東式、4・5は安行1式、3・6～9は安行2式である。1は平口縁深鉢の口縁部片である。帯縄文が巡り、縦長の貼付文が配置される。2・3は波状口縁深鉢の口縁部片である。4



第32図 3区出土土器(1)

～ 7 は平縁の口縁部片であり、内傾する形状。5 は帯縄文下に杵状沈線が施文される。8 は平縁の口縁部片であり、外傾する形状。口縁部に帯縄文が巡るが、直下の連弧線内は無文である。9 は平縁の口縁部片であるが、口縁直下の沈線は鋸歯状であり、縄文が充填され、反転して下部に続くモチーフである。



第33図 3区出土土器(2)

10～12は紐線文系土器、13～23は粗製土器の深鉢口縁部片である。10～12は口縁部が外傾する形状で、斜行沈線を施す。10・11は圧痕文、12は刻目列である。13～17・19は口縁部が直立する形状で、斜位の沈線を地文とする。13～15は刻目列、16・17・19は刺突列である。18・20～23は口縁部が内傾する形状である。18・22は刺突列。20は圧痕文、21は刻目列である。23は隆帯直下に刺突が巡る。

24～26は無文土器、27～42は曾谷・高井東式である。24～31は波状口縁深鉢の口縁部片である。24・25は無文で山形の波頂部である。26は口頸部に斜行沈線がみられる。27は2条の沈線が口縁部に沿う。28は波頂部の突起である。29は方形に突起する波頂部であり、外面に縦長の貼付文が配置され、2条の沈線が口縁部を巡る。30は凹線と刺突帯による文様構成である。31は凹線と隆帯による文様構成である。32～42は平口縁深鉢の口縁部片である。32～34は口縁部が屈曲して、直立・内傾する形状である。32・33は口縁部に縄目が施文され、34・35は無文である。36～42は口縁部に凹線が巡る一群であり、口縁部が屈曲して、直立・内傾する形状を呈する。41は縦長の貼付文が配置される。

43～52は無文土器の深鉢口縁部片である。43～45は口縁部がやや外傾する。46～50は胴部から直線的に移行する形状である。51は口縁部が内傾する。52は口縁部が肥厚し直立する形状である。

53～56は曾谷・高井東式のソロバン玉形の鉢である。53はボタン状貼付文と二重沈線の鋸歯状文がみられる口縁部片である。54は口縁部を二重沈線が巡る。55は二重沈線の鋸歯状文がみられる口縁部片である。56は胴部片であり、二重沈線の鋸歯状文の結節点にボタン状貼付文が配置される。57～59は浅鉢である。57は無文の口縁部片である。58は2条の凹線が口縁部を巡る。59は3条の沈線が口縁部を巡り、馬蹄状の貼付文が配置される。復元口径36.8cmを測る。

60～62は瘤付文系土器の深鉢口縁部片である。60は波状口縁で波底部に貼付文を配置し、刻目帯が文様帯を構成する。61・62は口縁部片であり、61は弧状沈線と刺突列を施す。62は2条の刻目列が巡る。

63は注口土器であり、二重沈線と縄文が施される口頸部片である。64～67は注口部片である。64は下部に刻みのある瘤一つと小形瘤が二つ貼付される。67は下部に5本の刻みのある瘤が貼付される。

69～74は底部破片である。69は底径2.8cmを測る。70は復元底径4.7cmを測る。僅かに網代痕が残る。71は胴下半部～底部にかけての破片で、復元底径8.2cmを測る。72は復元底径8.4cmを測る。73は復元底径6.8cmを測る。74は復元底径8.2cmを測り、網代痕がある。

8区出土土器（第34図）

8区グリッドには、所在する遺構は無い。

1・2は加曾利B3式の波状口縁深鉢の口縁部片である。1・2は帯縄文による文様帯で、1は口縁部に刺突列が巡り、口端に突起が付く。

3～23は曾谷・高井東式である。3・4は波状口縁深鉢の口縁部片であり、沈線と隆帯による構成で、隆帯に縄文を施す。5・6は平縁の口縁部片で、外面へ膨らむ形状。無文区画下部は刺突列と縄文が施文される。7は注口土器の口縁部片である。口端に突起が付き、弧線の結節点に瘤が配置される。8・9は深鉢の胴部片である。10・11は波状口縁深鉢の口縁部片である。口頸部に斜位の沈線がみられる。12～21は平口縁深鉢の口縁部片であり、口縁部は縄文が施され、屈曲して直立・内傾する形状である。22・23は羽状沈線を地文とする胴部片である。

24～28は無文土器の深鉢口縁部片であり、いずれも外傾する形状である。28は隆起線が巡るが、部分的に湾曲してC字状となる。

29は波状口縁深鉢の口縁部片であり、山形の波頂部外面に瘤が貼付される。30は平口縁深鉢の口縁部片である。刺突帯と杵状沈線で文様帯が構成され、連結箇所は耳状に隆起する。31は口縁部に凹線が巡り、貼付文が配置されている。

32は安行1式の波状口縁深鉢で口縁部片である。波底部下に縦長で中央が窪む貼付文が配置されている。33は異形台付土器の口頸部片であり、杵状の沈線文を施す。34は浅鉢の口縁部片であり、2条の沈線が巡り縄文が施文される。35はソロバン玉形の鉢の口縁部片である。ボタン状貼付文と鋸歯状文で構成される。36・37は縄文が施文された口縁部が肥厚し内傾する形状であり、36は瘤が配置される。38は口縁部の帯縄文下に刺突が巡り、胴部にはタスキ状入組文が施される。復元口径25.4cmを測る。39は安行2式の台付鉢形土器の口縁部片で、外反する形状である。口縁部は無文であり、口頸部にブタ鼻状突起が配置される。40は胴下半部片である。縄文を地文とする。41は安行2式の注口土器の胴上半部片である。刻目のある隆線が幾何学的な文様を展開する。

43・47は紐線文系土器、42・44～46・48・49は粗製土器の深鉢口縁部片である。口縁部が肥厚して内傾する形状であるが、43のみやや外傾する形状である。42は刻目帯が巡る。43は刺突帯が巡る。44は区画線のない刺突列が巡る。45・46は区画された刺突列が巡る。47～49は刺突帯が巡る。

50～52は無文土器の深鉢口縁部片である。50は胴部から直線的に移行する形状である。51・52は内湾して口縁部が内傾する形状である。

53～55は瘤付文系土器である。53・54は注口土器の胴部片である。53は瘤が1つ、54は弧線と瘤が3つ施文されている。55は深鉢の口縁部片であり、刻目列が巡る文様構成である。

56～59は底部破片である。56は胴下半部～底部にかけての破片で、復元底径3.9cmを測り、網代痕がある。57は胴下半部～底部にかけての破片で、復元底径5.6cmを測る。58は胴下半部～底部にかけての



第34图 8区出土土器



第35图 9区出土土器(1)

破片で、復元底径6.0cmを測り、網代痕がある。59は復元底径7.0cmを測り、網代痕がある。

9区出土土器（第35～37図）

9区グリッドは、第2・3・6・7・14号土坑が所在し、土坑が集中する傾向がある。なお、第2・3号土坑はC区グリッドの註記があり、C区に9区が含まれると考えられる。

1は諸磯C式の胴部片である。2・3は加曽利B3式であり、波状口縁深鉢の口縁部片である。

4～12は曾谷・高井東式であり、特に曾谷式と考えられる一群である。4～7は平口縁深鉢の口縁部片である。口縁部に刺突列が巡り、連弧充填文・帯縄文が下部に展開する。4～6は貼付文が配置される。8は口頸部に刺突列が巡る。9は口縁部が膨らみ縄文が施されている。口頸部は刺突列が巡り下部に縄文が施文される。10・11は瓢形土器とみられる口縁部片である。口縁部に沈線と刺突列が巡り、10は弧線内に縄文が施され、11は水平沈線内に縄文が施される。12は波状口縁深鉢の口縁部片である。山形の波頂部下には円形刺突を伴う貼付文が配置され、口縁部は縄文が施文される。鉢形状か。

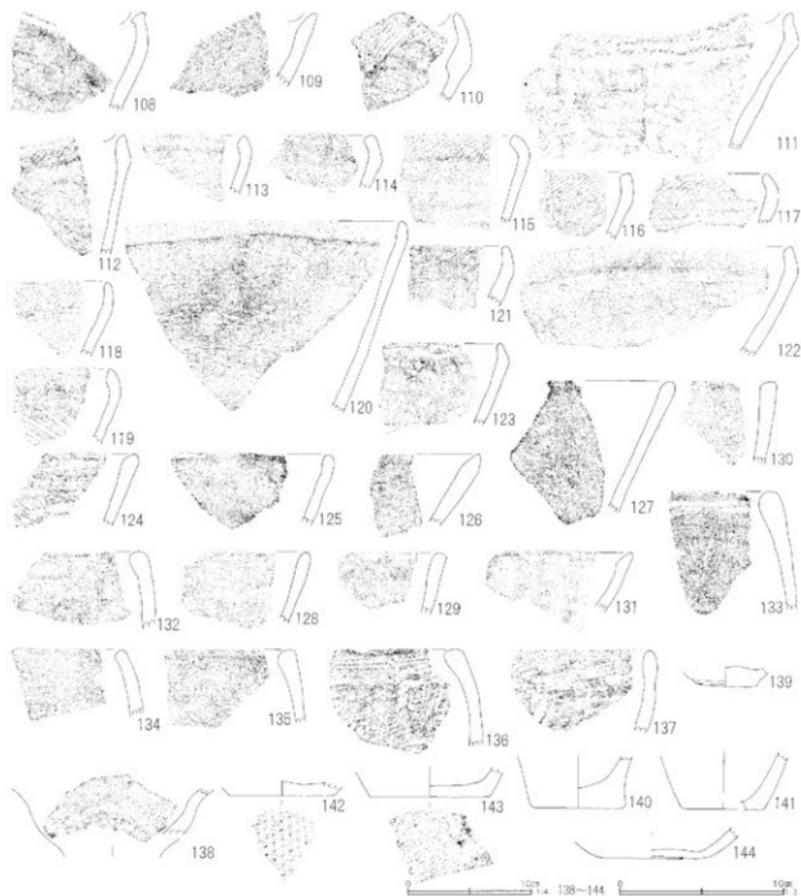
13～18・20・22は安行1式である。19・21・23～26は安行2式である。13～16は平口縁深鉢の口縁部片で外傾する形状であり、16はやや内湾する。帯縄文を主体とする文様構成である。17～19は口縁部が内傾する形状であり、19は肥厚し、縦長の貼付文が配置される。20・21は波状口縁深鉢の口縁部片である。20は山形の波頂部下に瘤状貼付文。21は波底部に縦長の貼付文が配置される。22は深鉢の胴部片であり、刺突列が巡り、連弧線は結節点で止まらない。23は胴部片であり、括れ部に刻目帯とブタ鼻状突起が配置される。24～26は平口縁深鉢の口縁部片である。24・25は口縁部が肥厚し内傾する形状である。24は口縁部に帯縄文が巡り、刻みをもつ縦長の貼付文が配置される。25は刻目帯が巡り棒状沈線が配置される。口縁部に瘤が2つ、下部にブタ鼻状突起が貼付される。26は細かな刻みのある突起が口端に配置され、口縁部に瘤が貼付される鉢形状か。

27～34、47～50は紐線文系土器、35～46、51～53は粗製土器で深鉢である。27～32は口縁部が肥厚せず、外傾・直立する形状であり、31を除き斜行沈線を地文とする。27は口縁部と胴括れ部に刻目帯を巡らし、復元口径23.3cmを測る。28は口縁部と胴括れ部に刺突帯を巡らす。29～31は刺突帯が巡る。32は刻目列が巡る。33・34は胴部片であり、括れ部に刺突帯が巡る。35～37は口縁部が肥厚し、直立する形状。いずれも斜行沈線を地文とし、口縁部に刺突列が施されるが、37のみ区画沈線がない。38～46は口縁部が肥厚し、内傾する形状である。43・45を除き斜行沈線を地文とし、口縁部に刺突列が施されるが、45のみ無文の隆帯で直下に刺突列が巡る。47・48は口縁部を刺突帯が巡り、47は口頸部に2条の垂下沈線区画内に2条の蛇行垂下文、48は弧線区画内に蛇行沈線が施されている。49は刺突帯が口縁部を巡る。50は胴部片で刺突帯が巡る。51は直立する口縁部片で無文の隆帯が巡り、直下に刺突列が巡る。52は内傾する口縁部片で刻目列が巡り、斜行沈線を地文とする。53は胴部片であり、沈線が紐線文を模して巡り、直下に斜行沈線が施される。

54～98は曾谷・高井東式である。54～72は波状口縁深鉢の口縁部片である。口縁部文様帯を数条の沈線・凹線、または隆帯・刺突帯を加えて構成する一群である。54～56は山形の波頂部で、54・55は縦長で刺突が加わる貼付文、56は分割される貼付文が配置される。57は撥形の波頂部に縦長で刺突が加わる貼付文。58・60はC字状貼付文、59は貼瘤が配置される。61・62は斜位の沈線が口頸部に施文される。65は楕円区画を耳状に張出す隆帯で表現する。72は波底部に2つの貼瘤を配置し沈線により楕円枠が施文される。口頸部には端が途切れる稲妻状沈線がみられる。73～93は平口縁深鉢の口縁部片である。口



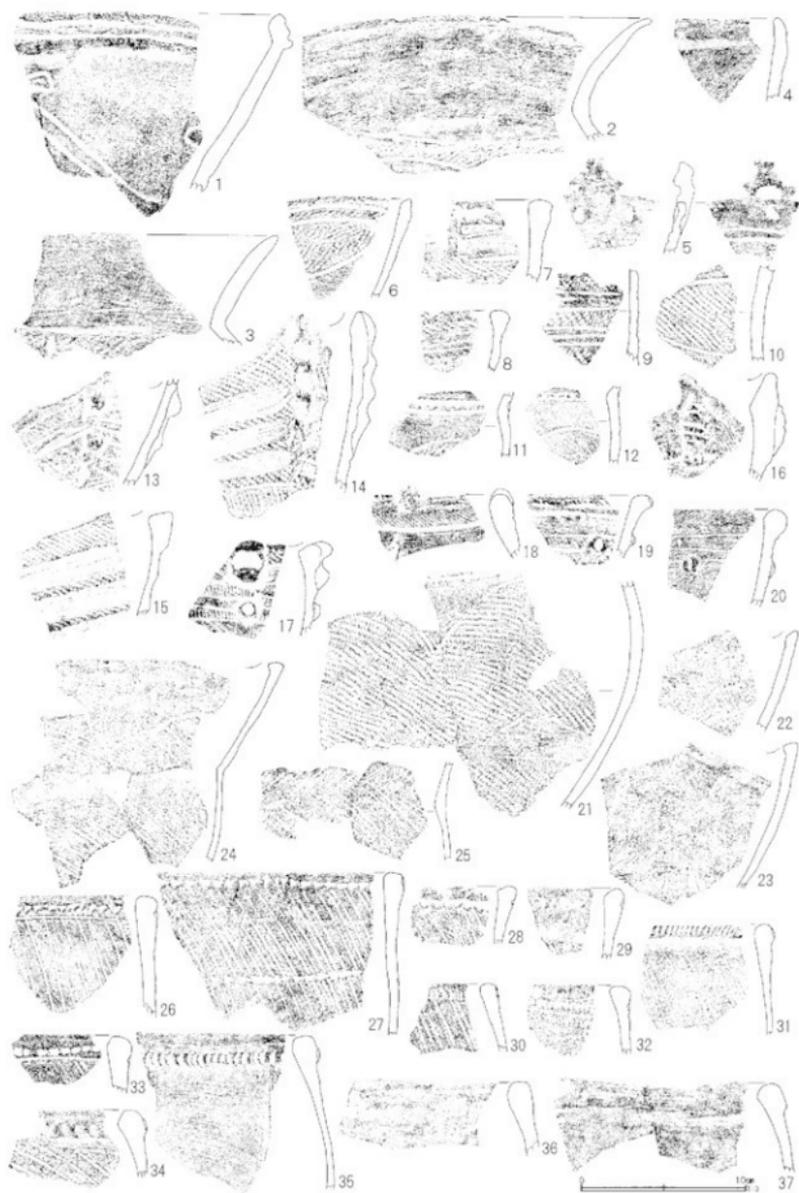
第36图 9区出土器(2)



第37図 9区出土土器(3)

縁部に数条の沈線・凹線が巡る構成を主体としており、貼付文も配置される。73は貼付文下に斜行二重沈線が施される。78～79は口縁部と文様帯下部に縄文を施文する。85は縦長の貼付文に刺突が加えられる。86～88は文様帯下部が刺突列であり、86は復元口径30.2cmを測る。89・90は沈線が枠状化し、縦長の貼付文が配置される。91は無文であり、中央が窪む縦長の貼付文が配置される。92は内湾して内傾する口縁部片であり、縄文が施され、2条の沈線が巡る。93はやや内湾して直立気味になる口縁部片であり、縄文が施され沈線が巡る。

94・95はソロバン玉形を呈する鉢である。96・97は浅鉢の口縁部片であり、口縁部が屈曲して内傾する形状である。98は湾曲して外傾する浅鉢の口縁部片である。3条の沈線が巡り、瘤が貼付される。99



第38图 10区出土土器(1)

は直線的に外傾する口縁部片で、沈線と帯縄文が展開する。復元口径10.2cmを測る。異形台付土器か。100は浅鉢で、口頸部が湾曲して口縁部が直立する形状。口唇がやや張出し、直下に2条の沈線が巡る。口頸部には、縄文が施文される。101は台付鉢形土器の胴部片であるが、屈曲部に刺突帯が巡る。下半部には連弧文が連続する。

102-107は瘤付文系土器である。102-105は注口土器である。102は口縁部の貼瘤を2条の沈線で連結する口縁部片である。103は口縁部が屈曲して内傾する形状である。貼付文と2条の沈線が巡る。104は内傾する口頸部片とみられる。貼瘤と横帯区画を文様とする。105は胴部片である。穿孔がみられ、弧線文区画で縄文が施文されている。106は深鉢の口頸部片か。3点の貼瘤と波状とみられる帯縄文と沈線が施文されている。107は外傾する口縁部片であり、刻目列が巡る文様構成。

108-123は曾谷・高井東式である。108-112は波状口縁深鉢の口縁部片である。108・109は無文で波頂部が山形である。110・111は屈曲する口縁部に縄文が施されている。113-123は平口縁深鉢の口縁部片である。口縁部が屈曲して、直立・内傾する形状である。115-119は口縁部に縄文が施され、119は口頸部に斜位の沈線、123は口頸部に羽状沈線が施されている。

124-137は粗製系無文土器の深鉢口縁部片である。124-131は口縁部が外傾する。132-136は口縁部が内傾する形状であり、134を除き口縁部が肥厚する。137は口縁部が直立する形状。

138-144は底部破片である。138は台付鉢形土器である。139は復元底径5.0cmを測る。140は底径7.6cmを測る。141は復元底径6.8cmを測る。142は復元底径8.4cmを測り、網代痕がある。143は復元底径9.8cmを測り、網代痕がある。144は復元底径9.8cmを測る。

10区出土土器（第38-40図）

10区グリッドには、所在する遺構は無い。

1は堀ノ内式の口縁-胴部片である。二重沈線が口縁部を巡り、口頸部から胴部へ斜位に垂下する。

2-5は加曾利B式後半の土器である。2・3はソロバン玉状を呈する鉢で、胴部には区画線が巡り、縄文が施文されている。4・5は平口縁深鉢の口縁部片である。4は口縁部が無文であり、口頸部に斜位の沈線が施文される。5は口端に突起が付く。口頸部外面に刺突列が巡り、内面に2条の沈線が巡る。

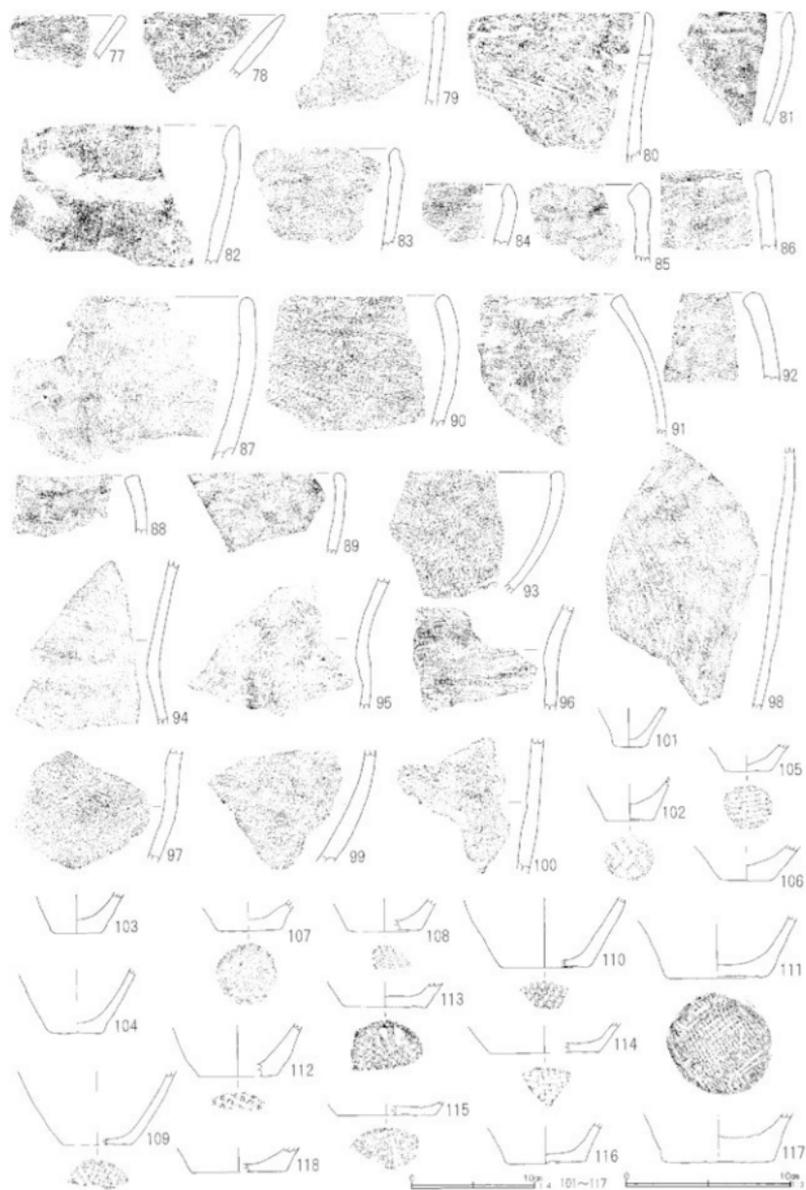
6は曾谷・高井東式の平縁の口縁部片。深鉢か。細い帯縄文が口縁部を巡り、弧線文が展開する。

7-15は安行1式である。16-20は安行2式である。7・8は肥厚して直立する平口縁深鉢の口縁部片と思われる。帯縄文が巡る文様構成である。9-12は胴部片である。9は帯縄文がみられる。10は沈線区画を縄文が充填する。11・12は括れ部に刺突列が巡り、下部に連弧文がみられる。13-17は波状口縁深鉢の口縁部片である。13・14は帯縄文が文様を構成し、波頂部下に縦長の貼付文を配置する。16は波頂部下に刻みのある縦長の貼付文が配置される。17は口縁部の帯縄文以下は刻目帯であり、波底部に刺突のある貼付文が配置される。18は肥厚して内傾する口縁部片である。口端に瘤が貼付され、口頸部に蛇行垂下文が施される。19は台付鉢形土器の口縁部片である。口縁部に刻目列が巡り、口頸部に刻目帯と押圧のある瘤が配置される。20は肥厚して外傾する台付鉢形土器の口縁部片である。帯縄文が口縁部を巡り、口頸部に連弧充填文の結節部に刻みのある瘤が配置される。21は胴下半部であるが、互連弧充填文は沈線が粗雑である。

22-24は加曾利B3式の深鉢である。22・23は波状の口縁部片であり、口縁部は無文であるが、口頸



第39图 10区出土土器(2)



第40图 10区出土土器(3)

部は施文され、22は格子目、23は縦位の沈線である。24は平縁の口縁部片であり、口縁部は無文であるが、口頸部は斜位の沈線が施文される。25は胴括れ部片であり、羽状沈線が施される。

26～33は粗製土器、34・35は紐線文系土器、36・37は無文土器の深鉢口縁部片である。口縁部が肥厚し、直立・内傾する形状であり、斜位の沈線を地文とする。26～32は安行1式、33～37は安行2式に並行する土器である。26～29は口縁部に刺突列が巡り、26は沈線で区画され、27は胴部にも刺突列が巡る。30～31は口縁部に刻目列が巡る。33は口縁部の沈線区画内に刺突列が巡る。34・35は口縁部に刻目帯が巡る。36・37は肥厚し内傾する口縁部である。

38～69は曾谷・高井東式である。38～50は平口縁深鉢の口縁部片であり、口縁部が屈曲して直立・内傾する形状。38・39の口縁部は無文である。40～43は口縁部に縄文が施され、42・43は口頸部に斜行沈線が施される。44～50は数条の凹線が口縁部を巡る。44・49は縦長でスリットが入る貼付文が配置される。47は口頸部に斜行沈線が施される。48は鉢の可能性がある。51～62は波状口縁深鉢の口縁部片。51・52は山形の波頂部下に刺突を伴う貼付文が配置され、51は凹線、52は刻目帯により文様帯が構成される。53は口縁部に縄文が施される。54～57は波頂部の突起である。54はバナナ状で、下部に貼瘤が付く。55は丸みを帯びた楕形である。56は三角錐状であり、外面の中心が窪む。57は環とコップが結合した形状で、籬状装飾が加えられる。58は橋梁状把手が貼付される。59～62は沈線と刻目・刺突帯による文様構成である。59は口頸部に蛇行垂下文が施される。62は口頸部に稲妻状文が施される。63は胴部片であり、刺突帯が巡る。64～66は平口縁部片であり、直立・外傾する形状である。口縁部の文様は沈線主体であり、64は杵状沈線と貼付文の剥落が認められる。67は口縁部片であり、突起が付く。68は口頸部が屈曲する口縁部片でボタン状貼付文が配置される。69は内傾する口縁部片。口縁部を刻目帯が巡り、直下に沈線により施文され、平行垂線間は無文である。

70～76は瘤付文系土器の一群である。70は波状口縁深鉢の口縁部片である。刻目列が口縁に沿い、口頸部に刻目列が水平に数条巡る。71は胴部片であり、刻目による構成である。横位連鎖の入組文が。72・73は平口縁深鉢の口縁部片である。文様は弧状沈線を施文する。口端に突起がみられ、72はスリット入りの双頭である。72は口縁部に貼瘤がみられる。74は胴部片であり、刻目列下は連弧沈線が施される。75は口頸部片であり、注口土器と思われる。縄文帯と縦長の貼付文が配置される。76は台付の鉢形土器の口縁部片である。復元口径32.6cmを測る。口縁部は無文であり、口頸部以下に凹線区画内に縄文が充填され文様が展開する。ボタン状貼付文と、縦長で細かく刻む貼付文を交互に配置し、2個一対の小突起が配置される。体部下半には弧状沈線が施文されている。

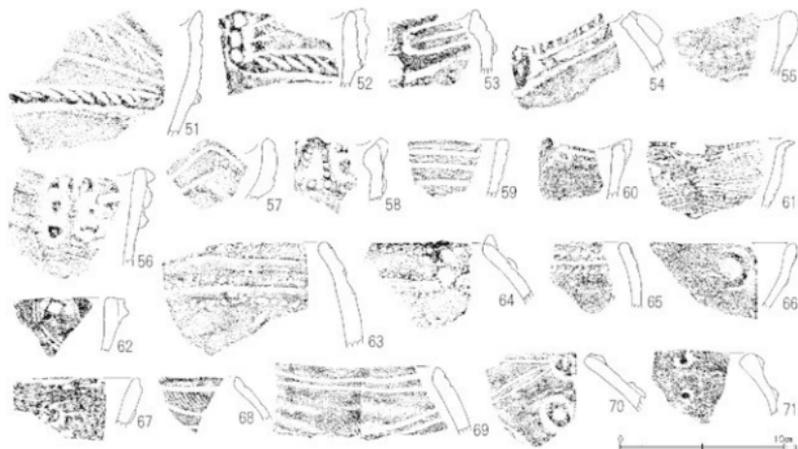
77～100は無文土器の深鉢である。77～93は口縁部破片である。77・78は口縁部が外へ開く形状である。79～84は口縁部がやや外傾しており、79・80は直線的に移行、81～84はやや湾曲する。85～87は口縁部が直立する形状。88～92は口頸部が湾曲して口縁部が内傾する。93は口頸部の湾曲が強く、鉢が。94～100は胴部片である。94～96は括れ部。97・98は下半部。98は斜位の器面調整痕がみられる。

101～118は底部破片である。101は胴下半～底部にかけての破片で、底径2.2cmを測る。102は底径3.8cmを測り、網代痕がある。103は底径4.0cmを測る。104は胴下半～底部にかけての破片で、底径4.0cmを測る。105は底径3.8cmを測り、網代痕がある。106は底径3.8cmを測る。胴下半部に斜位の連続沈線が施文されている。107は底径5.0cmを測り、網代痕がある。108は復元底径5.6cmを測り、網代痕及び糸痕がみられる。109は胴下半～底部にかけての破片で、復元底径5.6cmを測り、網代痕がある。110は胴下半～底部にかけての破片で、復元底径6.9cmを測り、網代痕がある。111は胴下半部～底部にかけての破片



第41図 11区出土土器(1)

で、底径8.4cmを測り、網代痕がある。112は胴下半～底部にかけての破片で、復元底径6.4cmを測り、網代痕がある。113は復元底径7.0cmを測り、網代痕がある。114は復元底径8.8cmを測り、網代痕がある。115は復元底径8.0cmを測り、網代痕がある。116は胴下半～底部にかけての破片で、復元底径6.4cmを測り、網代痕がある。117は復元底径9.0cmを測る。118は復元底径8.0cmを測る。



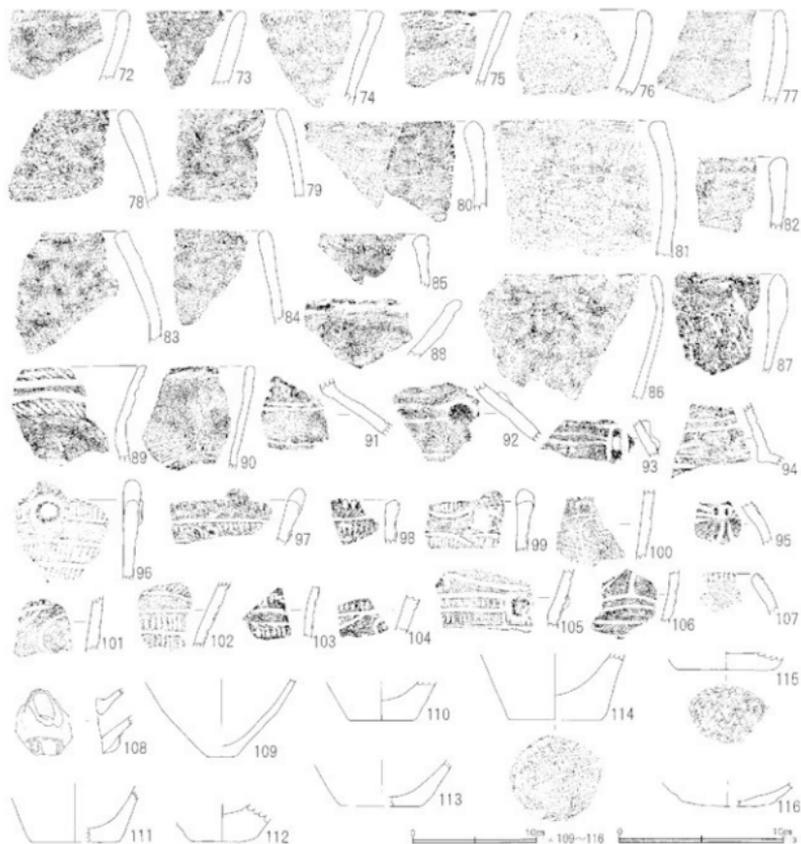
第42図 11区出土土器(2)

11区出土土器 (第41-43図)

11区グリッドには、第6号住居跡が所在する。

1-26は安行2式である。1・2は波状口縁深鉢の口縁部片である。1は口縁部に刻みのある縦長の貼付文が配置される。2は口頸部にブタ鼻状突起が貼付される。3-6は胴部片である。3・5・6は刻目列と斜位の沈線を文様構成とし、3・6はブタ鼻状突起が貼付される。4は帯縄文が巡るが、ボタン状貼付文が配置される。7-16は平口縁深鉢の口縁部片である。帯縄文を文様構成の主体とする。13・14・16を除き内傾して肥厚する形状である。7は杵状化した沈線区画がみられる。12は口端に口縁部まで連携する突起が付く。13・14は口縁部が肥厚して直立する形状。13は口端に突起が付く。14は口端に2つの刻みがある突起が付く。15は沈線により加飾される円錐状の突起が口端と口縁部に配置され、刻目帯による文様の起点となっている。口端は幅広であり、内傾して肥厚する口縁部の形状である。16は口縁部が肥厚してやや外傾する形状である。17-19は口縁部が肥厚して内傾する形状であるが、帯縄文下に刺突列が巡る。20は口端に低位の突起が配置される。口縁部は沈線の起点となる瘤が貼付されている。21は口頸部に刺突列がみられる。22は鉢形土器の口縁部片であり、刻目列が巡る。23-26は胴部片である。注土器等の特異な器形を呈すると思われる。25は刻みのある横長の貼付文が配置される。26は弧線文の結節点にC字状の貼付文が配置される。

27-42は粗製土器、43は紐線文系土器の深鉢口縁部片であり、地文が斜位の連続沈線を基調とするものである。27は丸棒状工具の側面を使用した圧痕紐線文であり、口縁部が外傾する形状である。28-33は口縁部が肥厚して外傾する形状である。28は紐線を模した沈線区画と縦位の連続沈線。29・30は刻目列である。31・32は刺突列が巡るが、31は沈線区画がなく横位の連続沈線が施文される。33は沈線区画が刺突列に変わる。34-50は口縁部が肥厚して内傾する形状であるが、40・45は外傾し、49・50は直立する。34は刻目列、35は刺突列を粗雑な平行沈線が区画する。36・37は刺突列である。38・39・41は刻目列が巡るが、41は沈線区画がない。40は隆帯下に二重沈線間に刺突列が施される区画線である。42・

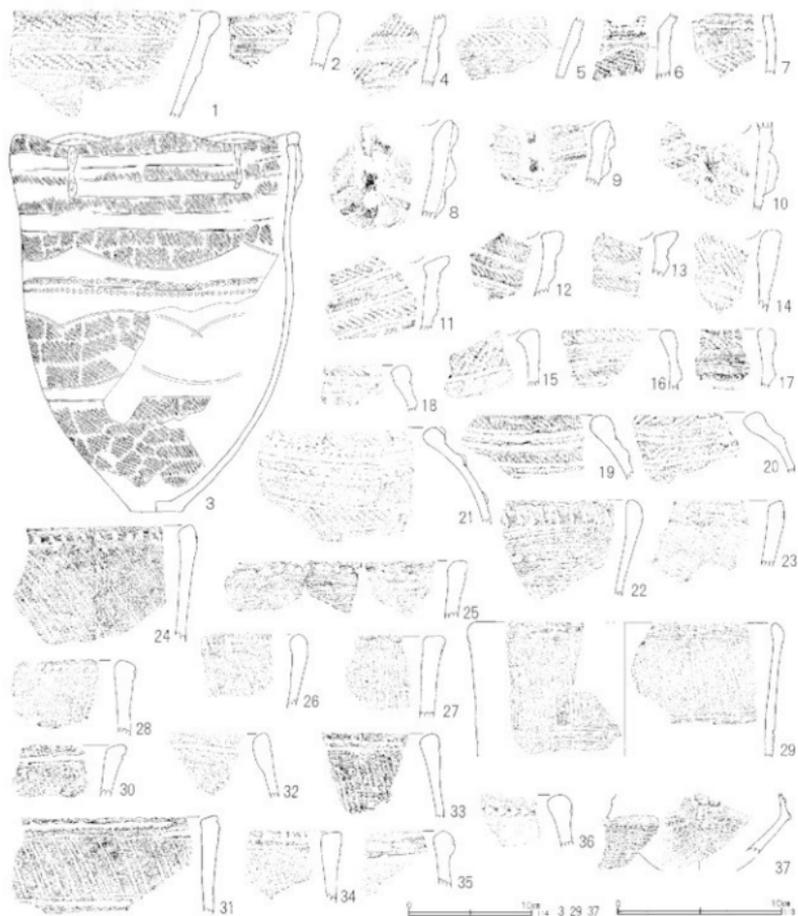


第43図 11区出土土器(3)

43は刺突帯が巡る。

44～50は紐線文系土器の口縁部片である。口縁部に無文域を設け、圧痕文を施す紐状貼付文が巡る。紐線下は多条沈線を施す。

51～71は曾谷・高井東式である。51～58は波状口縁深鉢の口縁部片である。口縁部文様帯は沈線と隆帯の構成を主体とする一群である。51・52は文様帯の下位を刺突帯が水平に巡り、52は刺突を伴う縦長の貼付文が配置される。53は沈線が杵状である。54は波底部に縦長の貼付文がみられる。55は隆帯下に刺突列が沿う。56は波底部に貼瘤が縦3つ・2列で配置される。57は山形の波頂部で2条の沈線が口縁に沿う。58はΛ状で刺突を伴う貼付文が波底部に配置される。59は平縁の口縁部片であり、直線的に外傾する。3条の沈線が巡る。60・61は波状の口縁部片である。61は口縁部が屈折して外へ突き出す形状



第44図 13区出土土器(1)

である。文様帯は刺突列と沈線を主体とする。62は平緑の口縁部片であり、ボタン状貼付文が配置され、二重沈線が弧線を描く。63～65は内湾する口縁部片である。刺突列と沈線が巡る構成である。66は外傾する口縁部片である。無文であるが、C字状の貼付文が配置される。67は外傾する口縁部片である。貼瘤がみられ、口端が窪む形状である。68は内湾する口縁部片である。口端を無文とし、直下に沈線により区画された弧状充填文が展開する。69・70はソロバン玉形を呈する鉢の口縁部片である。69は二重沈線による鋸歯状文が。70はボタン状貼付文が配置され、口縁部は単線、斜行線は二重のX状沈線文が展開する。



第45图 13区出土土器(2)

72～88は粗製系無文土器である。72～87は深鉢口縁部片、88は浅鉢口縁部片である。72～75は直線的に移行する口縁部が外傾する形状。76～77は口頸部が湾曲して口縁部が直立する形状。78～85は口縁部が内傾する形状。86は口縁部が湾曲して内傾する形状。87は口縁部が肥厚し、直立する形状。

89～94は注口土器であり、横帯区画を文様構成とする。89・90は外傾する口縁部片。89は帯縄文間に2条の凹線が巡る。90は口頸部下半に沈線が巡る。91・92は胴上半部片である。92はボタン状貼付文が配置される。93・94は口頸部片である。93は縦長の貼付文と、貼瘤が配置される。94は沈線が主体の文様構成である。95は胴部または口頸部片とみられるが、弧線の結節点に貼瘤が配置される。小形の器形が想定される。

96～107は瘤付文系の土器である。96～99は平口縁深鉢の口縁部片であり、刻目列を主体とする文様構成がみられる。96・97・99は口端に突起が付き、96は口縁部にボタン状貼付文が配置される。99は上下で対になる弧線区画に刻目が施されている。100～106は胴部片である。刻目列のほか、100～105は入組状に構成される弧線文がみられる。106は三叉状の沈線が施されている。107は内傾する口縁部片である。刻目列が巡り、下部に弧線がみられる。

108は注口部片である。下部に横長で刻みがある貼付文が配置される。

109～116は底部破片である。109は胴下半部～底部にかけての破片で、底径2.2cmを測る。110は復元底径5.2cmを測る。111は復元底径7.2cmを測る。112は復元底径5.0cmを測る。113は復元底径6.5cmを測る。114は底径7.6cmを測り、網代痕がある。115は復元底径8.0cmを測り、網代痕がある。116は復元底径7.0cmを測る。摩耗が著しい。

13区出土土器（第44～47図）

13区グリッドには、所在する遺構は無い。

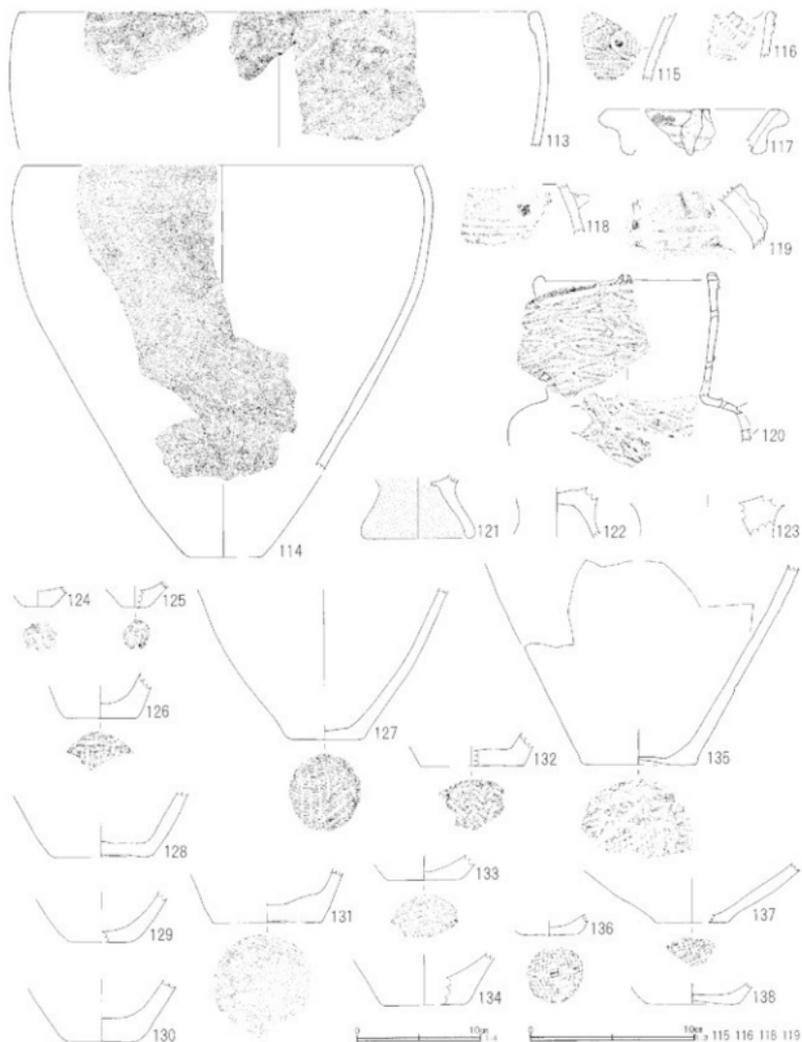
1～17は安行1式、18～21は安行2式である。1・2は平口縁深鉢の口縁部片である。3は波状口縁深鉢であるが、ほぼ完形であり、口径23.0cm、器高31.9cm、底径4.3cmを測る。口縁部は低調な5単位の波状であり、縦長で中央が窪む貼付文が波底部に配置される。胴部への施文は、区画線は途切れがちである。4～7は胴部破片である。6は刺突列下の連弧文であるが、弧線の曲率が強く、刺突列に近接している。8～15は波状口縁深鉢の口縁部片である。帯縄文と沈線区画による文様構成である。8は山形の波頂部下に縦長の貼付文が配置される。9は波底部に貼付文が配置される。10は波頂部を欠損するが、縦長の貼付文がみられる。11・13は口唇部が外側へ突き出る形状。16は内湾する口縁部片である。帯縄文間に数条の沈線が施される。17は直立する口縁部片である。18～21は肥厚して内傾する口縁部片である。19・21は帯縄文下に刺突列が巡る。

22～36は粗製土器の深鉢口縁部片である。口縁部に文様を巡らし縦位・斜位の連続沈線を地文とする構成を基本としている。22は沈線区画がなく、横位の連続沈線を地文とする。23～28は刺突列による施文。29・31は口縁部と胴部に沈線区画の刺突列を巡らす。29は復元口径24.0cmを測る。30・32は沈線区画により細線を模している。33・34・36は刺突列が巡る。35は隆帯に横位の強いナデがみられる。37は台付鉢形土器の胴部破片である。上半部は刻目帯が巡り、要所に縦長の貼付文を配置し、下半部は連弧線が連続する。

38～95は首谷・高井東式である。38～45は波状口縁深鉢の口縁部片である。38～44は口縁部が無文である。42は口頸部に斜行沈線が施文される。43は口頸部に羽状沈線が施文される。44は口頸部に斜位の



第46图 13区出土土器(3)



第47図 13区出土土器(4)

沈線が施文される。45は口縁部に沿って縄文帯が施される。46・47は平口縁深鉢の口縁部片であり、口縁部が内折する形状である。47は口縁部に縄文が施される。48～69は波状口縁深鉢の口縁部片である。48・49は山形の波頂部下に縦長で刺突のある貼付文が配置される。50は刻目列2条と間の沈線が口縁に

沿う文様構成で、波底部に分割される貼付文が配置される。波頂部は4単位であり、復元口径44.5cmを測る。51は波頂部が窪み双頭となる。2条の沈線が口縁に沿う文様構成で、波底部に貼付文が配置される。52-55は波頂部の突起である。52はバナナ状で根元に突起が貼付される。53は楕円に深く挟りが入りV字状を呈する。54はコップ状である。55は横倒しの円柱状であり、籬状装飾が施される。56-68は隆帯・沈線により口縁部文様帯が構成される。要所に貼付文を配置する。56・57は橋梁状突起が波頂部・波底部に配置される構成。56は波頂部が4単位とみられ、復元口径23.0cmを測る。58はC字状の貼付文がみられる。61・63-65は枠状化したモチーフ。68は波頂部が4単位であり、復元口径20.4cmを測る。70-74は平口縁深鉢の口縁部片であり、口縁部が屈曲して内傾する形状である。70は無文である。71-74は口縁部に沈線が巡る。72は貼付文が配置される。75は平口縁深鉢の口縁部片であるが、耳状に隆起する貼付文が配置される。76-79は外傾する口縁部片である。76は口縁部に瘤が貼付される。77-79は沈線が口縁部を巡り、77は縦長の貼付文が配置される。80-87は内傾する口縁部片であり、ソロバン玉形の鉢である。80-82は沈線が口縁部と口頸部に巡る。縄文の施文箇所に違いがある。83-87は鋸歯状文が展開する構成であり、単線・二重線の違いがみられる。83-85はボタン状貼付文が配置されている。88は外傾する口縁部片であり、4条の沈線が巡る。89は口縁部片であり、屈曲して直立する形状である。口縁部の文様帯は沈線と刻目帯で構成する。口端から口縁部へ貼付文が配置される。90は平口縁深鉢の口縁部片であり、口頸部に斜行沈線が施される。復元口径27.2cmを測る。91は浅鉢の口縁部片で、口頸部が湾曲し口縁部が直立する形状。1条の沈線と湾曲した貼付文が配置される。92は浅鉢の口縁部片で、直立する形状である。

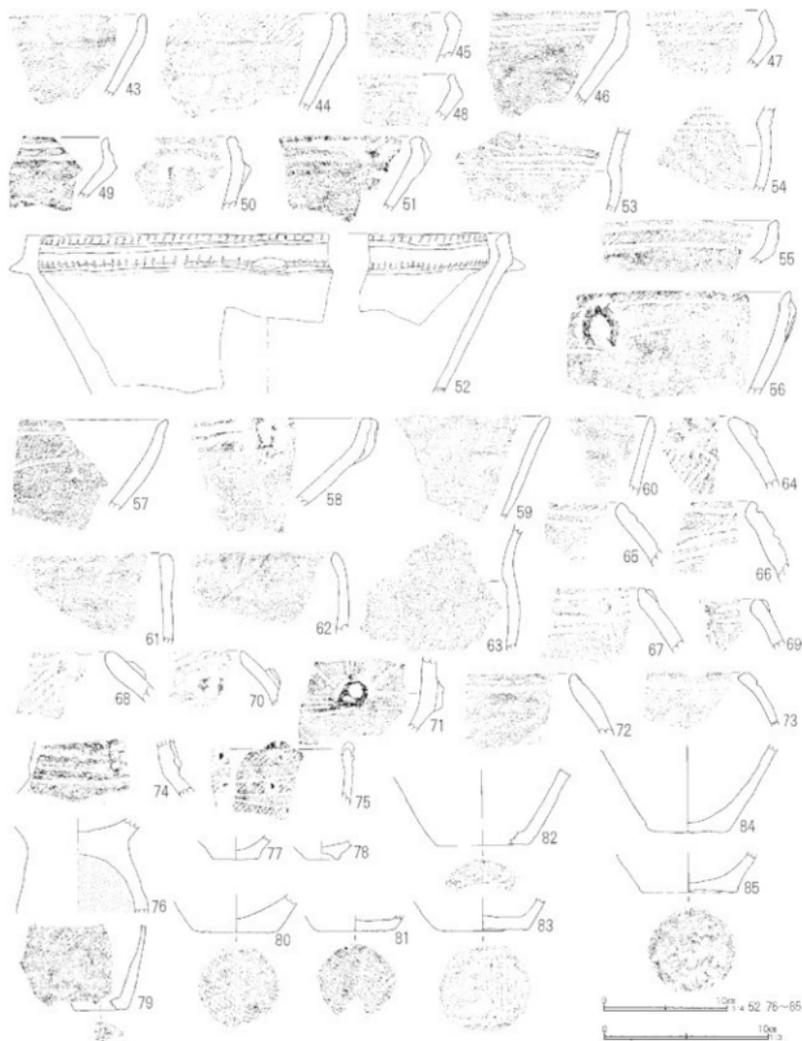
93-104、107・108は無文土器の深鉢口縁部片である。93・96・97は胴部から直線的に移行して直立する形状である。94は口縁部が短く内折する形態である。95は直立する口縁部で、復元口径28.6cmを測る。横位のナデ痕がみられる。98-101は口縁部が内湾・内傾する形状である。102は直線的に移行する形状を呈する。103・104は口縁部に特徴を認めることができる。105・106は鉢であり、外反が強い口縁部片である。断面形態は内面が「く」字状を呈する。108は口縁部が肥厚し直立する形状である。109-112は胴部片であり、断面形態が異なる。109はまばらな斜行沈線が施される。110は胴括れ部に羽状沈線が施される。113・114は無文土器の平口縁深鉢である。113は復元口径42.0cmを測り、114は32.2cmを測る。

115-120は瘤付文系土器である。115・116は深鉢である。115は口頸部片で、縦位の弧線文と刻目列が展開し、瘤が貼付される。116は波状の口縁部片であり、刻目帯が口縁に沿う。117-120は注口土器であり、横帯区画と貼付文が施される。117は口縁部片で、復元口径16.9cmを測る。帯縄文が口縁部を巡り、縦長の貼付文が配置される。赤彩の痕跡がある。118は胴部片または口頸部片と思われるが、沈線により横帯区画が構成され、突起する貼瘤が配置される。120は口縁-胴部片である。口径14.5cmを測り、赤彩の痕跡がある。木の葉状に構成する弧線文の結節点に貼瘤を配置するモチーフが展開する。十字状の穿孔箇所が、口頸-体部に認められる。

121-138は底部破片である。121-123は台付土器の脚台部である。121は脚台径7.0cmを測り、赤彩の痕跡ある。122・123は接合部。124は底径2.6cmを測る。125は底径2.4cmを測る。126は復元底径5.8cmを測る。網代痕がある。127は胴下半-底部にかけての破片で、底径6.0cmを測る。網代痕がある。128は底径8.3cmを測る。129は復元底径5.2cmを測る。130は底径6.4cmを測る。131は底径8.8cmを測り、網代痕がある。132は復元底径8.6cmを測る。網代痕がある。133は復元底径5.8cmを測る。網代痕がある。



第48图 14区出土土器(1)



第49図 14区出土土器(2)

134は復元底径6.5cmを測る。135は胴下半 - 底部にかけての破片で、底径9.2cmを測る。網代痕がある。
 136は底径4.6cmを測る。137は復元底径6.0cmを測る。138は復元底径7.8cmを測る。

14区出土土器（第48・49図）

14区グリッドには、所在する遺構は無い。

1～4は加曾利B3式の波状口縁深鉢の口縁部片であり、山形の波頂部を呈する。1・2は口縁部に刺突列が巡り、以下を縄文帯で区画し、口頸部に沈線が巡る。3・4は無文である。

5・6は曾谷・高井東式の平口縁深鉢の口縁部片である。5は口縁部にノ字状の貼付文と沈線が施文され、口頸部に縄文が施される。6は口縁部に多条沈線が巡り、刻みのある縦長の貼付文が配置される。

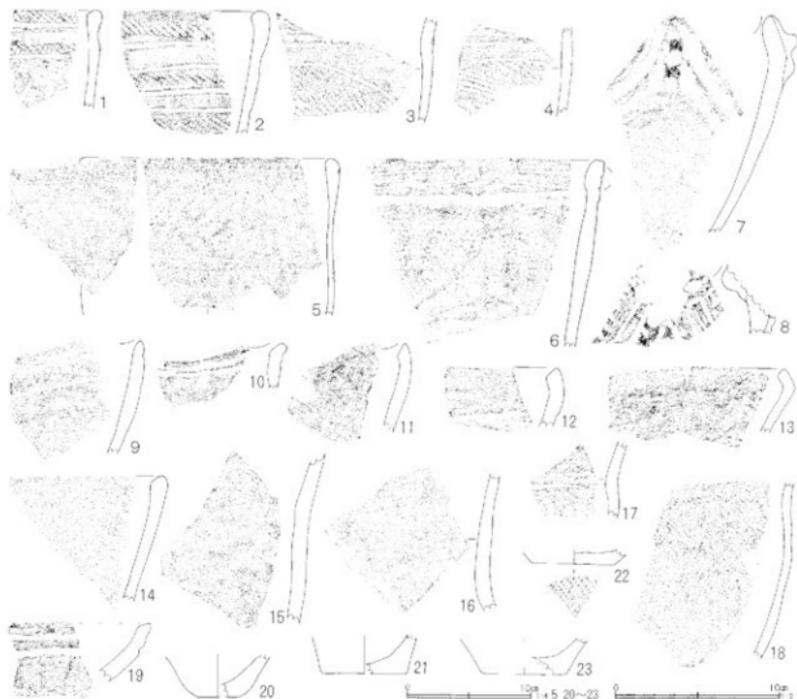
7・8は加曾利B2式後半の深鉢胴部片であり、7は入組文の一部か。8はタスキ状入組文が展開する。9は紐線文系土器である。口縁部と胴部に丸棒状工具の側面を使用した圧痕紐線文が巡り、斜行沈線を地文とする。復元口径25.0cmを測る。

10・11は安行1式、12～21は安行2式である。10～12は平口縁深鉢の口縁部片である。11は沈線区画が枠状化している。12は口端に突起が付き、口縁部は外面に帯縄文が巡り貼付文が配置され、内面に2条の沈線が巡る。13～15は波状口縁深鉢の口縁部片である。13は波頂部下に貼付文がみられる。14・15は帯縄文下に刻目列が続く。16～18は内傾する口縁部片である。帯縄文下に刺突列が巡る。17・18は口縁部が肥厚する。19は口縁部に刻目列、口頸部に刻目帯が巡り、ブタ鼻状貼付文が配置される。鉢形土器か。20は鉢形土器の口縁部片であり、口縁部に刻目列が巡り、口頸部に縦位の連続沈線が施文される。21は胴部片であり、ブタ鼻状貼付文がみられる。

22～25は粗製土器の深鉢口縁部片である。22は刺突帯が口縁部を巡る。23は紐線を模した沈線が巡り、斜位の沈線を地文とする。24は口縁部と胴部に巡る刺突列が区画線となり、縦位の沈線を地文とする。25は沈線で区画された刺突列が口縁部と胴部に巡り、縦位の沈線を地文とする。

26～58は曾谷・高井東式である。26～42は波状口縁深鉢の口縁部片である。26は無文であり、波頂部に親指状の突起が付く。27・28は波頂部下に貼付文を配置し、口縁に沈線と隆帯が沿う構成。28は波頂部に撥形の突起が付く。29・30は2条の沈線で構成され、文様帯下に貼瘤が配置される。31は口縁部に貼瘤が配置される。32・33は凹線が口縁に沿う。34～36は刺突帯が口縁に沿い、36は口頸部に蛇行垂下文がみられる。37は凹線が口縁に沿う。38は刺突帯が口縁に沿う。39～41は山形の波頂部。39は口縁に凹線が1条沿う構成で、三角形区画下部に凹線と隆帯が水平方向に巡る。40は2条の刻目帯と間の沈線により構成される。41は刻目帯で三角形に区画され、半ばに底辺平行の分割帯が施される。42は2条の刺突帯と間の沈線により構成される。43～52は平口縁深鉢の口縁部片であり、口縁部が屈曲して内傾・直立する形状である。43は口頸部に格子目状の沈線が施される。44は口縁部に縄文が施文され、口頸部に斜位の沈線が施される。45は無文。46～51は沈線・凹線が巡る。50は文様帯下に貼付文が配置される。51は口縁部に貼付文が配置される。52は口縁部に刻目帯が2条巡る構成である。下段の刻目帯上に舌状の突起が貼付され、復元口径39.0cmを測る。53・54は胴部片であり、53は赤彩の痕跡がある。55は屈曲して直立する口縁部片である。2条の沈線が巡り、沈線間に縄文が施される。56・57は外傾する口縁部片であり、口縁部には2条の沈線が巡る。56は馬蹄状の貼付文が配置され、口頸部に斜位の沈線が施文される。58は口縁部が屈曲して外傾する。口縁部に2条の凹線・屈曲部に刺突が巡る。縦長で窪みのある貼付文が配置される。

59～63は無文土器である。59～62は深鉢の口縁部片である。59・60は外傾する形状である。61は胴部から直線的に移行しや内傾する形状である。62は口縁部が内傾する形状である。63は胴括れ部片である。

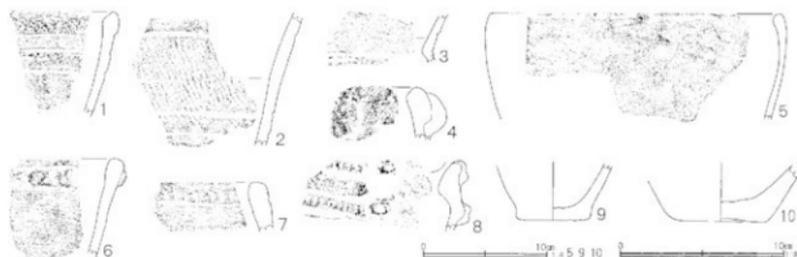


第50図 15区出土土器

64～73はソロバン玉形を呈する鉢である。64は口縁部の貼瘤を起点に斜位または弧状の沈線区画が施され縄文が充填される。65は口縁部に縄文を施文し、二重沈線が巡る。66は鋸歯状文であり、水平方向は半線、斜位は二重線であり、区画内に縄文を施文する。67・69は口縁部のボタン状貼付文を起点に二重沈線による横位と縦位の区画文が展開する。68は口縁部のボタン状貼付文を起点とする、二重沈線による鋸歯状文である。70は口縁部に斜位または弧状の沈線が施される。口頸部にはスリット入りの貼付文が配置され沈線が巡る。71は胴部片である。沈線の起点となるボタン状貼付文が配置される。72・73は内傾する口縁部片である。72は口縁部を巡る沈線区画内に短沈線が施され、口頸部に斜行沈線が施される。73は口縁部を巡る沈線下に、弧線文と垂下線が施される。

74・75は注口土器である。74は口頸部片で、刺突帯が巡り、瘤が貼付される。75は口縁部片であり、口端に4単位の突起がみられる。沈線区画に縄文帯を施し、貼瘤が配置。復元口径8.0cmを測る。

76～85は底部破片である。76は台付土器の脚台部である。内側に赤彩の痕跡がある。77は底径3.8cmを測る。78は底径2.5cmを測る。79は胴下半～底部にかけての破片で、外面には斜位の沈線が施される。復元底径4.2cmを測り、網代痕がある。80は底径6.6cmを測り、網代痕がある。81は底径6.4cmを測り、網代痕がある。82は胴下半～底部にかけての破片で、復元底径7.0cmを測り、網代痕がある。83



第51図 16区出土土器

は底径7.4cmを測り、網代痕がある。84は胴下半～底部にかけての破片で、底径6.6cmを測る。85は底径7.8cmを測る。

15区出土土器（第50図）

15区グリッドには、所在する遺構は無い。

1～4は安行1式である。1・2は平口縁深鉢の口縁部片であり、帯縄文による文様構成である。3・4は胴部片であり、括れ部の刺突列と連弧文がみられる。

5は粗製土器の深鉢で口縁～胴部片であり、胴部から直線的に移行する形状である。口縁部と胴部に沈線区画の刺突列が巡り、斜行沈線を地文とする。

6～13・19は曾谷・高井東式である。6・12・13は平口縁深鉢の口縁部片である。6は胴部から直線的に移行する形状であり、口縁部に2条の沈線が巡る。貼付文が剥落している。12は口縁部が内湾する。13は縄文が施文された口縁部が屈曲し内傾する形状。口頸部に斜位の連続沈線が施される。7～11は波状口縁深鉢の口縁部片である。7は山形の波頂部に刺突を伴う縦長の貼付文が配置される。文様帯は2条の凹線。8は刻目帯と沈線による文様構成。9は2条の沈線区画に縄文が充填される。10・11は粗製であり、10は二重沈線が施され、11は口頸部に斜行沈線がみられる。19は浅鉢の口縁部片であり、2条の凹線が巡る。

14は無文土器の平口縁の深鉢口縁部片であり、外傾する形状である。

15～18は胴部片である。15・16は無文。17は括れ部の無文区画を挟んで羽状沈線が施される。18は羽状沈線が施文される。

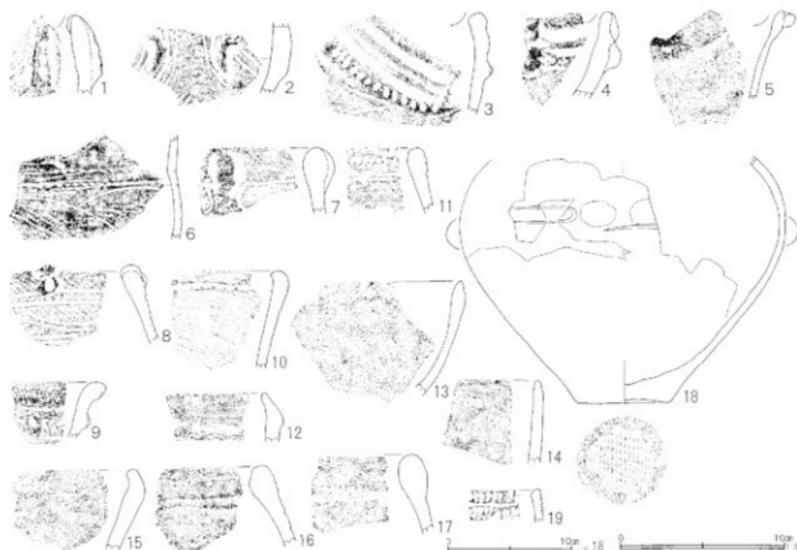
20～23は底部破片である。20は復元底径4.0cmを測る。21は復元底径7.0cmを測る。22は復元底径6.6cmを測り、網代痕がある。23は復元底径7.0cmを測り、網代痕がある。

16区出土土器（第51図）

16区グリッドには、竪穴状遺構が所在する。

1～3は安行1式である。1は平口縁深鉢の口縁部片であり、帯縄文を主体とする文様構成である。2は体部片であり、区画線が直線化した充填文である。3は括れ部片であり、弧線文が施され、刺突列が巡る。4は安行2式と考えられる。口縁部が肥厚して内傾し、帯縄文と貼付文による構成である。

5は無文土器の深鉢口縁部片である。口頸部より緩やかに内湾する形状。復元口径23.5cmを測る。



第52図 17区出土土器

6は紐線文系土器の深鉢口縁部片である。丸棒状工具の側面を使用した圧痕紐線文であり、下部に横位の連続沈線が施される。

7は粗製土器で、内傾する形状の口縁部片である。沈線区画の刺突帯が巡る。

8は曾谷・高井東式の深鉢口縁部片である。刻目帯と楕円状沈線区画で文様帯が構成され、波底部にボタン状貼付文が帯状に配置される。

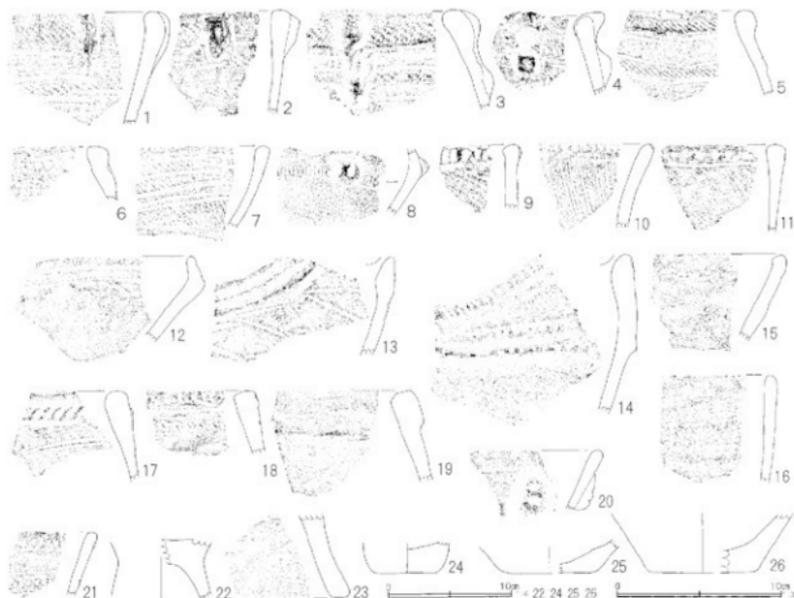
9～10は底部破片である。9は胴下半部～底部片で、底径6.0cmを測る。10は底径7.2cmを測る。

17区出土土器（第52図）

17区グリッドには、所在する遺構は無い。

1～5は曾谷・高井東式であり、波状口縁深鉢の口縁部片である。1は縦長の貼付文に刺突が施文される。2は沈線主体の口縁部文様帯に運動する耳状突起が貼付される。3は凹線と隆帯による文様構成であり、下部が刺突帯となる。4は凹線主体の文様で、波底部に縦長で窪みのある貼付文が配置される。5は瘤が口縁部直下に配置される。

6～9は安行式である。6は胴括れ部片であり、安行1式段階と考えられる。連弧線の片側が連結点で途切れない。7・8は平口縁深鉢の口縁部片であり、安行2式である。口縁部が肥厚し内傾する形状である。7は帯縄文下が杵状沈線となり、縦長の貼付文が配置される。8は口端に突起がみられ、ボタン状貼付文が配置される。口頸部には二重沈線区画による連弧充填文が展開する。9は台付鉢形土器の口縁部片と考えられ、刻目帯が2条巡る。



第53図 C区出土土器

10・11は粗製土器深鉢の口縁部片である。10は刺突列が通り、口頸部を斜行沈線が施される。11は沈線区画の刻目列が巡る。

12～17は無文土器深鉢の口縁部片である。12は口端が薄くなり三角形になる。13は口頸部が内湾し直立する。14は胴部から直線的に移行する形状。15は口縁部が屈曲して内傾する。16・17は口縁部が肥厚して内傾する。

18は注口土器と考えられる。底径7.6cmを測り、網代痕がみられる。体部上半には杵状の沈線文と、剥落するが2個一対の貼付文で構成される。19は瘤付文系の口縁部片であり、連続する刻目列が巡る。

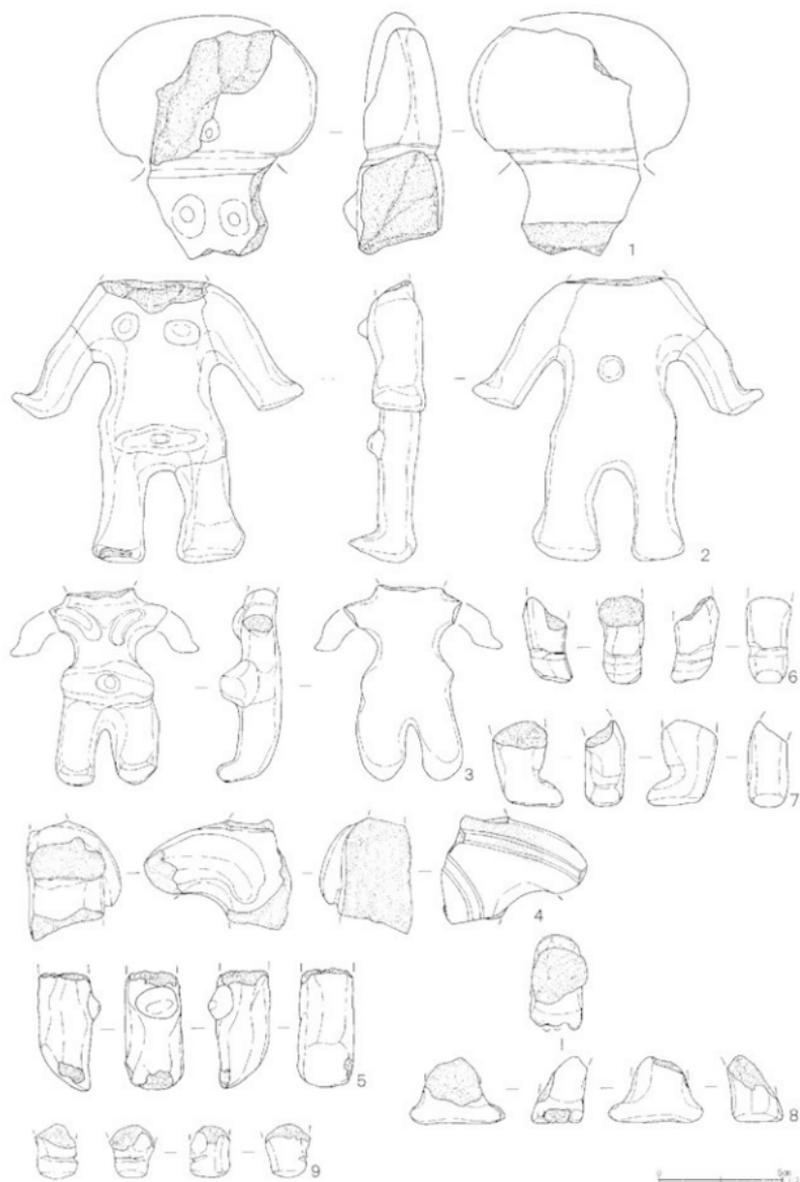
C区出土土器（第53図）

C区グリッドには、第3号土坑が所在する。前述であるが、C区は9区を含む可能性がある。

1～6は安行1式、7・8は安行2式である。1～5は平口縁深鉢の口縁部片であり、帯縄文による文様構成である。1は口縁部が外へ開き、縦長の貼付文が配置される。2は直立する口縁部に縦長の貼付文が配置される。3～5は内傾する口縁部で、3・4は縦長で窪みのある貼付文が配置される。6は内傾する口縁部片。7は鉢の口縁部片か。8は胴部片であり、刻目列に盲孔のある瘤が配置される。

9は紐線文系土器の口縁部片であり、圧痕を施す紐線が通り、斜行沈線を地文とする。

10・11は粗製土器である。10は外反する形状で、刺突列が巡る。11は胴部から直線的に移行し、口縁部が肥厚する形状で、沈線区画の刺突列が巡る。



第54圖 土偶

12～14は曾谷・高井東式である。12は平口縁深鉢の口縁部片である。口縁部は屈曲し、内傾する形状を呈し、2条の凹線が巡る。13・14は波状口縁深鉢の口縁部片である。13は2条の凹線が口縁部に施され、波頂部下に稲妻状沈線がみられる。14は口縁部を刻目帯が沿い、波頂部下の三角形区画を2条の刺突帯が巡る。

15・16は無文土器の深鉢口縁部片である。15は外傾する。16は胴部から直線的に移行する。

17～19は口縁部が肥厚して内傾する深鉢口縁部片であり、安行2式に並行する。17は紐線文系土器で、丸棒状工具の側面を使用した圧痕紐線文である。18・19は粗製土器である。18は磨耗しているが刺突帯が巡る。19は無文の紐線が巡る。

20・21は瘤付文系土器の口縁部片である。20は口縁部直下に横位の刻みがある貼付文が配置される。21は刻目列が無文区画挟み2段で巡る。

22～26は底部破片である。22・23は台付土器の脚台部である。24は復元底径5.6cmを測る。25は復元底径7.8cmを測る。26は復元底径9.2cmを測る。

第3表 土偶観察表

No	出土地点	部位	残存長	残存幅	厚さ	色調	胎土	赤彩
1	6号住屋	胴部	9.0	6.5	3.5	7.5Y R7/6橙色	A・B・D・I・J・K	不明
2	13区	体部	11.6	12.0	2.2	10Y R7/4にぶい黄橙色	A・B・D・E・I・K	不明
3	1区	体部	8.1	4.8	1.8	10Y R6/2灰黄褐色	A・B・D・G・K・O	不明
4	14区	右肩部	4.5	5.8	2.8	5Y R6/6橙色	A・B・E・G・I・K	有
5	13区	右脚部	4.9	2.3	2.2	10Y R8/4浅黄橙色	A・B・D・G	不明
6	C区	左脚部	3.6	1.8	1.8	7.5Y R7/6橙色	B・D・G・K	不明
7	15区	左脚部	3.5	1.6	2.2	7.5Y R6/4にぶい橙色	A・B・D・G・K	不明
8	6号住屋	右脚部	2.7	2.1	2.3	2.5Y R5/6明赤褐色	A・B・E	不明
9	11区	右脚部	2.2	1.7	1.6	7.5Y R4/2灰褐色	A・K	不明

(5) 土製品

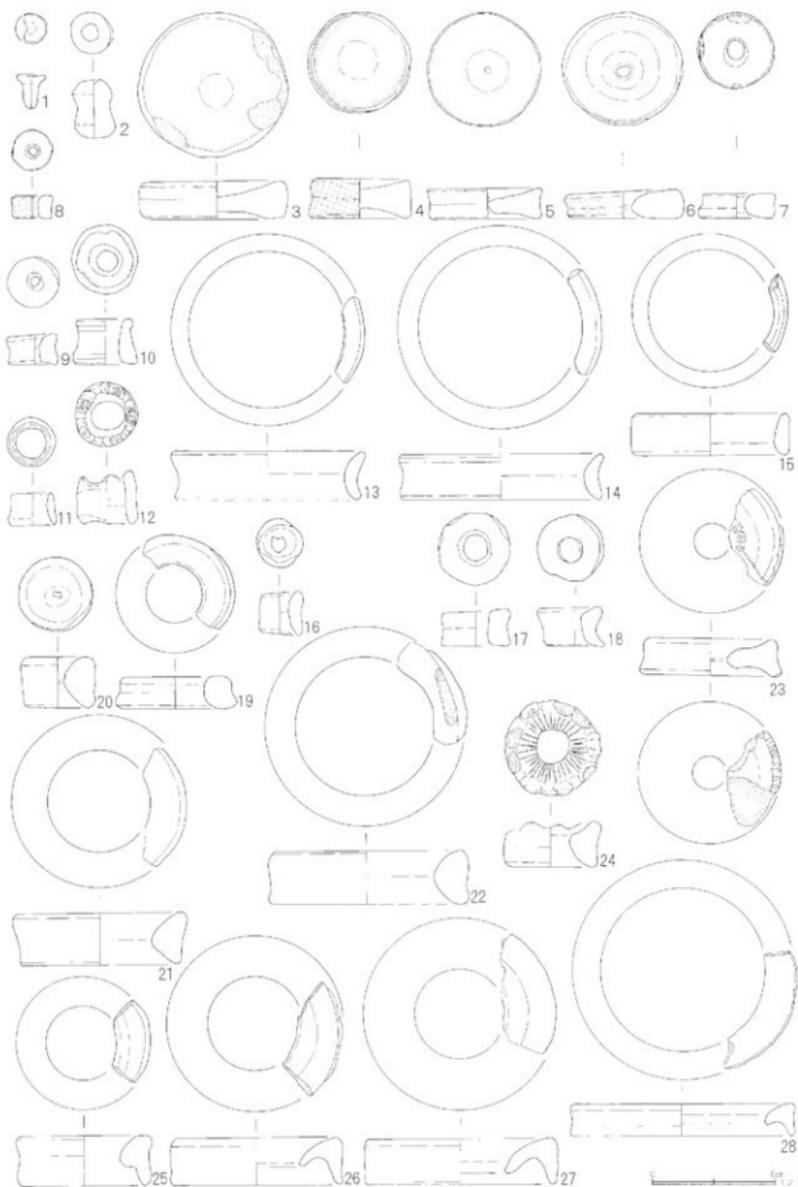
土偶 (第54図)

ここでは土偶を一括して図示した。法量等は観察表を参照されたい。

1は円形の窪みで口を、貼瘤で乳房を表現している。2は貼瘤で乳房を表現し、下腹部に横長の貼付文が配置され、裏面中央に円形の窪みがみられる。3は胸部に垂涎状の貼付文と下腹部に横長の貼付文が配置される。4は肩～胸部に垂涎状の貼付文が配置され、裏面に二重沈線による施文がみられる。5は膝の表現とみられる瘤が貼付される。6は窪ませて足首を表現する。7は8は沈線により足の指が表現され、かかとが張出す。9は足首の表現が沈線である。

土製耳飾 (第55図)

ここでは土製耳飾を一括して図示した。法量等は計測表を参照されたい。無文の耳飾が大半を占めるが、有文の耳飾が3点検出している。

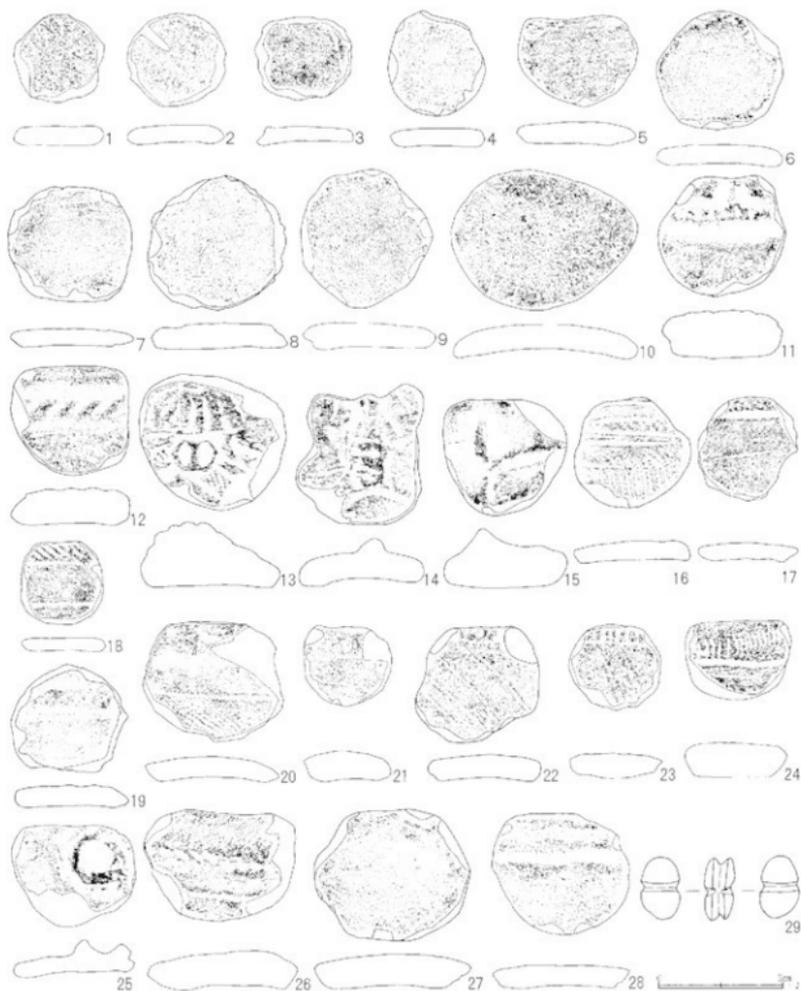


第55圖 土製耳飾

第4表 土製耳飾観察表

No.	出土地点	形状	種類	最大径	内径	高さ	色調	備 考
1	2区住居	耳柱型	無文	1.2	~	1.4	2.5Y R8/3淡黄色	
2	一括	耳柱型	無文	1.7	~	2.5	10Y R6/2灰黄褐色	
3	8区	円盤型	無文	5.9	~	1.6	10Y R6/2灰黄褐色	臼状
4	5号住居	円盤型	無文	4.2	~	1.7	10Y R8/3浅黄橙色	臼状
5	2区	円盤型	無文	4.7	0.2	1.8	2.5Y R8/3淡黄色	臼状
6	14区	円盤型	無文	4.9	0.6	1.2	7.5Y R7/6橙色	臼状
7	14区	円盤型	無文	3.1	0.8	1.0	7.5Y R8/3浅黄橙色	
8	11区	滑車型	無文	1.7	0.4	1.0	2.5Y R8/3淡黄色	
9	1区	滑車型	無文	2.1	0.4	1.3	10Y R7/4にぶい黄橙色	
10	1区	滑車型	無文	2.8	0.9	1.9	10Y R8/1灰白色	
11	1区	滑車型	無文	2.0	1.2	1.3	10Y R7/4にぶい黄橙色	
12	一括	滑車型	有文	1.7	1.4	2.2	10Y R7/4にぶい黄橙色	
13	10・11区	滑車型	無文	(7.9)	(6.3)	2.0	10Y R7/3にぶい黄橙色	
14	10・11区	滑車型	無文	(8.3)	(6.7)	1.9	10Y R7/3にぶい黄橙色	
15	11区	滑車型	無文	(6.3)	(5.1)	1.7	10Y R8/3浅黄橙色	
16	15区	滑車型	無文	2.0	0.6	1.8	10Y R7/2にぶい黄橙色	
17	10区	滑車型	無文	3.0	1.1	1.5	7.5Y R6/4にぶい黄橙色	
18	13区	滑車型	無文	2.6	1.0	1.6	10Y R8/3浅黄橙色	
19	1区	滑車型	無文	(4.8)	(2.4)	1.3	10Y R7/2にぶい黄橙色	
20	1区	滑車型	無文	3.0	0.3	2.1	10Y R4/1褐灰色	断面が三角形状
21	8区	滑車型	無文	(7.1)	(4.2)	2.1	10Y R7/4にぶい黄橙色	断面が三角形状
22	8区	滑車型	無文	(8.3)	(5.7)	2.2	10Y R8/4浅黄橙色	断面が三角形状
23	10区	滑車型	有文	(5.9)	(1.5)	1.5	7.5Y R2/1黒色	
24	13区	滑車型	有文	4.8	1.4	1.9	7.5Y R6/4にぶい黄橙色	断面が三角形状
25	9区	滑車型	無文	5.5	3.0	2.1	5Y R6/6橙色	断面が「r」状
26	8区	滑車型	無文	7.2	4.9	2.0	10Y R8/3浅黄橙色	断面が「r」状
27	11区	滑車型	無文	7.9	3.7	1.9	7.5Y R6/4にぶい黄橙色	断面が「r」状
28	10・11区	滑車型	無文	9.0	6.7	1.3	7.5Y R6/6橙色	断面が「r」状

1・2は耳柱型耳飾である。1は釘状を呈する。2は円柱状で端面が半球形に張出し片側のみ中心が窪む。また柱状の中央がやや決れる。3～7は円盤型耳飾である。3～5は上・下面とも側面側から中心に向かって窪み臼状を呈する。5は中心が僅かに貫通する。6は中心が窪み穿孔されるが、窪み始めは端面半ばから。7は下面のみ僅かに窪み、中心孔が貫通する。8～12は筒状で小型のものである。8・9は器壁が厚く、円盤型の小型とも考えられる。10は上面がやや外反し、器壁が肥厚しつつ下端径が広がる。11は器壁が薄いままで下端径が広がる。12は有文耳飾であり上端面にのみ5単位で刻目を持つ突起が配置される。13～15は滑車型耳飾で器壁が薄く、内面への張出しが弱い。16は筒状で小型のものである。18小形の滑車型形状である。19は滑車型であるが、円盤状ともみられる。中心孔が広く下端径



第56図 土製円盤・土錘

が広がる。20-24は内面中段が突出し、断面が三角形状を呈する。20は小型のものである。23は有文耳飾であり、断面形の内側への張出しが強く、上面の中心孔付近に刻目を巡らす。また、下端面にも刻目を巡らしている。24は有文耳飾であり、上端面に9単位の突起と、中心への集中沈線が施されている。25-28は上端面が折返し状となり断面がr状になる。25は折り返しが弱い。

第5表 土製円盤・土鍾観察表

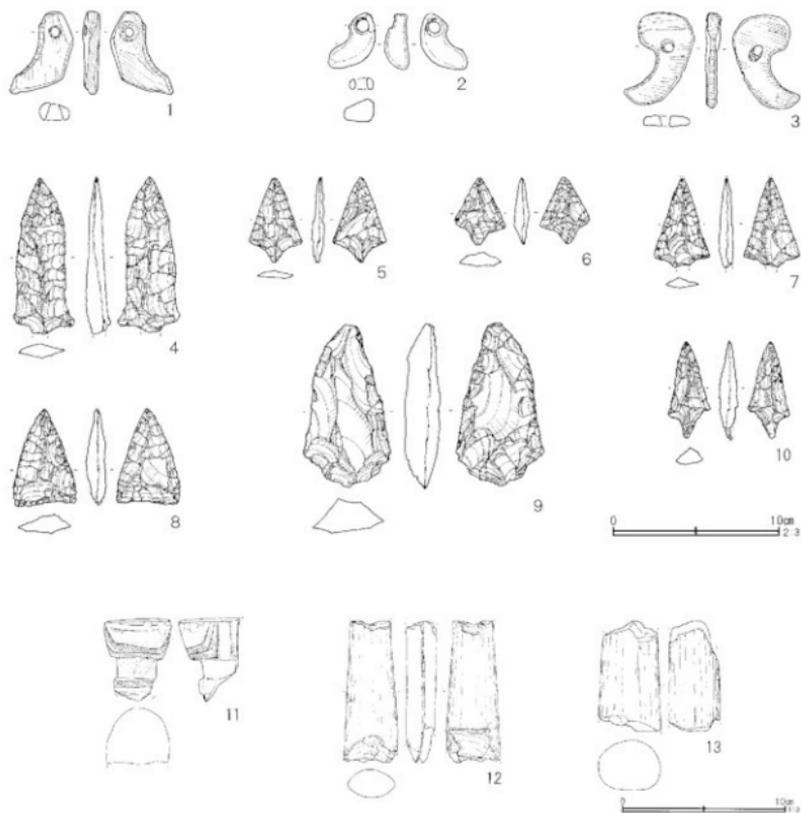
No	出土地点	種類	長軸	短軸	厚み	使用部位	備考
1	4号住居	円盤	3.6	3.6	0.7	胴部	無文系土器?
2	1区	円盤	4.0	3.8	0.7	胴部	無文系土器?
3	13区	円盤	4.9	3.4	0.6	胴部	無文系土器?
4	1区	円盤	4.2	4.0	0.7	胴部	無文系土器?
5	14区	円盤	4.9	3.6	0.9	口縁部	無文系土器?
6	10・11区	円盤	5.1	4.8	0.8	胴部	無文系土器?
7	5号住居	円盤	5.0	4.7	0.7	胴部	無文系土器?
8	5号住居	円盤	5.5	5.4	1.0	胴部	無文系土器?
9	10・11区	円盤	5.4	5.2	1.0	胴部	無文系土器?
10	8区	円盤	7.6	5.8	1.0	胴部	無文系土器?
11	6号住居	円盤	5.2	4.9	2.0	口縁部	菅谷・高井東系土器
12	8区	円盤	4.8	4.5	1.4	口縁部	紐線文系土器
13	6号住居	円盤	6.0	5.5	1.6	口縁部	安行2式土器
14	2区	円盤	5.4	5.0	1.1	口縁部	安行2式土器
15	8区	円盤	5.0	4.5	1.7	口縁部	安行系土器
16	1区	円盤	4.7	4.5	0.8	口頸部または胴部	安行系土器
17	13区	円盤	4.2	4.0	0.7	口頸部または胴部	安行系土器?
18	9区	円盤	3.4	3.3	0.5	口頸部または胴部	安行系土器?
19	5号住居	円盤	4.7	4.3	0.9	口頸部または胴部	安行系土器
20	10区	円盤	5.6	4.9	0.9	口縁部	安行系土器
21	11区	円盤	4.6	4.3	1.2	口縁部	紐線文系土器
22	8区	円盤	5.0	4.7	1.0	口縁部	紐線文系土器
23	一括	円盤	3.8	3.6	1.1	口縁部	紐線文系土器
24	10・11区	円盤	4.2	3.2	1.4	口縁部	紐線文系土器
25	14区	円盤	5.0	4.2	0.7	口縁部	菅谷・高井東系土器
26	10・11区	円盤	6.1	4.5	1.4	口縁部	安行系土器
27	10・11区	円盤	6.4	5.3	1.3	胴部	安行系土器
28	2区	円盤	5.6	5.0	0.8	口縁部	菅谷・高井東系土器
29	1区	土鍾	2.6	1.6	1.2	—	

土製円盤・土鍾(第56図)

ここでは土製円盤・土鍾を一括して図示した。法量等は観察表を参照されたい。

1～28は土製円盤である。1～10は無文のものである。1～4、6～10は胴部片である。5は口縁部片である。10は端面が精緻な丸みを帯び、丁寧な仕上げである。11～15は口縁部片である。11は刻目帯、12は刻目の紐線、13は横長で刻みのある貼付文とブタ鼻状突起、14は波状口縁の波頂部突起が左右に張り出し刻みのある縦長の貼付文、15は波状口縁の波底部下に縦長の貼付文が配置される。16～19は口頸部片または胴部片である。20～26は口縁部片である。20は肥厚して内傾する形状である。21～24は紐線文であり、21・23・24は沈線区画の刻目列、22は刺突列が巡る。25は盲孔が深いボタン状貼付文である。26は肥厚して内傾する形状であり、帯縄文直下に刺突列が巡る。27は胴部片であり、連溝充填文が展開している。28は屈曲する口縁部片であり、2条の凹線が巡る。

土製円盤は土器を転用したものであるが、土器のバリエーションをみると、後期安行系、菅谷・高井東系、紐線文系、無文系と本遺跡に該当する土器群が万遍なく転用されている。時期差はみられず集落



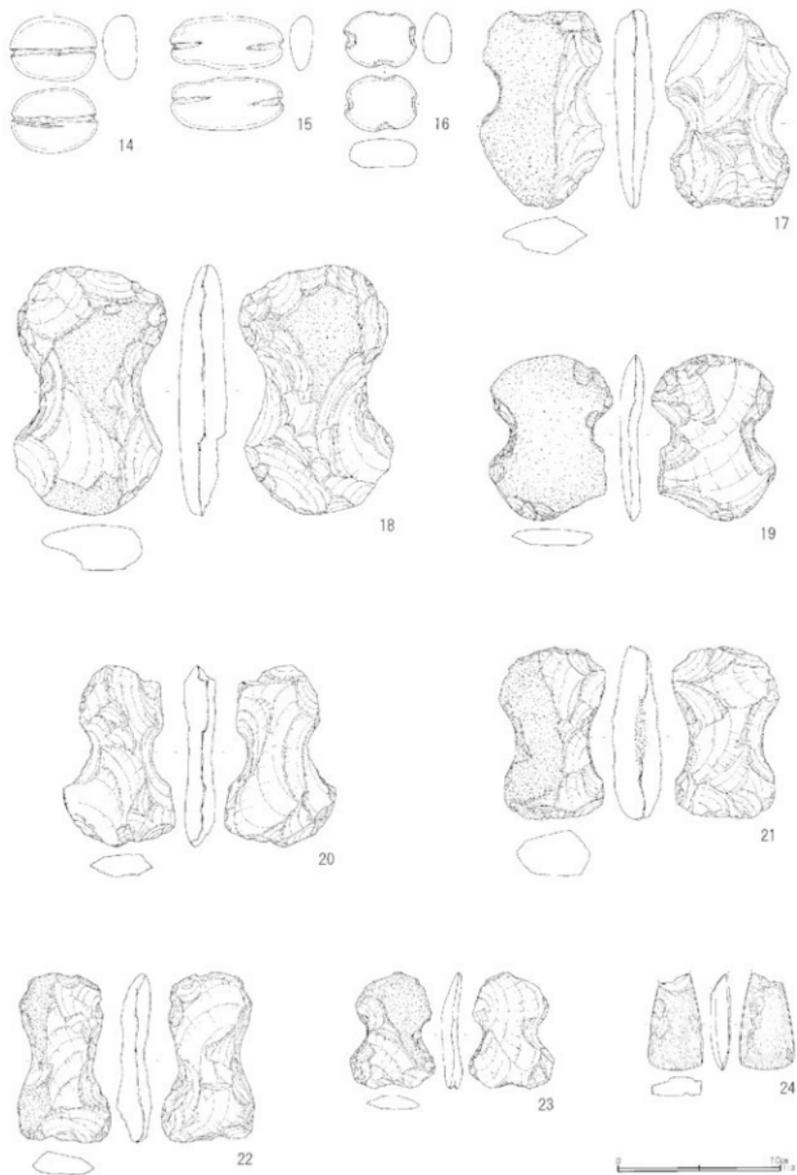
第57図 石製品・石器(1)

が存在する間に製作・使用されていると考えられる。

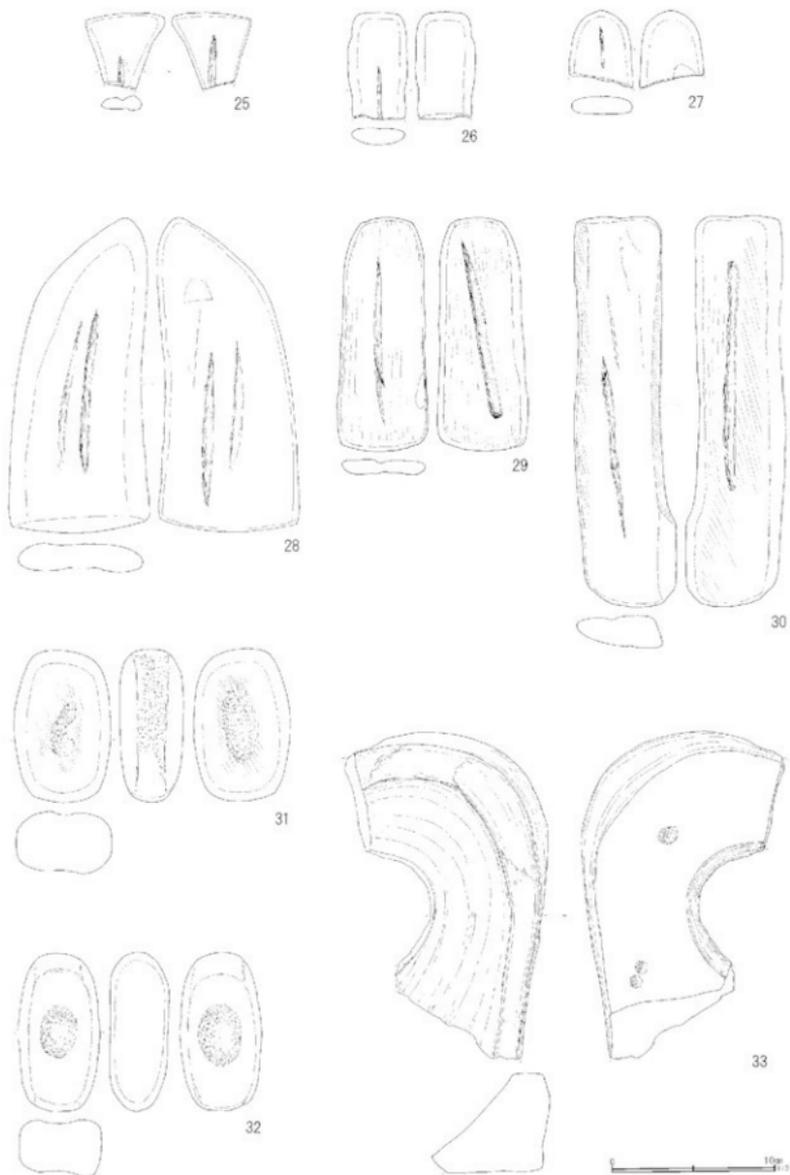
29は土錘であり、1点だけの出土である。紡錘状を呈し、扁平である。側面を長軸方向、表裏面を短軸方向に1条の溝が巡る。

(6) 石製品・石器(第57～59図)

ここでは石製品・石器を一括して図示した。石製品は勾玉3点、石刺2点、石棒2点が出土している。また、石器は石鏃27点、尖頭器1点、石錘3点、打製石斧37点、磨製石斧1点、砥石15点、磨石・敲石31点、石皿1点、凹石2点が出土している。この他、楕円状で扁平な形状の礫を2,340.7g検出している。また、黒曜石・チャート・頁岩等の剥片を1,112.2g検出している。図化にあたっては、代表的なものを抽出して行っている。法量等は観察表を参照されたい。



第58圖 石製品・石器(2)

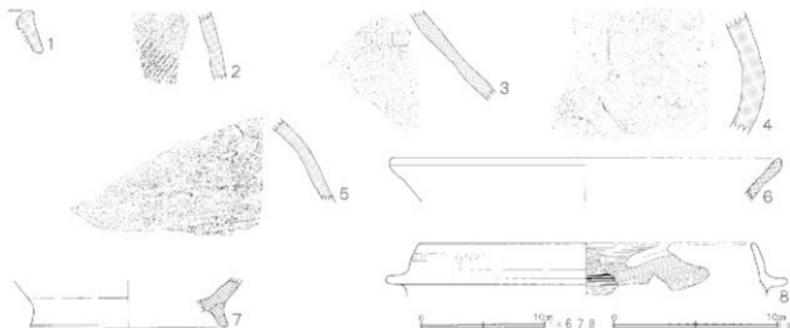


第59圖 石製品・石器(3)

第6表 石製品・石器観察表

押図	No	出土地点	種類	石質	重量	長さ	最大幅	厚み	備考
第57図	1	3区	勾玉	滑石	2.6	2.50	1.90	0.55	
第57図	2	4号住居	勾玉	翡翠	1.5	1.70	1.40	0.75	
第57図	3	4号住居	勾玉	滑石	2.7	2.85	2.10	0.50	
第57図	4	5号住居	尖頭器	頁岩	4.2	4.75	1.85	0.65	
第57図	5	13区	石鏃	チャート	1.0	2.60	1.60	0.40	
第57図	6	5号住居	石鏃	チャート	1.0	2.05	1.50	0.45	
第57図	7	5号住居	石鏃	頁岩	1.4	2.70	1.65	0.45	
第57図	8	一括	石鏃	チャート	2.7	2.95	1.95	0.60	
第57図	9	13区	石鏃?	チャート	12.3	5.00	2.70	1.10	尖頭器の未製品か?
第57図	10	2号住居	石鏃	チャート	1.4	3.00	1.25	0.55	
第57図	11	3区	石刻	頁岩	79.2	5.10	-	3.90	
第57図	12	一括	石刻	粘板岩	89.8	8.75	3.35	1.90	
第57図	13	1区	石棒	頁岩	119.0	7.90	3.80	3.10	
第58図	14	3区	石鏃	粘板岩	62.5	4.05	5.30	1.05	
第58図	15	4号住居	石鏃	砂岩	53.6	3.30	6.90	1.45	
第58図	16	13号土坑	石鏃	安山岩	35.7	3.10	4.50	1.75	
第58図	17	2号住居	打製石斧	ホルンフェルス	229.2	12.20	7.65	2.50	
第58図	18	一括	打製石斧	ホルンフェルス	481.2	15.40	9.50	3.00	
第58図	19	10区	打製石斧	粘板岩	129.2	10.30	7.60	1.45	
第58図	20	13区	打製石斧	ホルンフェルス	156.0	11.20	6.85	1.90	
第58図	21	14区	打製石斧	砂岩	249.6	10.70	6.55	3.05	
第58図	22	一括	打製石斧	砂岩	117.2	10.50	5.70	2.10	
第58図	23	1区	打製石斧	ホルンフェルス	43.8	7.20	5.20	1.20	
第58図	24	1区	磨製石斧	蛇紋岩	38.5	5.90	3.35	1.20	
第59図	25	1区	砥石	安山岩	18.6	4.75	4.85	0.95	
第59図	26	3区	砥石	安山岩	33.6	6.65	3.70	1.05	
第59図	27	8区	砥石	安山岩	22.5	4.80	3.90	1.10	
第59図	28	10区	砥石	安山岩	410.3	19.40	8.70	1.90	
第59図	29	13区	砥石	安山岩	112.5	14.45	5.55	1.00	
第59図	30	1区	砥石	安山岩	366.6	24.15	6.10	2.00	
第59図	31	14区	磨石・砥石	砂岩	402.8	9.45	5.90	3.90	
第59図	32	2号住居	磨石・砥石	砂岩	275.0	9.85	5.10	3.70	
第59図	33	一括	石皿	緑泥片岩	1,653.9	20.20	12.40	6.15	

1～3は勾玉である。1・3は滑石製で扁平である。2は翡翠製で小型である。4は尖頭器である。基部を欠損する。5～10は石鏃である。5～7・9・10は有茎であるが、7は基部を欠損し、9は尖頭器の未製品の可能性がある。8は無茎である。11・12は石刻である。11は柄頭部である。縁取状に巡る、帯状部に格子目状の刻目が施される。12は両側面に刃部を作出している。13は石棒である。14～16は石鏃である。14・15は横位の有溝であり、14は全周し、15は部分的である。16は礫石鏃であり、4方向を打ち欠いている。17～23は打製石斧である。いずれも分銅型である。17・18は大型、19～22は中型、23は小型である。24は磨製石斧である。小型で定角型であり、丁寧に研磨されている。25～30は砥石であり、いずれも有溝である。25～27は小型であり、25は楕形、26は長方形、27は楕円形を呈する。29は中型である。28・30は大型である。置き砥石か。31・32は磨石である。両面に敲打痕がみられる。33は石皿である。急激に窪み、底面は円形に孔があく。



第60図 第1号井戸跡出土遺物（中世）

2 中世の遺物

第1号井戸跡出土遺物（第60図）

1～5は常滑産甕である。1は灰黄褐色を呈する口縁部破片であるが、折り返し口縁部の形状から13世紀後半の所産と考えられる。2は淡赤褐色を呈する胴部片であり、外面にタタキ目が残る。3は暗赤褐色を呈する胴部片であり、外面にタタキ目が残る。4は赤褐色を呈する胴部片であるが、外面に自然釉が厚くかかる。5は暗赤褐色を呈する胴部片であり、外面にタタキ目が残る。

6・7は在地産瓦質土器である。6は暗灰褐色を呈する鉢の口縁部破片であり、復元口径31.4cmを測る。須恵質で堅緻に焼成されている。7は暗灰褐色を呈する高台付底部の破片であり、高台径15.8cmを測る。内外面ともに表層の剥落が著しい。

8は土師質土器羽釜である。浅黄橙色を呈する口縁部片であり、口径28.2cmを測る。口縁部外面はタタキ後ナデを施し、内面は横位ハゲ目が残る。羽部は1.7cmを測り、下面にススが附着している。破損面より体部の製作後に貼付されたとみられる。

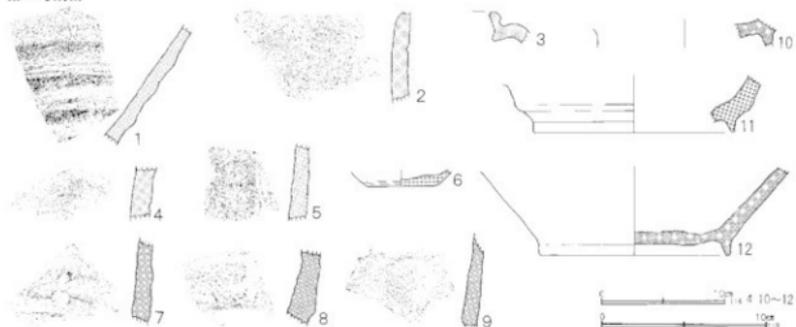
第1号溝跡出土遺物（第61図）

1は常滑産陶器である。1は片口鉢、または捏ね鉢と考えられる、体部片である。灰白色を呈し、外面にナデが巡る。2は灰褐色を呈する甕の胴部片である。3はにぶい赤褐色を呈する口縁部片であり、屈折して直立する形状である。13世紀頃の所産か。

4・5は渥美産陶器であり、灰色を呈する甕の胴部片である。4・5ともに焼成は良好である。

6～12は在地産瓦質土器である。6は灰黄色を呈する底部片である。復元底径4.3cmを測る。焼成が甘く、風化しつつある。7は灰色を呈する甕の胴部片である。外面にナデが巡る。焼成は良好である。8は灰白色を呈する甕の胴部片である。内外面ともに表層の剥落が著しい。9は灰黄色を呈する甕の胴部片である。焼成が甘く、風化しつつある。10は底部片であり、復元底面を14.2cmとして図示した。高台部は欠損し、内外面ともに表層の剥落が著しい。11は底部片であり、復元底径16.3cmを測る。内外面ともに表層の剥落が著しい。12は底部片であり、底径15.3cmを測る。内外面ともに表層の剥落が著しい。なお、1号井戸跡の遺物と接合関係が確認された。

第1号溝跡



8区



第61図 第1号溝跡・8区出土遺物(中世)

8区出土遺物(第61図)

1は青磁であり、龍泉窯産と考えられる。碗の底部片であり、底径6.1cmを測る。底部内面に割花文が施されている。高台部の見込みは削り出されている。

V 調査のまとめ

昭和63年当時の届出によると、調査区は500㎡であるが、遺物の出土量は33箱にのぼり豊富である。概要で述べたとおり、遺構について詳細が不明なため、遺物より考察をおこない、まとめとする。

1 縄文時代のまとめ

土器については、縄文時代後期後半が主体となる出土状況であり、晩期への継続性はみられなかったことから、西城切通遺跡内の集落の終焉時期が明瞭となったことは成果であろう。時期的には堀ノ内式から安行2式までが認められたが、加曾利B3式までの遺物量は僅かである。加曾利B3式までの集落については存在の可能性を示唆するに留めたい。さて、曾谷式以降の遺物量から考察すると、安行式では「安行1式>安行2式」となり、曾谷・高井東式では古い様相をもつ、口縁部に縄文が施文され内湾する深鉢が一定量みられた。しかし、口縁部の文様が隆起帯を主体とする深鉢や、杵状化したモチーフがみられるなど、新しい要素をもつ個体がより多く見受けられた。このことから、曾谷式段階には集落が営まれ、安行1式段階で最盛期となり、安行2式段階まで継続すると推察する。地域的な集落の変遷をみると、近接地では上葛和田遺跡で加曾利B式段階の集落があるものと考えられ、前段階または並行する遺跡と考えてよい。しかし、晩期は本遺跡近辺ではみられず、諏訪木遺跡や上敷免遺跡などとは一定の距離が開く。弥生時代になると飯塚遺跡から再葬墓群が検出されている。晩期～弥生時代にかけての本遺跡近辺の空白期を解明することが今後の課題と言えよう。

耳飾については、土製のみである。無文のものと、有文であるが加飾が少ないものが28点確認された。その比率では、無文耳飾が大半を占める。一般的には、縄文時代後期後半の耳飾は、大型化と加飾性を高めながら、晩期へと継続する傾向とされている。本遺跡の耳飾は、無文耳飾は大型のものがみられるが、形状に関しては多様であった。有文耳飾は小型のものであり、透かし状などの装飾性の高いものはみられなかった。後続する安行3a式以降を主体とする諏訪木遺跡においては、無文と有文との比率は同程度であり、有文については装飾性の高まりがみられる。本遺跡と継続してみると耳飾の時期的な有様が明瞭となる。

土偶については、9点の破片を確認した。その中で形態はA・Bに分類が可能である。A類は扁平であり、乳房の表現が貼瘤となるもの(第54図1・2)と、B類は肉厚であり、乳房の表現が垂涎状の貼付文となるもの(第54図3・4)である。A・B類ともに所謂、山形土偶の系譜を引くものであり、乳房の表現に違いがみられるが、粘土を横長に貼付し中央に窪みを付ける腹部の表現は共通する。A類は沈線や刺突による文様がみられず、身体的造形のためのシンプルな構成である。同様の特徴を持つ類例は、旧・岡部町原ヶ谷戸遺跡にみられた。1が出土した第6号住居跡は安行1～2式段階の土器が出土しており、さらに瘤付土器が伴出している点は興味深い。B類は乳房と肩部が連結して表現される。ミズク土偶への過渡的要素がみられ、山形土偶の最終段階を考察する良好な資料といえる。

2 中世のまとめ

中世の遺構・遺物が検出されたことは、当該期の調査事例が少ないため、貴重な成果といえよう。出土遺物としては、北関東を中心に分布がみられる、在地瓦質土器の出土や常滑・渥美焼等の広域流通品の陶器類、中国製磁器である龍泉窯青磁碗などが検出された。出土比率をみると、在地瓦質土器が

多い傾向である。この種類や比率は、13世紀後葉から14世紀中葉の北関東における遺物出土の特徴と合致する。微量ながら、流通品や舶来物の出土は、それらの入手可能であった富裕層に関連する遺構の存在が想起される。

西城地区を含む、旧妻沼町域は「長井庄」と称された地域である。西城切通遺跡の南側には、平安時代の後半ごろと考えられる、土着した貴族である藤原道宗がかまえた館とされる西城城跡、西側にはその後藤原氏に替わって長井庄を支配した、斎藤氏の館とされる実盛館が所在する。西城切通遺跡より出土した龍泉窯青磁碗は13世紀中～14世紀初頭の所産と考えられる。この時期は、斎藤別当実盛の後裔にあたる一族が西城地区周辺にいたとされているが、今回の報告では遺構の概要が分からないため、具体的な状況を明らかにすることはできない。ただし、溝跡・井戸跡という遺構名からは、武士の館に備わる施設としての連想が可能ではないか。

参考・引用文献 紙数の都合で主要な文献のみ記載した。

- | | |
|-------------|----------------------------------------------------------|
| 新屋雅明ほか | 1988 『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第74集 |
| 市川修 | 1974 『高井東遺跡調査報告書』埼玉県教育委員会 |
| 市川修・荒川弘 | 1981 『妻沼西南遺跡群Ⅰ—道ヶ谷戸条理・道ヶ谷戸・飯塚南—』妻沼町教育委員会 |
| 市川修 | 2009 「熊谷市西城切通遺跡の土器と土偶—前原儀久氏採集資料—」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第3号 |
| 植木弘 | 1993 「安行式期土偶の研究その1—山形土偶系統と遮光器土偶系統の展開—」『埼玉考古』第30号 |
| 上野修一 | 1989 「北関東における後・晩期土偶変遷について（上）」『栃木県立博物館紀要』第6号 |
| 上野修一 | 1991 「北関東における後・晩期土偶変遷について（下）」『栃木県立博物館紀要』第8号 |
| 上野修一 | 1995 「栃木県」『土偶シンポジウム3 栃木大会関東地方後期の土偶—山形土偶の終焉まで—』土偶とその情報研究会 |
| 熊谷市教育委員会 | 1988 『寺東・八反田・東耕地・入川・深町遺跡』 |
| 熊谷市教育委員会 | 2000 『寺東遺跡・別府氏館跡』 |
| 熊谷市教育委員会 | 2000 『三ヶ尻遺跡Ⅲ』 |
| 黒坂禎二 | 2002 『池上ノ諏訪木』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第283集 |
| 小林圭一 | 2008 「窟付土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション |
| 末木啓介・藤沼昌泰 | 2005 『後谷遺跡第4次発掘調査報告書第2分冊』橋川市教育委員会 |
| 鈴木正博 | 1980 「『曾谷式』研究序説」『古代探叢—滝口宏先生古希記念論文集—』早稲田大学出版部 |
| 高村敏則 | 1994 『橋屋遺跡』花園町教育委員会 |
| 林克也 | 2008 「高井東式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション |
| 村田章人 | 1993 『原ヶ谷戸・滝下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第127集 |
| 村田章人ほか | 1993 『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集 |
| 妻沼町誌編纂委員会 | 1977 『妻沼町誌』妻沼町役場 |
| 妻沼町文化財編集委員会 | 1981 『妻沼町の文化財』妻沼町教育委員会 |
| 渡辺清志 | 2007 『諏訪木Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第336集 |



第62図 妻沼公民館収蔵土器

VI 附編

ここでは、旧妻沼町教育委員会において寄贈を受けた資料について、附編として図示することとした。この資料は郷土史家の故・前原儀久氏により西城切通遺跡周辺で採集されたもので、寄贈され妻沼公民館にて展示されていたものである。報告の機会に恵まれなかった資料であるが、一部は「埼玉県立史跡の博物館紀要第3号」にて市川修氏により報告されており、それらを除き、資料化した遺物について報告するものである。

妻沼公民館収蔵土器（第62図）

1は安行1式の平口縁深鉢の口縁部片である。外へ開く形状で、帯縄文が巡り縦長で窪む貼付文が配置される。2は安行2式の平口縁深鉢の口縁部片である。内湾する形状であり、帯縄文を主体とするが、杵状沈線区画と口端に突起となる貼付文が配置される。

3～7は曾谷・高井東式である。3～6は波状口縁深鉢の口縁部片である。3は山形の波頂部と波状の中間に縦長の貼付文が配置される。口縁部は2条の凹線が口縁に沿う文様構成である。4は口縁部に3条の凹線が巡り、波底部に2つの窪みのある縦長の貼付文が配置される。口頸部には斜位の連続沈線が施される。5は3条の凹線による口縁部文様構成である。6は口縁部が屈曲して内傾する形状である。波底部に縦長の貼付文が配置され、貼付文は上下端に貼瘤により加飾される。口縁部文様帯は隆起帯と杵状沈線区画で構成されており、下部は刻目帯となっている。口頸部に横位と斜位の沈線がみられる。7は平縁の口縁部片であり、深鉢か。復元口径21.9cmを測る。地文は無文であるが、口縁部に3つの窪みを持つ縦長の貼付文が配置される。

いずれも縄文時代後期後半に位置づけられる土器群であることから、西城切通遺跡を補足する資料として捉えることが可能であり、参考としていただければ幸いである。

写 真 图 版



第 2 号住居跡第 5 图 2



第 2 号住居跡第 6 图 45



第 2 号住居跡第 7 图 87



第 2 号住居跡第 7 图 88



第 2 号住居跡第 7 图 95



第 2 号住居跡第 8 图 128

图版 2



第 6 号住居跡第 16 图 53



第 6 号住居跡第 17 图 104



9 区第 2 号土坑第 19 图 2



9 区第 3 号土坑第 20 图 1



9 区第 6 号土坑第 22 图 1



9 区第 14 号土坑第 22 图 1



1 区第 24 图 44



1区第26图73



1区第26图84



1区第26图96



1区第28图141



1区第28图150



2区第31图59

图版 4



9区第35图27



9区第35图53



9区第36图86



9区第36图94



13区第44图3



13区第45图50



13区第45图68



13区第47图114



13区第47图127



13区第47图135



14区第49图52



14区第49图75

図版 6



14区第48図9



17区第52図18



8区第61図1(青磁)上から



8区第61図1(青磁)横から



第4図
1-6
7-9・11・12
13-15・10

第1号住居跡



第 5・6 图

1・3・5

12・16・18

26・9・21・25・32

28・34・36

38・41・44・46・47

第 2 号住居跡 1



第 6・7 图

49・51・54・56・59

58・61・64

68・70・72・65

74・75・79・81・83・85

84・86・89・94

第 2 号住居跡 2

图版 8



第 8・9 图

131・134 - 137・139・98
96・99・100・103・104
107・109・111・110・114・117・106
118・119・121・122・124
127・129・130・125・126

第 2 号住居跡 3



第10图

1 - 5
6 - 11
12 - 15
16 - 20

第 3 号住居跡 1



第10图
21 - 24 · 26
27 - 31
25 · 32 - 34

第3号住居跡2



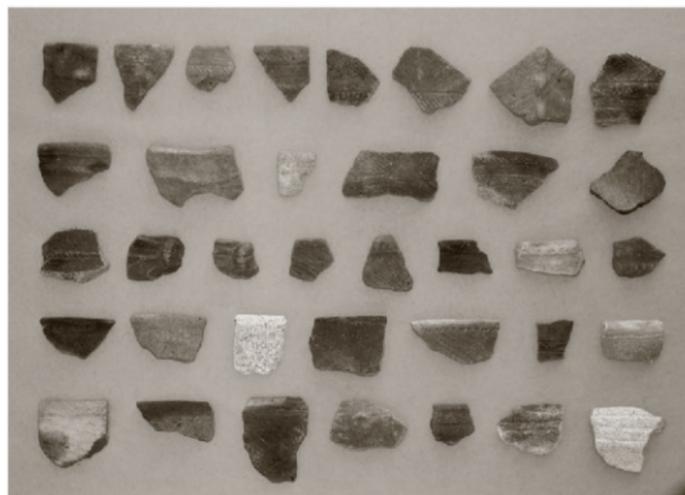
第11图
1 - 6
10 · 7 - 9 · 11 · 12
13 - 16
17 - 23
24 - 30

第4号住居跡1



第11图
31 - 36
37 - 42
43 - 48
49 - 53

第4号住居跡2



第12・13图
1・3・4・8・9・11・13・14
16・18・19・21・23・24
25・28・30・32・34
36・37・39・41・42・44・45
46・48・50・52・54・56

第5号住居跡1



第13·14图

57·58·60 - 64·66
68·71·73 - 76
77 - 79·81 - 84
86 - 89·93·94·97
100 - 105

第5号住居跡2



第15图

1·2·4 - 7
8·9·11·12·15·16
18 - 20·22 - 25
26 - 29
30 - 32·34·37

第6号住居跡1



第15・16图
38・39・42・45・48
46・49・50・52・54・57・58
59・62・64
83・68・81・80・66・67
77・69・78・84

第6号住居跡2



第17图
98 - 105
108 - 111
85 - 89 - 95 - 90
91・92・94・93・97・96

第6号住居跡3



第18图
1-5
6-9

2区住居跡



第19・20图
9区1号土坑 9区3号土坑
2・1 2・3
9区2号土坑
1・3-7
C区3号土坑
1-5

9区第1・2号土坑、9区C区第3号土坑



第21图
1-5
6-9
10·11·15
12-14

第4号土坑



第22图
9区6号土坑(左列)
2·3
4·5
6
7·8
9区7号土坑(中)
1-3
4-6
7-9
10·11
9区14号土坑(右列)
2
3

9区第6·7·14号土坑



第23图
豎穴状遺構
1 - 5

16区豎穴状遺構
1 - 5

豎穴状遺構・16区豎穴状遺構



第24图

1・3・5・9・10・13・14
15・17・18・20・21・19
23・24・26・28・29
31・34・37・39
41・43・45・46

1区1



第25·26图

48·50·52·54·51

56·58·61·63

60·64·67

75·76·79·69

80·83·85·87·89

1区2



第26·27图

92·94·95·97·99·102

103·108·121·109

110·112·114·115·117·119

120·122·124·127

128·130·132·134·135

1区3



第28・29图

136・137・140・142

143・145・147・148・152

157・159・161・163・165

164・167・169・171・174・177

1区4



第29图

178・180・182・183

185・186・188・190・192

197・195・198・201・203

1区5



第30图
1 - 4 · 6 · 8 - 10
11 · 12 · 15 · 18 - 21
23 · 25 · 26 · 30 · 31 · 33 · 34
36 - 38 · 42 · 49
40 · 44 · 45

2区1



第30·31图
66 - 68 · 71 · 70 · 69
63 · 64 · 62 · 47 · 48 · 50 · 51
52 - 56
57 · 58 · 60 · 61 · 65

2区2



第32图
 1·3·5·8·9
 10·13·17·19
 20·24·27·28
 29·32·37·38
 40·43·45·46·49

3区1



第33图
 64·67·59
 56·58·60·63
 71·69·70·53·55
 73·74·72·68

3区2



第34图
1 - 7
8 - 14
15 - 22
23 - 29

8区1



第34图
30 - 37
38 - 42
43 - 47
48 - 55
56 - 62

8区2



第35图

1 · 4 · 5 · 8 · 10 · 12 · 15
18 · 24
25 · 26 · 30 · 28 · 31 · 34
35 · 37 · 39 · 40
44 · 46 · 52

9区1



第36 · 37图

54 · 59 · 61 · 63
65 · 68 · 74
77 · 79 · 80 · 83 · 85 · 87 · 90
91 · 92 · 95 · 97 · 100
101 · 103 · 105 · 107 · 110 · 111

9区2



第37图
139 - 144
113 · 115 - 120
121 · 122 · 124 · 125 · 127
128 · 131 - 134 · 136 · 137

9区3



第38图
1 - 3 · 5 · 7
11 · 13 - 19
20
21 · 23 · 24 · 26 · 27
31 · 29 · 32 · 34 · 35

10区1



第38-40图

36·37·39·41·42

44·49

51·60

61·64·67·69·71

72·76·79

10区2



第40图

101·102·105·106·108·109·111

112·116·87

117·80·83

90·91·93·95·97·98

10区3



第41图
1 - 4 · 6 · 7 · 10 · 11
12 - 15 · 18 - 20
21 · 24 · 25 · 27 - 29 · 31
34 - 36 · 38 · 40 · 41
42 - 45 · 48 - 50

11区 1



第42 · 43图
51 - 54 · 56 · 57
58 - 64
65 · 66 · 68 - 72
74 · 76 · 80 · 81 · 83
86 · 88 - 90

11区 2



第43图
92 - 99
100 - 108
109 · 110 · 112 · 114
113 · 111 · 116 · 115

11区 3



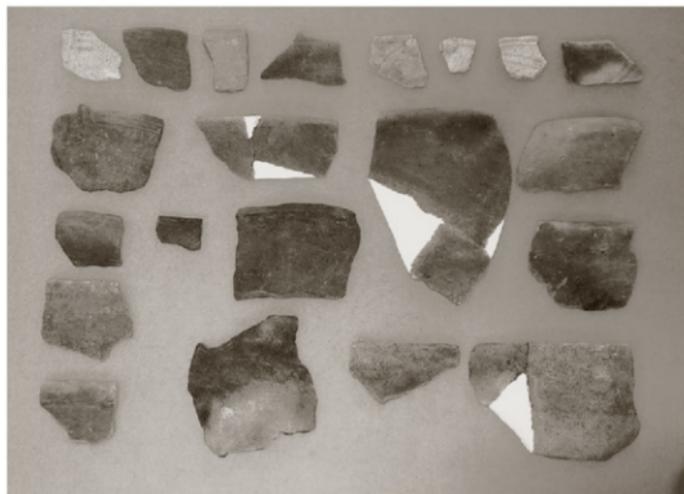
第44图
1 · 2 · 4 · 6 · 8 - 10
11 · 12 · 14 · 16 · 17 · 19 · 21
22 - 25 · 27 · 28
29 - 33 · 36

13区 1



第44~46图
37·39·41·43·45
47·49·51·54
55·57·59·60·62
63·65·67·69·72·73·75

13区 2



第46·47图
77·79·81·82·84·87
89·90·95
91·92·94·102
104
108·109·113

13区 3



第47图

120 · 115 - 119 · 121
122 · 124 · 126 · 132
136 - 138
128 · 130 · 131

13区 4



第48 · 49图

1 - 4
5 · 6 · 12 - 15 · 17 · 18
19 - 25
26 - 29 · 34 - 36 · 40
41 - 44 · 46

14区 1



第49图
76·78·80·81·83·85
50·51·53·56
57-62
63-69
70-75

14区 2



第50图
1-5
6-11
12-17
18-23

15区

第51图
1·2·3
4
5
6-8
9·10

第52图
1-3
4-6
7-10
11-14
15-17·19



16区·17区

第53图
1-7
8-13
14-20
21-26



C区



土偶第54图1 表面



土偶第54图3 表面



土偶第54图1 裏面



土偶第54图3 裏面



土偶第54图2表面



土偶第54图4表面



土偶第54图2裏面



土偶第54图4裏面



第54图
5·6
7·9

土偶第54图 5 - 9



第55图

7·20·24·4·5·6·3

1·2·8·9·16·11·12·10·17·18

23·25·15·13·14·22·21·19·26·27·28

土製耳飾

第56図
1 - 8
9 - 14
15 - 22
23 - 29



土製円盤・土錘

第57・58図
1 - 8
14 - 16・9 - 10
11 - 13



石製品・石器1



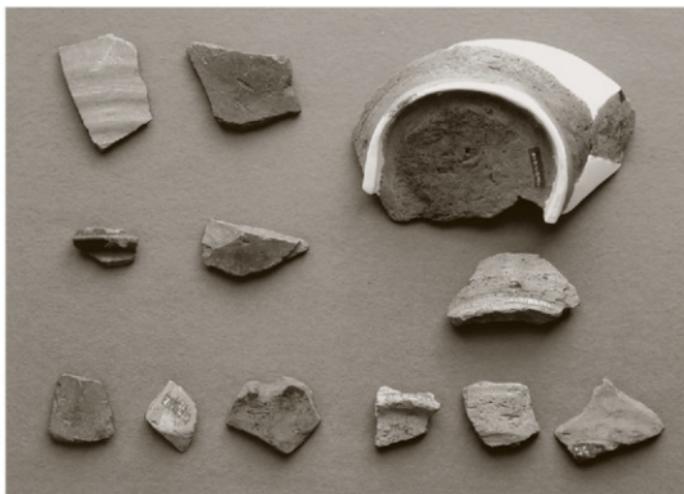
第58・59图
17・22
23・24
25 28・29・30 33
26・27 32

石製品・石器2



第60图
1-4
5-6
7-8

第1号井戸跡



第61图

1·2·12

3·4·11

5·6·9·10·8·7

第1号清跡



第62图

1-4

5-7

妻沼公民館収蔵土器

報告書抄録

ふりがな	にしじょうきりとおしいせき							
書名	西城切通遺跡							
副書名	—							
巻次	—							
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第6集							
編集者名	蔵持 俊輔							
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所在地	〒360 0107 熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062							
発行年月日	西暦2010(平成22)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°′″)	東経 (°′″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西城切通 遺跡	熊谷市西城字切通 157番地	11202	61-022	36° 12′ 10″	139° 23′ 25″	19880805 ~ 19881215	500	県営ほ場 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
西城切通 遺跡	集落跡	縄文時代	住居跡 土坑 竪穴状遺構	6軒 14基 1基	縄文土器・石器 土製品・石製品	縄文時代後期後半の 集落跡、遺物包含層 の調査。		
		中世	溝跡 井戸跡	1条 1基	陶器・磁器 在地系土器			

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第6集

西 城 切 通 遺 跡

平成22年 3月31日発行

発行 / 埼玉県熊谷市教育委員会

印刷 / 株式会社ぎょうせい